

# 京都府遺跡調査報告集

第187冊

栢ノ木遺跡第13次

2023

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



基壇建物 S X01 (北西から)



(1)調査区全景(上が南)



(2)北辺階段(南から)

## 序

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和 56 年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行うとともに、その成果を広く公開し、考古学・歴史学研究や、地域の歴史教育などにも活用していただけるように、さまざまな取り組みを実施してまいりました。また、これまで発掘調査を実施したすべての遺跡の調査報告は、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、それぞれの遺跡がもつ考古学的・歴史学的な重要性について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する栢ノ木遺跡第 13 次調査は、井手町新庁舎等建設に伴い、同町の依頼を受けて実施しました。今年度、整理等作業及び報告書作成を実施し、その成果をまとめることができましたので、『京都府遺跡調査報告集第 187 冊』としてここに刊行する次第です。

調査地は、橘諸兄が創建したと伝わる井手寺跡の寺域東隣接地にあたります。大正 12 年、早く「井手寺址」として梅原末治氏による調査報告がなされているように（『京都府史蹟勝地調査會報告』第 4 冊）、この寺は地元にとっても重要な遺跡です。今次の調査では塔基壇をはじめ、それに伴う階段や雨落ち溝、石敷を良好な状態で確認しました。また、出土軒瓦には、井手寺跡や平城宮跡、恭仁宮跡、山城国分寺跡、南山城地域所在の古代寺院、平安宮跡、吉志部瓦窯跡、栗栖野瓦窯跡など同範の軒瓦が、多数含まれていることがわかりました。そのほか、奈良三彩や緑釉・灰釉陶器、越州窯系青磁、施釉垂木先瓦や鬼瓦、700 余点の鉄釘や風鐸の風招と舌、富壽神寶などの金属製品も数多く出土しています。これらの調査成果は、橘氏の絶大な権勢と盛衰を示すばかりでなく、地域史や日本史研究を進めるうえで、重要な調査成果となることを確信しています。なお、塔基壇は、井手町の深いご理解により、現地保全されたことを報告いたします。最後になりましたが、発掘調査をご依頼いただきました井手町をはじめ、ご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、心より御礼を申し上げます。

令和 5 年 3 月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理 事 長 井 上 満 郎



# 例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりである。

栢ノ木遺跡第13次発掘調査

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	現地調査期間	経費負担者	執筆者
栢ノ木遺跡第13次	福喜郡井手町大字井手 小字東高月	令和2年12月21～ 令和3年5月26日	井手町	福山博章 田中秀弥 溝口泰久 吉岡孝紘 瀬部和宏

3. 現地調査・整理作業・報告書作成にあたって、下記の方々から、ご指導・ご助言をいただきました。記して感謝いたします(五十音順、敬称略)

相原嘉之 青木 敬 青山加奈子 青柳泰介 浅井 猛 網 伸哉 諫早直人 石川康紀 石田由紀子  
一瀬和夫 伊藤旭人 伊藤慶人 稲本悠一 伊野近富 井上直樹 今井晃樹 今井哲哉 今井真由美  
今尾文昭 茨木敏仁 岩戸晶子 上村和直 植山茂 内田真雄 梅本康広 大江克己 大坪州一郎  
大西貴夫 大野壽子 小笠原好彦 小田裕樹 小野大輔 大脇 潔 奥井智子 奥村茂輝 尾野善裕  
小澤 毅 梶川敏夫 柏田由香 金原裕美子 金原正子 金田明大 神野いくみ 河田哲弥 河村 卓  
菊井佳弥 岸 泰子 國下多美樹 桑原久男 熊谷舞子 高 正龍 古閑正浩 近藤義行 後藤信義  
坂本 俊 桜木 潤 佐藤重聖 狭川真一 篠部直茂 芝野康之 清水昭博 清水真好 清水みき  
鳥田 豊 十文字 健 新尺雅弘 神野 恵 杉本 宏 鈴木郁哉 鈴木拓也 鈴木久史 清野孝之  
関根俊一 高岡桃子 高橋克壽 高橋潔 武田和哉 橘悠太 田中慎一 田中元浩 田中龍一  
塚本敏夫 辻 康男 鶴来航介 戸花亜利洲 豊島直博 堂坂美仁 中島 正 中谷俊哉 中塚 良  
中村武生 中村大介 中川二美 仲林篤史 難波美緒 南部裕樹 長友朋子 西崎卓哉 西田倫子  
西田紀子 二村真司 西森正晃 西山 集 丹羽崇史 箱崎和久 橋本英将 浜中邦弘 原田憲一郎  
原田早季子 廣岡孝信 広瀬和雄 廣瀬 覚 備前知世 福岡澄男 福島啓人 福田さよ子 藤井淳弘  
藤本祥人 夢 堀 大輔 前田仁暉 前田義明 松島隆介 松野元宏 松葉竜司 松吉祐希 松崎健太  
森岡秀人 森田真史 百瀬正恒 三井 淳 南 孝雄 宮原晋一 三好孝一 三好 玄 村上由美子  
村瀬 陸 村田裕介 目黒新悟 八十島豊成 柳原麻子 山内基樹 山岸常人 山下大輝 大和 祐  
山中 章 山本雅和 山田邦和 楊 曼亭 嬰川原野 吉田祐太 米村英昭 米村典子 李 暉  
若杉智宏 渡辺幸奈 和田一之輔 和田晴吾

4. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土地院標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。  
5. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課編集担当が行った。  
6. 現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係調査員武本典子が行った。

# 本文目次

## 栢ノ木遺跡第13次発掘調査報告

1. はじめに	1
2. 位置と環境	
1) 地理的環境	2
2) 歴史的環境	2
3) 井手寺跡の既往の調査	4
3. 調査の経過と方法	
1) 調査の経過	4
2) 調査の方法	5
3) 調査グリッドの設定	5
4) 遺構番号について	6
5) 報告書作成について	6
4. 基本層序	6
5. 検出遺構	
1) 平安時代	9
2) 中世以降	15
6. 出土遺物	
1) 瓦埴類	16
2) 土器	56
3) 金属製品	61
4) 石製品	67
7. 総括	
1) 栢ノ木遺跡出土の奈良時代の軒瓦について	67
2) 栢ノ木遺跡出土の平安時代の軒瓦について	70
3) まとめ	75
付編 栢ノ木遺跡から出土した石材について	87

## 挿 図 目 次

### 柘ノ木遺跡第13次発掘調査

第1図	柘ノ木遺跡周辺地形分類図	2
第2図	柘ノ木遺跡周辺主要遺跡分布図	3
第3図	調査グリッド配置図	5
第4図	調査区東壁土層断面図	7
第5図	調査区南壁土層断面図	8
第6図	調査区平面図(平安時代)	10
第7図	富壽神寶出土状況図	10
第8図	基壇建物S B01平面図	11・12
第9図	北辺階段平面・立面・断面・復元図	13
第10図	基壇及び基壇外周断面図(北側)	14
第11図	基壇及び基壇外周断面図(南側)	15
第12図	地覆・犬走り・雨落ち溝・石敷断面図	15
第13図	調査区平面図(中・近世)	16
第14図	出土遺物実測図1(軒丸瓦1)	18
第15図	出土遺物実測図2(軒丸瓦2)	20
第16図	出土遺物実測図3(軒丸瓦3)	22
第17図	出土遺物実測図4(軒丸瓦4)	24
第18図	出土遺物実測図5(軒平瓦1)	27
第19図	出土遺物実測図6(軒平瓦2)	28
第20図	出土遺物実測図7(軒平瓦3)	30
第21図	出土遺物実測図8(軒平瓦4)	31
第22図	出土遺物実測図9(軒平瓦5)	33
第23図	出土遺物実測図10(軒平瓦6)	34
第24図	出土遺物実測図11(軒平瓦7)	36
第25図	出土遺物実測図12(丸瓦1)	39
第26図	出土遺物実測図13(丸瓦2)	40
第27図	出土遺物実測図14(平瓦1)	41
第28図	出土遺物実測図15(平瓦2)	42
第29図	出土遺物実測図16(平瓦3)	43
第30図	出土遺物実測図17(平瓦4)	44
第31図	出土遺物実測図18(文字瓦・記号瓦)	48

第32図	出土遺物実測図19(施釉垂木先瓦1)	50
第33図	出土遺物実測図20(施釉垂木先瓦2)	51
第34図	出土遺物実測図21(鬼瓦)	53
第35図	出土遺物実測図22(隔木蓋瓦)	54
第36図	出土遺物実測図23(隅切瓦・用途不明瓦)	55
第37図	出土遺物実測図24(埴)	57
第38図	出土遺物実測図25(土器1)	58
第39図	出土遺物実測図26(土器2)	59
第40図	出土遺物実測図27(土器3)	60
第41図	出土遺物実測図28(土器4)	60
第42図	出土遺物実測図29(金属製品1)	62
第43図	出土遺物実測図30(金属製品2)	63
第44図	錢貨(富壽神寶) X線CT画像	64
第45図	出土遺物実測図31(金属製品3)	65
第46図	出土遺物実測図32(凝灰岩)	66
第47図	栢ノ木遺跡同范瓦の分布(奈良時代平城京同范)	69
第48図	栢ノ木遺跡同范瓦の分布(奈良時代非平城京同范)	71
第49図	栢ノ木遺跡同范軒瓦の分布(平安時代)	73
第50図	栢ノ木遺跡出土軒瓦の生産時期	74
第51図	塔の構築模式図	75
第52図	井手寺推定寺域と今回の調査地	76

## 付 表 目 次

### 栢ノ木遺跡第13次発掘調査

付表1	軒丸瓦型式番号表	17
付表2	軒平瓦型式番号表	17
付表3	軒丸瓦型式一覽及び計測表	25
付表4	軒平瓦一覽表	37
付表5	軒平瓦計測表	38
付表6	丸瓦一覽表	45
付表7	平瓦一覽表	47
付表8	文字瓦一覽表	49

付表9 推定寺域内と栢ノ木13次調査出土軒瓦の比較	72
付表10 出土土器観察表	82

## 写真目次

### 栢ノ木遺跡第13次発掘調査

写真 土石流堆積物の岩石試料	87
----------------	----

## 図版目次

巻頭図版1 栢ノ木遺跡第13次 基壇建物S X01(北西から)	
巻頭図版2 栢ノ木遺跡第13次 (1)調査区全景(上が南) (2)北辺階段(南から)	
図版第1 (1)調査前状況(北西から) (2)調査前状況(北東から) (3)遺物出土状況(北から)	
図版第2 (1)調査区全景(東から) (2)調査区全景(西から)	
図版第3 (1)調査区全景(東から) (2)調査区全景(北東から)	
図版第4 (1)調査区全景(北から) (2)基壇建物S B01(北から)	
図版第5 (1)基壇建物S B01(北東から) (2)基壇建物S B01(南西から)	
図版第6 (1)南壁土層断面(北西から) (2)南壁土層断面(北から) (3)南壁土層断面(北から)	
図版第7 (1)調査区土層断面全景(北西から) (2)調査区土層断面(西から) (3)調査区土層断面(西から)	

- (4) 調査区土層断面(西から)  
 (5) 調査区土層断面(西から)
- 図版第8 (1) 基壇版築(南西から)  
 (2) 基壇版築(南東から)  
 (3) 基壇版築(西から)  
 (4) 基壇版築(西から)  
 (5) 基壇版築(西から)
- 図版第9 (1) 基壇外表(北から)  
 (2) 基壇外表(北から)  
 (3) 基壇外表裏込め土検出状況(南から)
- 図版第10 (1) 地覆・犬走り(東から)  
 (2) 地覆・犬走り(西から)  
 (3) 地覆・犬走り(南東から)
- 図版第11 (1) 北辺階段(東から)  
 (2) 北辺階段(西から)
- 図版第12 (1) 北辺階段裏込め土検出状況(南東から)  
 (2) 北辺階段裏込め土断面(西から)  
 (3) 北辺階段裏込め土遺物出土状況(南から)
- 図版第13 (1) 西辺階段(西から)  
 (2) 西辺階段・雨落ち溝・石敷(南から)
- 図版第14 (1) 雨落ち溝・石敷(西から)  
 (2) 雨落ち溝・石敷(東から)
- 図版第15 (1) 雨落ち溝・石敷(東から)  
 (2) 雨落ち溝・石敷(東から)
- 図版第16 (1) 雨落ち溝土層断面(南東から)  
 (2) 整地土層断面(北西から)  
 (3) 整地土層遺物(瓦)出土状況(北から)
- 図版第17 (1) 遺物出土状況(東から)  
 (2) 遺物(瓦)出土状況(北から)  
 (3) 遺物(瓦)出土状況(北西から)  
 (4) 遺物(瓦)出土状況(西から)  
 (5) 遺物(瓦)出土状況(西から)
- 図版第18 (1) 遺物(鬼瓦)出土状況(北東から)  
 (2) 遺物(施釉垂木先瓦・奈良三彩)出土状況(南から)  
 (3) 遺物(土師器)出土状況(北から)

- (4) 遺物(灰釉陶器)出土状況(北から)
- (5) 遺物(銭貨)出土状況(南から)
- 図版第19 (1) 遺物(風招)出土状況(西から)
- (2) 遺物(風招)出土状況(北西から)
- (3) 遺物(不明青銅製品)出土状況(西から)
- (4) 遺物(風鐸舌)出土状況(西から)
- (5) 遺物(茅負留先金具)出土状況(東から)
- (6) 遺物(鉄釘)出土状況(東から)
- (7) 遺物(鉄釘)出土状況(東から)
- (8) 遺物(凝灰岩)出土状況(東から)
- 図版第20 (1) 遺構養生及び埋め戻し状況(北東から)
- (2) 遺構養生状況(北から)
- (3) 埋め戻し後状況(北西から)
- 図版第21 出土遺物 1
- 図版第22 出土遺物 2
- 図版第23 出土遺物 3
- 図版第24 出土遺物 4
- 図版第25 出土遺物 5
- 図版第26 出土遺物 6
- 図版第27 出土遺物 7
- 図版第28 出土遺物 8
- 図版第29 出土遺物 9
- 図版第30 出土遺物10
- 図版第31 出土遺物11
- 図版第32 (1) 出土遺物12
- (2) 出土遺物13
- 図版第33 出土遺物14
- 図版第34 出土遺物15
- 図版第35 (1) 出土遺物16
- (2) 出土遺物17
- 図版第36 出土遺物18
- 図版第37 出土遺物19
- 図版第38 出土遺物20
- 図版第39 出土遺物21

# 栢ノ木遺跡第13次発掘調査報告

## 1. はじめに

今回の発掘調査は、井手町新庁舎等建設に伴い、井手町の依頼を受けて実施したものである。

栢ノ木遺跡は、井手町大字井手小字東高月に所在する奈良時代から近世の複合遺跡である。遺跡の範囲内には、奈良時代から平安時代の古代寺院である井手寺跡が存在する。今回の調査地は遺跡範囲の中央部に位置し、井手寺跡の寺域東限に隣接する。

調査は、井手町教育委員会による試掘調査の結果を受けて、本発掘調査が必要と判断された範囲500㎡を対象に行った。その結果、調査区東南部で基壇建物と階段、雨落ち溝、石敷などを確認した。現地調査ならびに報告書作成にあたっては、京都府教育委員会、井手町教育委員会、京都府立山城郷土資料館をはじめ、各関係機関、地元自治会、近隣住民の方々のご指導とご協力をいただきました。なお、調査にかかる経費は全額、井手町が負担した。

本文は、現地調査を担当した調査課福山博章のほか奈良大学大学院生(当時)田中秀弥、京都府立大学大学院生溝口泰久、京都大学大学院生吉岡孝紘、奈良大学学生顔部和宏が執筆した。また、京都大学大学院准教授川上哲生氏から玉稿をいただいた。

[現地調査体制等]

<令和2年度>

現地調査責任者	調査課長	小池 寛
現地調査担当者	調査課調査第1係長	村田和弘
	同 主任	福山博章

調査場所 綴喜郡井手町大字井手小字東高月

現地調査期間 令和2年12月21日～令和3年3月11日

調査面積 500㎡

[整理作業等]

<令和3・4年度>

整理作業責任者	調査課長	小池 寛
整理作業担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	吹田直子
	調査課課長補佐兼調査第4係長	中川和哉
	同 主任	福山博章

整理作業期間 令和3年4月1日～令和5年3月31日



## 2. 位置と環境

### 1) 地理的環境(第1図)

柘ノ木遺跡の所在する京都府綴喜郡井手町は、京都府の南部に位置し、京都盆地を北流する木津川の右岸に位置する。

井手町の自然地形は、木津川沿いの後背湿地、木津川右岸の河岸段丘、町域東部の山地の大きく3つに分けられる。山地は、中世から古世層の地殻変動によって形成された急峻な地形である。山間部からは、木津川の支流である青谷川、南谷川、才田川、玉川、洪川が東から西へ流れており、支流的の河岸段丘を形成する。また、山地から運んだ土砂を堆積させて扇状地を形成し、扇央付近からは河床が天井川になる。

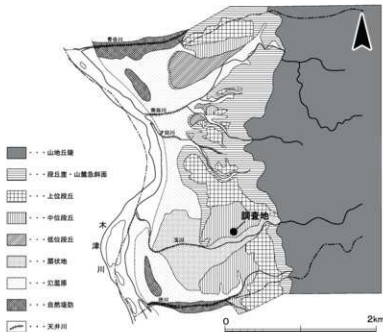
当遺跡は、木津川の支流である玉川右岸の台地に位置する。台地は、高位から中位の段丘であり、西と南に向かって標高を減じながら緩やかに傾斜してゆき、段丘の西端と南端は、険しい段丘崖となっている。現在、付近一帯は台地の傾斜に沿った棚田の景観が広がる。

### 2) 歴史的環境(第2図)

縄文時代は、北大塚古墳の周辺で石楡・石匙・石器片が採集されている。鳥居遺跡では、縄文土器と石鏃が採集されている。弥生時代は、鳥居遺跡と南開遺跡で弥生土器が採集されている。当地域において、縄文・弥生時代の遺跡は数少ない。

古墳時代では、前期から中期の明確な古墳は確認されていないが、大塚古墳では人物埴輪や鞍形埴輪が採集されており、中期から後期の古墳とされている。後期には、横穴式石室をもつ群集墳が分布する。平山古墳は、玄室から亀甲形陶棺が出土している。北大塚古墳群は、発掘調査で4基の古墳が確認されている。これらのほかに、玉川周辺の高月古墳群・弥勒古墳群や、南谷川周辺の上堂古墳群・天神山古墳群など、木津川へ流れる支流の山間地を中心に多数の古墳群が点在している。

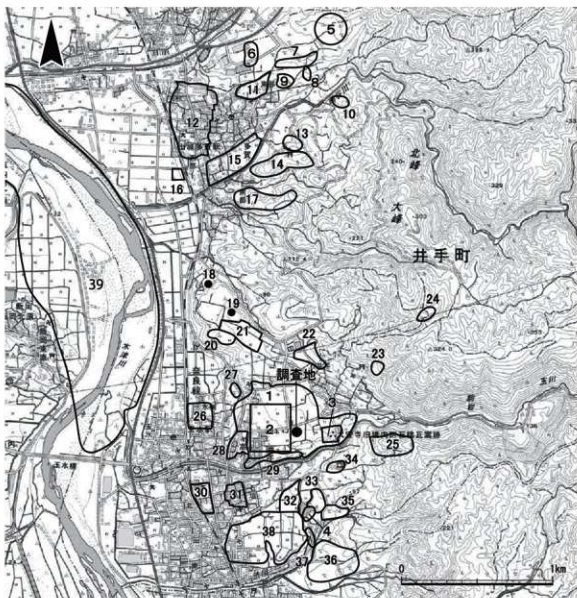
奈良時代には、井手寺跡、史跡石橋瓦窯跡群、岡田池瓦窯跡などがある。井手寺跡は、橘氏の氏寺と伝わる古代寺院である。史跡石橋瓦窯跡群は、大安寺の創建瓦を製作しており、「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」に記載されている「棚倉瓦屋」に比定されている。岡田池瓦窯跡は、採集された軒瓦が井手寺跡出土軒瓦と同范であることから、井手寺跡へ瓦を供給していた瓦窯跡と考えられている。ま



第1図 柘ノ木遺跡周辺地形分類図

た、『続日本紀』に記載される橘諸兄の別荘である「相楽別業」や聖武天皇が行幸の際に滞在した「玉井頓宮」もこの地域にあったと推定されている。

中世は、栢ノ木遺跡で掘立柱建物を確認されており、12から14世紀の遺物が出土している。東大寺領の「玉井荘」との関連が指摘される。



第2図 栢ノ木遺跡周辺主要遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 田辺)

- |                    |            |           |            |               |
|--------------------|------------|-----------|------------|---------------|
| 1. 栢ノ木遺跡           | 2. 井手寺跡    | 3. 石橋瓦窯跡群 | 4. 岡田池瓦窯跡  | 5. 多賀城跡       |
| 6. 東北山遺跡           | 7. 上り坂古墳群  | 8. 墓の平古墳群 | 9. 馬場崎古墳群  |               |
| 10. 清水奥古墳群(西島山古墳群) | 11. 甚五郎谷遺跡 | 12. 多賀遺跡  | 13. 高神社古墳群 |               |
| 14. 天神山古墳群         | 15. 判ノ池遺跡  | 16. 栢ノ木遺跡 | 17. 上堂古墳群  | 18. 平山古墳      |
| 19. 北大塚古墳          | 20. 尾ノ山遺跡  | 21. 大塚遺跡  | 22. 上井手遺跡  | 23. 玉津岡神社裏古墳群 |
| 24. 小玉岩古墳群         | 25. 井手城跡   | 26. 水無遺跡  | 27. 山縁古墳群  | 28. 西高月遺跡     |
| 29. 高月古墳群          | 30. 野神遺跡   | 31. 宮ノ木遺跡 | 32. 塚本遺跡   | 33. 岡田遺跡      |
| 34. 弥勒古墳群          | 35. 南開遺跡   | 36. 鳥休遺跡  | 37. 上赤田遺跡  | 38. 植田遺跡      |
| 39. 大将軍遺跡          |            |           |            |               |

### 3) 井手寺跡の既往の調査

井手寺跡では水田の圃墾に伴い、礎石や瓦が出土することから、古代寺院の存在が早くから知られていた。井手寺跡の調査報告は大正12(1923)年の梅原末治氏の報告に始まる(梅原1923・1929)。梅原氏は礎石、軒瓦、隆平永寶、海獣葡萄鏡などの出土遺物を報告し、地元では、橘諸兄の建立した井手寺であるという伝承を紹介した。昭和44(1969)年には遺跡地図作成の踏査が行われ、昭和49(1974)年には奈良大学考古学研究会による踏査(奈良大学考古学研究会1979)が行われ、軒瓦が採集された。

発掘調査は、平成7(1995)年に井手寺跡記念四阿整備に伴う試掘調査が実施された。後世の改変のため遺構は検出できなかったが、軒瓦などが出土した。平成13(2001)年には府道拡幅のため、当調査研究センターによって発掘調査が行われた。寺域の西側で掘立柱建物が検出され、軒瓦、丸平瓦、凝灰岩片などが出土した(野島2002)。その後、平成15(2003)年から平成23(2011)年にかけて、井手町教育委員会による発掘調査が実施され、礎石建物6棟、掘立柱建物1棟、石組の雨落ち溝や石敷などが見つかったが、伽藍配置については未解明である。寺域の境界と考えられる地点からは、築地塀に伴うと推定される雨落ち溝を確認しており、約241.2m(810尺)四方に及ぶ広大な寺域が復元されている(茨木編2014)。(田中秀弥)

## 3. 調査の経過と方法

### 1) 調査の経過

柗ノ木遺跡は、平成13(2001)年度に第1次調査が実施され、今回で第13次調査となる。

井手町新庁舎等建設に伴い、令和2年度に井手町教育委員会が実施した試掘調査によって、瓦の集積や土坑などが検出され、遺構・遺物の存在が確認された。そのため、令和2年度に、対象地の本発掘調査が必要な範囲を当調査研究センターが調査を実施した。

令和2年度は12月21日に調査を開始した。調査地は、付近一帯に広がる棚田であったため、調査区内においても、棚田の段差が残る。調査区のほぼ全域で中・近世の小規模な素掘溝や土坑などの耕作に伴うと考えられる遺構を確認したほか、調査区南東側で平安時代の基壇建物と基壇に伴う階段、雨落ち溝、石敷などを同一遺構面で検出した。当初、基壇建物の検出範囲は調査区南東側の一部分に留まっていた。そのため、基壇建物の規模と瓦の集積範囲などを明確にするために、当調査研究センターの調査区を拡張し、基壇建物南側と西側の試掘調査を井手町教育委員会が実施した。その結果、基壇建物は、東西南北の4か所に階段が付属し、一辺約15.3mの正方形に復元できることから、塔基壇跡であることが判明した。

遺構の検出、掘削を終えた後、令和3年3月4日にUAV(無人航空機)による空中写真撮影を実施し、写真と図面による記録を完了し、令和3年3月11日に現地調査を終了した。この間、井上満郎理事長をはじめ、中尾芳治、上原眞人、菱田哲郎、高橋照彦各理事のご指導を得た。

調査成果については、令和3年4月16日に井手小学校・泉ヶ丘中学校の教職員・生徒向けの現地公開を行い、170名の参加があった。また、令和3年4月17日に一般の人を対象とした現地公

間を実施した。当日は荒天にも関わらず、394名の参加があった。

塔基壇跡は、埋め戻しによる現地保存が決定したため、遺構の保全を行い、真砂土を搬入して人力による埋め戻しを行った。埋め戻し作業は、令和3年5月26日に終了した。

調査面積は500㎡、出土遺物は整理箱で2700箱であった。

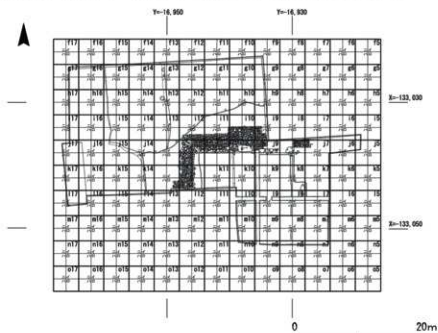
## 2) 調査の方法

調査にあたっては、試掘調査の成果に基づき、遺構検出面まで重機による掘削を行い、その後、人力により遺物包含層の掘削と精査作業を行い、遺構の検出を行った。遺物に関しては4mの調査グリッドをさらに4分割し、2m四方の区画を用いて地点別に取り上げた。

調査の進行に伴い、必要に応じて、記録図面の作成と写真撮影を実施した。遺構の図化作業にあたっては、調査地全体の平面図を縮尺1/100で作成し、個別遺構の平面図、断面図は基本的に縮尺1/10・1/20で作成し、遺物出土状況など必要に応じて縮尺1/5・1/10で作成を行ったほか、オルソ画像による平・断面図の作成を行った。

## 3) 調査グリッドの設定

調査にあたっては、検出遺構と出土遺物の位置を記録する目的で調査グリッドを設定した。調査グリッドは国土座標(世界測地系)に基づいて設定し、基準線は南北・東西ともに国土座標系に一致させ、 $X = -133,000$ 、 $Y = -16,900$ を起点として今回の調査地全体を覆う調査グリッドを設定した。100m四方の区割りを基準として大グリッドを設定した。さらにその中で南北辺・東西辺を25等分して4m四方のグリッドを設定し、小区画とした。グリッドの基準線は南北の基準線にアルファベット小文字を用い、東西の基準線には算用数字を用い、その組み合わせによって、小地区名とした。遺物の取り上げには、小区画をさらに4分割して2m四方のグリッドを設定し、各小区画に、北東(イ)・南東(ロ)・南西(ハ)・北西(ニ)の名称を与えた(第3図)。



第3図 調査グリッド配置図

#### 4) 遺構番号について

遺構番号は調査の進捗に伴って一連の通し番号を付与し、遺構の性格を示す略号を付与した。使用した略号は、建物：SB、溝：SD、土坑：SK、柱穴：SP、不明遺構・その他：SXである。

本報告で使用した遺構番号は調査時のものであるが、調査時に番号のなかった遺構に関しては報告書作成時に新規に番号を付与した。

#### 5) 報告書作成について

令和3年度から令和4年度は出土遺物の整理作業を実施した。整理作業では、遺物の洗浄、接合、注記を行い、報告書に掲載する遺物の選別を行った。これらについては実測と拓本を行った。実測した遺物のうち、復元可能なものについては石膏による復元を実施した。復元できた遺物や重要な遺物については写真撮影を行い、図版として掲載した。

整理作業と並行して、京都国立博物館学芸部保存科学研究室降旗順子室長に依頼し、銭貨、風招、鉄製品などのコンピューター断層撮影装置によるX線透過撮影(以下X線CT)を行った。同時に、奈良三彩、施釉垂木先瓦については、蛍光X線分析、胎土分析を実施した。また、京都在大学院理学研究科地球惑星科学専攻地質学鉱物学教室河上哲生教授に依頼し、基壇に使用された石材などの鑑定を行った。そのほか、令和4年度には、金属製品の保存処理を委託した。

令和4年度に、調査担当者による遺構・遺物の検討をもとに、当調査研究センター上原眞理理事及び職員で出土遺物と調査成果の検討を行い、その成果を本冊にまとめた。<sup>(91)</sup>

(福山博章)

## 4. 基本層序(第4・5図)

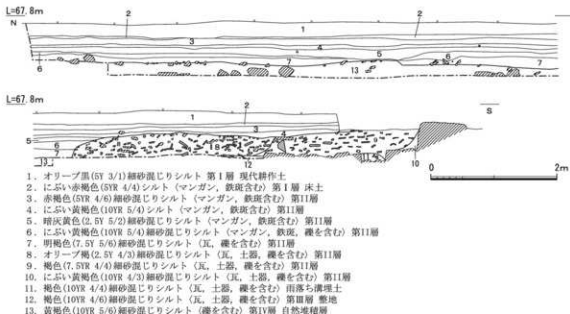
調査地の現地表面は、東側で標高67.66m、西側は標高66.25mを測り、東西の高低差は約1.4mを測る。また、南側は標高67.94m、北側は標高67.68mを測り、南北の高低差は約0.25mとなる。このように、調査地の現地地形は西と南に向かって緩やかに傾斜している。この傾斜は、地形の傾斜に起因しており、下層の遺構面においても同様の状況を呈する。

標高67.92～65.65mで遺構を検出した。遺構面の高低差は東西で約2.27m、南北で約0.56mである。遺構面は棚田の開墾により大規模な削平を受けており、現地形と同様に、畦の段差が形成されているため、遺構面の高低差が大きい。

調査区の土層断面図を第4・5図に示した。調査区の基本層序は、上層から、現代の耕作土・床土(第I層)、中世から近代の堆積層(第II層)、整地層(第III層)、自然堆積層(第IV層)となる。

第I層は黒色の土壌化した砂質混じりのシルト層である。床土にはマンガンを多量に含む。

第II層は近代から中近世の堆積層であるが、調査区内の四方で様相が異なる。調査区東壁の北側では褐色の細砂混じりのシルト層もしくは、シルト層(第4図1～7層)がほぼ水平に堆積する。いずれの層位も、精良なシルトであり、マンガンと鉄斑を含むことから、水田であったと考えられる。東壁の7層から中世の土師器と青磁が出土し、5層では陶磁器が出土したことから、中世



第4図 調査区東壁土層断面図

から近代までの耕作土であると判断できる。

調査区南壁の中央部分では、瓦と礫を多量に含む土層(第5図3～15層)が堆積している。堆積層からは中世の土師器、瓦器、輸入陶磁器及び近世から近代の陶磁器が出土した。12層では、整地層である24層と自然堆積層である25・26層を削平して0.8mの段差を造り出していた。段差の部分には、1～18cmの礫や瓦を置いており、棚田の畦と暗渠であったと推定される。

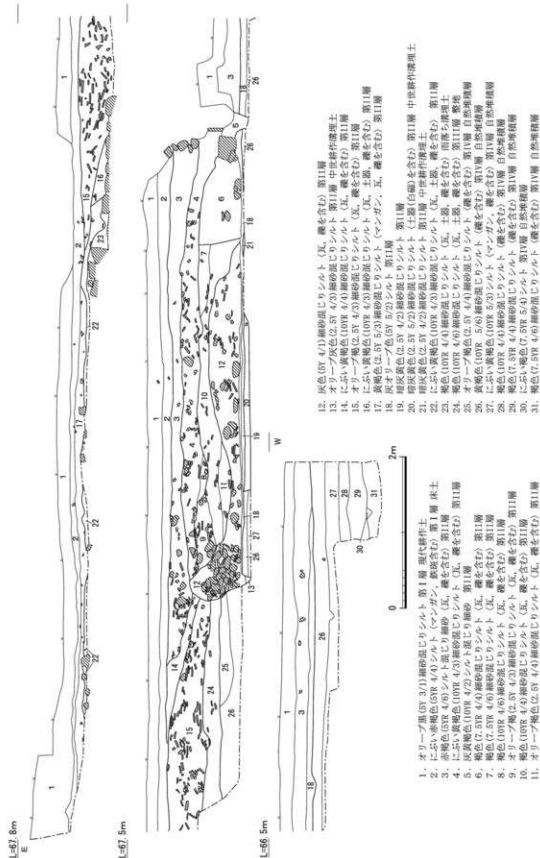
調査区東壁8・9層も瓦と礫を多量に含み、中世の土師器や近世の陶磁器などが出土しており、南壁の中央部分の層位と同様の状況である。このように、基壇建物北側と西側から出土した瓦や礫は中世から近代にかけて人為的に攪拌されていたことを確認した。礫を積んで棚田の畦を造成する方法は、稲ノ木遺跡第4次調査においても検出されており(内田編2003)、付近一帯の棚田の造成方法と考えられる。

南壁断面の西側では現代の棚田の畦に境に東西で堆積構造が異なる。現代の耕作土である第I層(3層)の下層で灰オリーブ色のシルト層(18層)となり、近世の素掘溝が掘削される。その下層は第IV層の自然堆積層(26層)となる。

このように、同一調査区内であるが、地点ごとに堆積状況が大きく異なる。この差異は、耕作による棚田の利用形態に起因すると考えられる。また、各層位から出土した遺物の年代から基壇建物S B01が廃絶した後は、中世から現代に至るまで、耕作地であったことを確認した。耕作による削平を受けており、遺構検出面は、整地層(第III層)と自然堆積層(第IV層)の上面となる。

整地層(第III層)は調査区北側と西側の基壇周囲の自然堆積層(第IV層)上層で検出した。整地層は礫をほとんど含まないが、瓦などの遺物を含む。細砂混じりの粘質土の単層であり、自然堆積層(第IV層)と同一の土色と土質であるため、自然堆積層(第IV層)由来の整地層と判断できる。

自然堆積層(IV層)は褐色の砂質混じりのシルト層で礫を含む。遺物は出土しない。調査区内の同一層位において、径20～80cm程度の大小の礫が局所的に集中する箇所を平面で検出した。試



第5図 調査区南墳上層断面図

12. 灰褐色(5Y 4/1)細砂混じりシルト (K, 礫を含む) 第11層
13. オリーブ褐色(2.5Y 4/2)細砂混じりシルト 第11層 中世耕作痕跡土
14. 土に近い黄褐色(10YR 4/4)細砂混じりシルト (K, 礫を含む) 第11層
15. オリーブ褐色(2.5Y 4/3)細砂混じりシルト (K, 礫を含む) 第11層
16. 土に近い黄褐色(10YR 4/3)細砂混じりシルト (K, 土塊, 礫を含む) 第11層
17. 灰褐色(2.5Y 5/2)シルト 第11層
18. オリーブ褐色(5Y 5/2)シルト 第11層
19. 暗灰褐色(2.5Y 4/2)細砂混じりシルト (土層 (白濁)を含む) 第11層 中世耕作痕跡土
20. 暗灰褐色(2.5Y 4/2)細砂混じりシルト 第11層 中世耕作痕跡土
21. 土に近い黄褐色(10YR 4/3)細砂混じりシルト (K, 土塊, 礫を含む) 第11層
22. 土に近い黄褐色(10YR 4/3)細砂混じりシルト (K, 土塊, 礫を含む) 第11層
23. 黄褐色(10YR 4/6)細砂混じりシルト (K, 土塊, 礫を含む) 第11層 築体
24. 黄褐色(10YR 4/6)細砂混じりシルト (K, 土塊, 礫を含む) 第11層 築体
25. オリーブ褐色(2.5Y 4/4)細砂混じりシルト (礫を含む) 第11層 自然堆積層
26. 黄褐色(10YR 5/6)細砂混じりシルト (礫を含む) 第11層 自然堆積層
27. 土に近い黄褐色(10YR 5/3)シルト (ヤングラン, 礫を含む) 第11層 自然堆積層
28. 褐色(10YR 4/4)細砂混じりシルト (礫を含む) 第11層 自然堆積層
29. 褐色(7.5YR 4/4)細砂混じりシルト (礫を含む) 第11層 自然堆積層
30. 土に近い褐色(7.5YR 5/4)シルト 第11層 自然堆積層
31. 褐色(7.5YR 4/6)細砂混じりシルト (礫を含む) 第11層 自然堆積層

1. オリーブ黒(5Y 3/1)細砂混じりシルト 第1層 現代耕作土
2. 土に近い黄褐色(10YR 4/4)シルト ヤングラン, 礫を含む) 第1層 床土
3. 土に近い黄褐色(10YR 4/3)細砂混じりシルト 第1層 築体
4. 土に近い黄褐色(10YR 4/3)細砂混じりシルト (K, 礫を含む) 第11層
5. 灰黄褐色(10YR 4/2)シルトと混じり細砂 第11層
6. 褐色(7.5YR 4/4)細砂混じりシルト (K, 礫を含む) 第11層
7. 褐色(7.5YR 4/6)細砂混じりシルト (K, 礫を含む) 第11層
8. 褐色(10YR 4/6)細砂混じりシルト (K, 礫を含む) 第11層
9. オリーブ黒(2.5Y 4/3)細砂混じりシルト (K, 礫を含む) 第11層
10. 褐色(10YR 4/4)細砂混じりシルト (K, 礫を含む) 第11層
11. オリーブ黒(2.5Y 4/4)細砂混じりシルト (K, 礫を含む) 第11層

掘調査においても同様の状況が確認されており、付近一帯で散見される、東側の山間部から発生した土石流の堆積であると考えられる。(福山博章)

## 5. 検出遺構

基本層序でも述べたとおり、平安時代から中世までの遺構を同一面で確認した。各遺構を時代別に古い時期から報告する。

### 1) 平安時代(第6・8図)

**基壇** 調査区の南東側で基壇建物S B01を検出した。平面検出時には、基壇の周囲では、瓦の堆積が見られたが、基壇土上からは瓦などの遺物はほとんど出土せず、瓦の出土状況が明瞭に異なった。

基壇外装は基壇北東側しか残存していなかったが、基壇外周の北側と西側では、犬走りの石列を2列検出した。東側では平面で瓦の堆積層が直線的に途切れる部分で土層の変化を確認した。南側は棚田の段差となっており、基壇による段差を一部踏襲していると考えられる。このような検出状況から、基壇の平面形は、ほぼ正方形に復元され、東西約15.3m、南北約15.1m、残存高0.7mを測る。さらに、基壇北辺と西辺の2か所では階段を検出した。基壇東辺と南辺にも階段が想定され、基壇各辺に合計4か所の階段をもつと推定される。このような検出状況から、基壇建物S B01は塔の基壇に復元される。

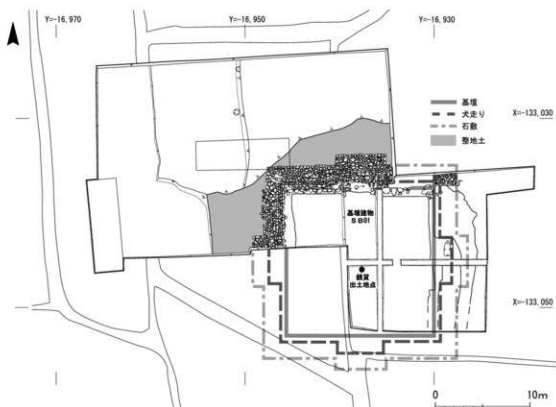
**基壇土(第10・11図)** 基壇西側、棚田の造成により削平された段差によって、基壇土を断面観察することができた。基壇内部は、質の異なる土が交互に積み重ねられており、基壇は突棒を用いて土砂を突き固める版築によって構築されたと判断される。版築層は生物による擾乱のため、上層の耕作土が入り込んでいるが、1層あたりの厚さは1～8cm未満であり、14層を検出した。小礫と細砂が混じる黄褐色のシルト層と褐色のシルト層の2つに大別される。地山由来とみられる砂質土と粘質土を1～8cmの単位で突き固めながら積み上げることで構築されている。基壇土の断面で礫を確認したほか、基壇内部の平面から多数の礫を検出したことから、大小の礫を版築に混ぜ込んだと考えられる。版築による盛り土は、基壇中央部分に向けて盛り上がっており、亀腹状に構築したのちに水平に積み上げられていた。なお、遺構保護のため、遺構検出面以下の掘削は行っていないため、掘り込み地業については未確認である。

**基壇外装** 基壇外装は自然石や一部加工した石を用いた乱石積基壇である。使用された石材は風化が進んでいるが、被熱した痕跡はない。

基壇外装は大きく削平されていたため、基壇北面の東側で最下段の1段のみを確認した。石材は、幅30～110cm、厚さ20～80cmを測る。北辺階段の東側では、幅65cm、厚さ83cm、高さ70cmの大型の石材を用いる。石材は基壇外側に向けて面をそろえる。基壇外装が残存していた部分では、基壇側で裏込め土を検出した。後述する階段の形状から、基壇外装には、本来、もう1石が積み重なっていたと考えられる。

**基壇上面** 基壇上面は、後世の開墾等によって削平され、石材が抜き取られており、礎石など

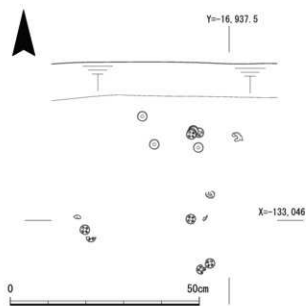




第6図 調査区平面図(平安時代)

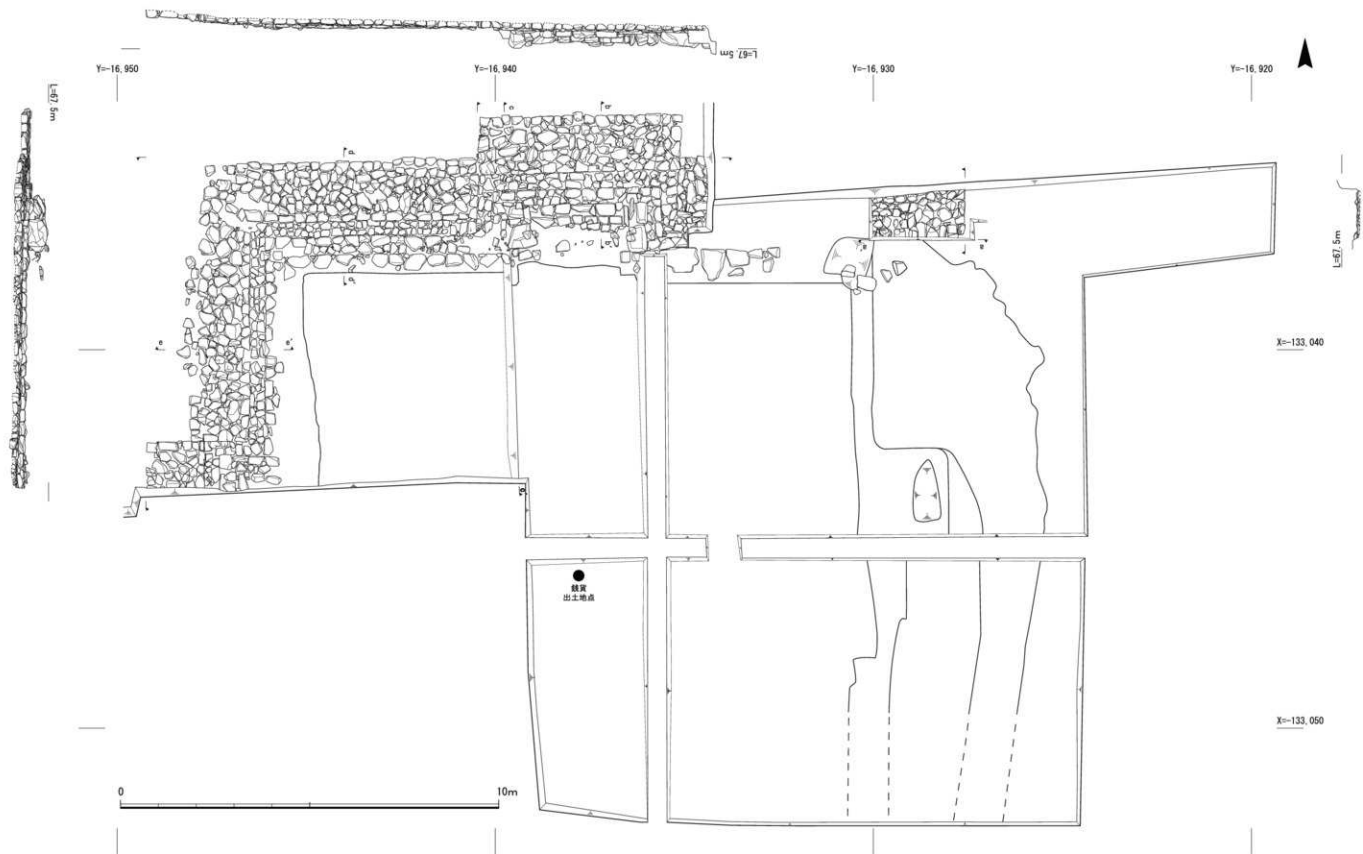
は確認できなかった。階段耳石の延長線上付近から、礎石の根石となる可能性がある石材を検出したが、礎石据え付け穴及び、抜き取り穴を検出できなかったこと、周辺では版築に用いられた石材が散乱していたため、判断としない。また、基壇上面の舗装についても不明である。

このように、基壇上面は、大規模な削平を受けていたが、基壇上面のほぼ中心部では銭貨が出土した。銭貨は40cm四方の範囲で散乱した状態で17枚出土した。そのうち5枚が不規則に重な



第7図 富壽神寶出土状況図

った状態で出土したほかは、全て単体で出土した(第7図)。X線CTによって7枚が弘仁9(818)年初鑄の富壽神寶であることが判明した。銭貨の周辺においては、礎石の据え付け穴、銭貨を埋納した際の掘り方や礎石の抜き取り穴、後世の攪乱などと想定される土層の変化を確認することはできなかった。このため、これらの銭貨は、薬師寺東塔基壇例のように、基壇築成時に銭貨を埋納したと考えられ、地鎮のための鎮壇具の可能性(奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所編2022)。



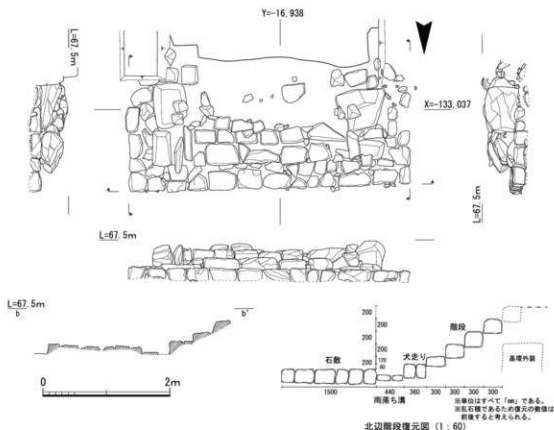
第8図 基壇建物S B01平面図

**地覆** 基壇北西側では、基壇盛り土に埋め込まれた石列を検出した。石列は1列で、犬走りや雨落ち溝に並行している。幅0.27~0.44m、検出長6.45m、標高は66.83~67.00mを測り、東から西へ向かって低くなっている。長さ40~65cm、幅25~45cmの石材を用いる。雨落ち溝や石敷などに用いられた石材よりも、大形の凹凸のある石材を用いている。石列は基壇北西隅で逆L字形に並べられていたが、基壇西側では検出できず、平面で南北方向に瓦片が混じる土層の変化を検出したため、抜き取られたと考えられる。石列を検出した部分は、基壇外装の石材が積まれる位置に当たるため、地覆石であると考えられる。

**北辺階段**(第9図) 階段は基壇の北辺と西辺の2か所で検出した。階段も基壇外装と同様に乱石積で構築されていた。北辺では、階段の羽目石と耳石のほか、踏石4段を検出した。階段の地覆石外々間距離は4.48m、階段の出は1.70m、残存高は0.5mを測る。蹴上0.1~0.2m、路面0.26~0.60mを測る。地覆石上面から基壇上面までの高さは1.0m前後に復元でき、傾斜角は27°前後となる。

羽目石は東西ともに1石が残存していた。羽目石は東側で長さ70cm、幅52cm、厚さ32cmを測り、西側では長さ70cm、幅80cm、厚さ57cmであり、大形の石材を用いる。西側の石が高いため、東側は少なくとも、さらに1石が積まれていたと推定できる。

耳石は、東側で3石を検出した。東側では、長さ56~59cm、幅12~32cm、厚さ26~36cmを測る。西側は抜き取られており、1石しか残存しておらず、長さ46cm、幅19cm、厚さ25cmで



北辺階段復元図 (1:60)

第9図 北辺階段平面・立面・断面・復元図

L-67.6m



第10図 基壇及び基壇外周断面図(北側)

ある。全て縦長であるが、いずれも幅が異なる石材である。このように、階段に用いられた羽目石と耳石は、使用した石材の大きさや形態が階段の左右で異なる。

階段南側の基壇側からは、裏込め土を検出した。裏込め土は版築と異なる土で充填され、検出長3.54m、幅0.9mを測る。断面では裏込め土と版築の層界が垂直方向の界線となるため、基壇土版築の端部を垂直に削り落とし、階段を設置したと想定される。裏込め土の中からは、礫とともに、平安時代の軒丸瓦(KYM251・KYM253A)と平瓦が出土した。

**西辺階段** 基壇西辺の階段は削平されており、地覆と基底の石材のみが残存していた。調査区南側へと続いており、全容は確認していない。検出幅0.9m、残存長1.6m、残存高0.3mを測る。

**基壇外周** 基壇外周では、整地層、犬走り、雨落ち溝、石敷などを確認した。犬走り、雨落ち溝、石敷は自然石と割石を用いて整地層上面に敷設されており、基壇と階段の出入りに沿って、取り囲むように巡っていることから、基壇の四周に敷設されていたと考えられる。

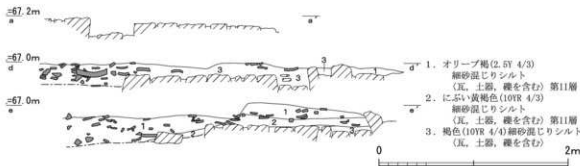
**整地** 調査区北側と西側の基壇周囲からは、自然堆積層の上面で整地層を検出した。基壇北側では、標高66.8mで検出し、層の厚さは約10cmであるが、基壇西側では、標高66.5mで検出し、南壁24層のように厚さ約25cmとなっており、整地層の厚さが異なっていることを確認した。整地層は調査区北東側から南西にかけて削平を受けていたほか、西側では棚田の段差となっていたため、整地土の範囲は不明である。整地層は地山由来の整地土であり、台地上の緩やかな傾斜を平坦に造成するため、客土による整地を行ったと考えられる。整地層からは軒丸瓦(KYM102)、丸・平瓦と黒色土器が出土した。

**犬走り** 基壇外装と雨落ち溝の間に犬走りを造り出す。犬走りの検出長は北面で13.36m、西面で6.86m、高さ0.17～2.0mを測る。犬走りの出は、基壇外装から2石分で0.42～0.56mとなる。犬走り上面の標高は66.91～67.18mで、東から西に向かって低く傾斜している。基壇北側では良好に残存していたが、基壇西側では基壇側の石列が抜き取られており、3石のみが残存していた。

**雨落ち溝(第12図)** 雨落ち溝は乱石組であり、犬走りと石敷の間に位置する。石敷の基壇側1石分及び、犬走りの外側1石分の石列は雨落ち溝の側石となる。側石の大きさは、犬走り側で長さ20～50cm、幅14～42cm、厚さ17～20cm、側石上端の標高は66.85～67.04mを測る。石敷側では、長さ24～48cm、幅12～30cm、厚さ8～13cm、側石上端の標高は66.70～67.03mを測る。側石は幅の広い石を用いており、溝内側で面を揃えて並べられている。雨落ち溝は、幅0.4～0.45m、深さ0.08～0.20mを測る。溝幅はほぼ同じであるが、深さが異なるのは、溝両側で側石の高さが異なる



第11図 基礎及び基礎外周断面図(南側)



第12図 地覆・犬走り・雨落ち溝・石敷断面図

るためであり、犬走り側に大形の石材を用いて高くする。溝底にも石を敷設しており、大形の石材1石を用いるほか、石材を溝幅方向に2石もしくは3石並べて底石としている。底石は長さ4～44cm、幅5～30cm、溝底となる底石上面の標高は66.61～67.02mを測る。また、石敷や犬走りと違い、溝底では石材の間に小石を敷設している箇所が目立つ。溝底に用いられた石材には敷設の規則性はない。雨落ち溝の内部からは、軒丸・平瓦を含む大量の瓦と土師器、灰釉陶器、鉄釘などが出土した。

**石敷** 石敷は、幅1.5～1.6mを測り、基礎外周に丁寧に構築されていた。石敷外周の側石は面を揃えて並べられており、その中に石材を敷設していた。石材は長さ4～40cm、幅4～60cmを測り、大小様々な石が用いられており、規則性は伺えない。北辺階段の中心線には、石敷の中に1石だけ、縦長の石材が置かれており、石材敷設の基準とした可能性がある。石敷の上面では標高66.65～67.14mを測り、犬走り・雨落ち溝などと同様に、地形の傾斜によって、東側が高く、西側が低くなっている。石敷の直上からは、軒丸・平瓦、丸・平瓦のほか、灰釉陶器、鉄釘、風招などが出土した。

## 2) 中世以降(第13図)

中世以降の遺構は、調査区全面で素掘りの溝24条と調査区西側で土坑2基を検出した。

素掘り溝は幅0.1～2.0m、深さ0.05～0.1mを測る。素掘り溝の多くは南北方向へ掘削されているが、一部の溝は棚田の段差に沿って掘削されており、耕作に伴う溝と判断される。また、調査区の中央部から西側では、中世以降の耕作によって移動を受けた瓦埴類、土器、鉄釘、石材などの遺物が出土した。

(福山博章)



第13図 調査区平面図(中・近世)

## 6. 出土遺物

今回調査を行った、基壇建物S B01の周辺では、瓦・土器・金属製品などの多量の遺物が出土したが、遺物の多くは破損し、細片となっている。瓦の間からは中・近世の土器や陶磁器も出土しており、後世の棚田の開墾による再堆積であることが判明した。今回の出土遺物の大半は後世に二次的な移動を受けているが、井手寺の推定寺域から東に離れた地点であり、試掘調査においても、周辺からは同時期の遺構が検出されていないことから、これらの遺物は今回検出された基壇建物S B01である塔で用いられた蓋然性が高い。また、後世の削平が及んでいない基壇北側と西側の整地層上面及び石敷の上面や雨落ち溝内部から出土した遺物は、基壇建物の廃絶時の状態を留めていたと考えられ、二次焼成や融解などの被熱の痕跡はなく残存状態は良好である。

(福山博章)

### 1) 瓦埴類

#### (1) 型式番号

今回の調査では塔跡に伴う瓦が多量に出土した。通常の丸・平瓦だけでなく、軒瓦や道具瓦も豊富に出土している。特に軒瓦の瓦当文様の種類は多岐にわたり、井手寺推定寺域内における調査の出土品と共通する軒瓦も多く存在する。井手寺跡出土瓦の型式番号についてはI d M・I d H型式(中島2010)、I T M・I T H型式(茨木編2014)が設定されているが、型式番号と実際の資料の間には混乱が生じている。そこで本報告では「かやのき丸瓦・かやのき平瓦」を意味するK Y M・K Y H型式を新たに設定する。

型式番号として、「KYM または KYH」+「型式を表す3桁の数字」を設定し、複数種類ある場合はAから順に大文字アルファベットを後付する。范に彫り直しがあることを示す場合は小文字アルファベットを用いる。また、製作技法が多種確認できるものについては、技法別に①、②…の番号を末尾に付した。型式は付表1・2のように瓦当面に現れる特徴をもとに配列した。軒丸瓦については、外縁形態により設定した【100番台：傾斜縁、200番台：直立縁、000番台：不明】と、内区文様により設定した【01～49：単弁、51～99：複弁】を組み合わせた3桁番号とした。軒平瓦については、中心飾りの形態により【101～199：中心葉+垂飾または三葉文、201～299：対向C字文、301～399：その他】とした。

## (2) 軒瓦

### ① 軒丸瓦

KYM101(第14図1・2) 間弁をもたない単弁24弁蓮華文軒丸瓦である。内外区を区画する圏線が特徴的で、外区外縁と外区の内外縁を分かつ圏線との間が他の軒丸瓦に比べて幅が広く、このような特徴は「恭仁宮タイプの外縁」とされる(毛利光・花谷1991)。ITM02と同范である。

接合式で、接合する丸瓦の先端部は、凹面と端面は鈍角に角を削り、凸面側の先端も端面に対して鈍角に角を若干削っている。接合に際し内外面に粘土を貼り付けけるが、瓦当裏面から丸瓦凹面にかけては2～3層ほどの補強粘土で接着する。瓦当裏面は丸瓦凹面から裏面に向かって縦ケズリして平滑にしている。その過程で裏面が若干窪むものも少数ある。側面は横ケズリしている。胎土は密で粒径1mm以下の長石類をわずかに含み、焼成は硬質で灰色を呈するものが多い。

平城京6320Aと同范である。6320Aは2度改范され、文様の状態からa～cの3段階が設定されている。外区に線鋸歯文がめぐるのがa、線鋸歯文を凸鋸歯文に彫り直したものがb、さらに蓮弁全体を彫り変え蓮子突出するように彫り直したものがcで、KYM101は6320A b・cに相当し、彫り直しの段階が判別可能な個体の中ではb(1)が10点、c(2)が43点を数える。bとcは恭仁宮跡において出土しないため平城遷都後の製品とされ、生産年代は平城Ⅲ-1期に決定されている。同范例として、南山城では木津川市恭仁宮跡(上原1984)、城陽市平川廃寺(平良編1973)においてaが出土し、木津川市高麗寺跡(中島編2011)においてはa・bが出土する。<sup>(注3)</sup>

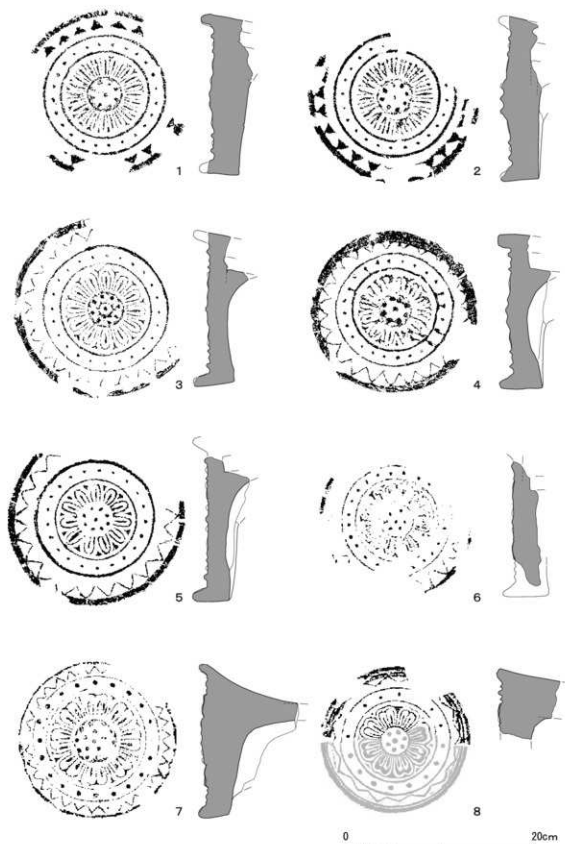
KYM102(第14図3・4) 独立した間弁をもつ単弁12弁蓮華文軒丸瓦である。KYM101と同様に恭仁宮タイプの外縁を備える。ITM01と同范である。范の損傷により文様は崩れていくが、製作技法は一貫している。外縁部に粘土を詰めたのち全体に粘土を詰める。裏面に先端凹面側をケズリ調整した丸瓦を立て補強粘土を接合部に貼り付けし、瓦当裏面を平坦に整える。そして、丸瓦凹面から裏面までを縦ケズリし、断面中窪み状に仕上げる。側面は横ケズリし、丸瓦部

付表1 軒丸瓦型式番号表

KYM	外縁形態	内区文様
101～149	傾斜縁	単弁
151～199	傾斜縁	複弁
201～249	直立縁	単弁
251～299	直立縁	複弁
001～049	不明	単弁
051～099	不明	複弁

付表2 軒平瓦型式番号表

KYH	中心飾り
101～199	中心葉+垂飾 or 三葉文
201～299	対向C字文
301～399	その他



第14図 出土遺物実測図1(軒丸瓦1)



凸面は縦ケズリで整えている。胎土は密で粒径2mm以下の長石類とクサリ礫を少量含み、焼成は硬質なものが多く灰色から灰白色を呈する。

平城京6130Aと同范である。南山城では恭仁宮跡において2点が出土している。

**KYM103** (第14図5) 独立した楔形の間弁をもつ単弁11弁蓮華文軒丸瓦である。KYM101・102と同様に恭仁宮タイプの外縁を備える。ITM03と同范である。接合式で、接合に際し内外面に粘土を貼り付ける。瓦当裏面をナデで平坦に整える。そして、丸瓦凹面から裏面までを縦ケズリし、断面中窪み状に仕上げる。側面は横ナデで整えている。胎土は密で粒径2mm以下の長石類とクサリ礫、1mm以下の石英、微細な金雲母を少量含み、焼成はやや軟質なものも多く灰白色から黒灰色を呈する。

平城京6134Cと同范である。南山城における同范例は八幡市内里八丁遺跡(森下1996)、京田辺市三山木遺跡(岡崎2003)でそれぞれ1点ずつ出土するのみである。

**KYM151** (第14図6) 間弁が蓮弁を囲むようにそれぞれが連結した複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。製作技法は残存状況により詳細は不明だが、接合式である。胎土は密で粒径1mm以下の長石類、石英、雲母を少量含み、焼成は軟質で暗灰色から灰白色を呈する。

平城京6284Aと同范で、平城Ⅰ-1期の平城宮造営の初期に生産された瓦で、第一次大極殿や中央区朝堂院周辺に比較的まとまって供給されたようである(今井2018)。南山城では恭仁宮跡において同范例がある。

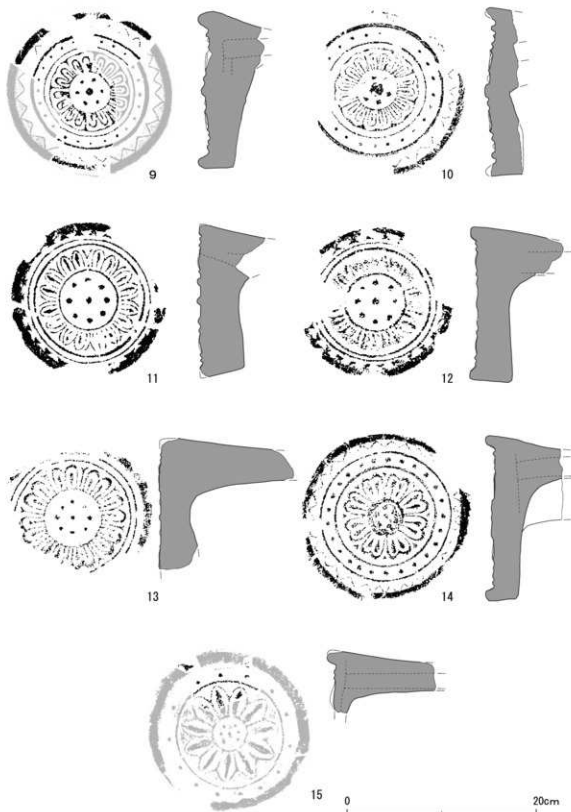
**KYM152** (第14図7) 独立した間弁をもつ複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。ITM08・09と同范である。接合式で、丸瓦の取り付け位置は低く、断面形状は丸瓦凸面側が著しい曲線を描く。丸瓦の先端には連続する半円形の削り込みをいれ、いわゆる歯車状の加工を施している。瓦当は丸瓦に向かって厚みを増し、裏面は平滑に調整されている。胎土は密で粒径1mm程度の長石類を少量含み、焼成は良好で灰～灰白色を呈する。

平城京6301Cと同范で、いわゆる興福寺式軒丸瓦だが興福寺では使用されない「宮系」の製品である(毛利光・花谷1991)。平城Ⅱ期の生産が考えられる。6301Cは製作技法により細分されており(石田2014)、KYM152と同技法のものが平城宮でも確認されているが、割合としては少なく6301Cの中でも副次的に生産されたものに類する。

**KYM153** (第14図8) 間弁が蓮弁を囲むようにそれぞれが連結した複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。外縁の上端に一条の沈線がめぐる。ITM06と同范である。瓦当面に対して水平な剝離面が確認されることから積み上げ技法横置き型一本づくりである(毛利光・花谷1991)。胎土は密で粒径1mm程度のクサリ礫を少量含み、焼成は硬質で灰色を呈する。

平城京6291Aと同范で、今回出土した個体は一部の間弁に彫り加えを確認できることから6291A bに該当し、平城Ⅱ-2期に比定されている。南山城における同范例は、恭仁宮跡、木津川市蟹満寺(中島1991)で認められる。

**KYM154A** (第15図9) 間弁が蓮弁を囲むようにそれぞれ連結した複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。今回出土したものは著しい范傷の進行が認められる。ITM11と同范である。接合式で、



第15図 出土遺物実測図2(軒丸瓦2)

丸瓦凹面に多量の補強粘土を付与し、横ケズリにより台形の接合線を形成する、平城京6282型式に特有の技法が用いられている(川畑2017)。胎土は粗く粒径1～5mmの長石類・クサリ礫を多く含み、焼成は良好で灰色を呈する。

平城京6282Gと同范で、平城Ⅱ-2期の生産が想定されている(岸本1995、川畑2017)。

**KYM154B**(第15図10) 基本文様構成はKYM154Aと同じだが、蓮弁の1つが子葉をもたないのが特徴で、恭仁宮タイプの外縁をもつ。接合式で、KYM154A同様に瓦当裏面の接合線が台形に整形される。裏面の丸瓦凹面の内側は横ケズリ調整されている。胎土は密で粒径1mm程度の長石類とチャートを多く含み、焼成は良好で青灰色から灰白色を呈する。

平城京6282Hと同范で、平城Ⅱ-2期の生産開始が想定されている。南山城における同范例は、恭仁宮跡、平川廃寺、高麗寺跡にあるが、本遺跡出土品は恭仁宮跡内裏西地区において出土するものと製作技法や色調・焼成が一致する。

**KYM155A**(第15図11・12) 独立した間弁をもつ複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。ITM05と同范である。積み上げ技法横置き型一本づくりのもの(11)と接合式のもの(12)がある。接合式のもの3点確認しており、裏面は斜め方向のケズリにより平滑に調整され、文様は不鮮明で范の傷みが進んでいるものとみられる。ほかはすべて一本づくりで、瓦当面に対して水平な粘土剥離面を確認した。胎土は密で粒径1mm以下の長石類、クサリ礫、石英を少量含む。焼成は良好なものから軟質なものもあり、灰色から黄灰色を呈する。

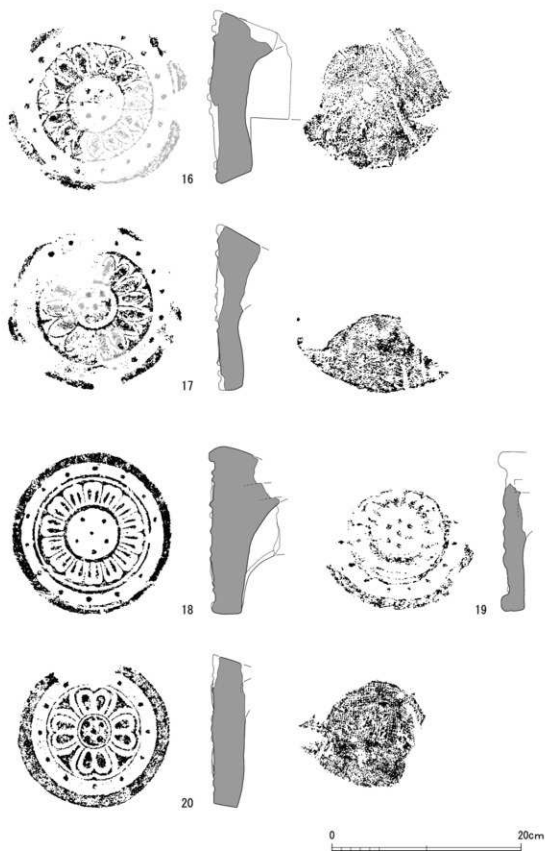
平城京6225Aと同范で、平城宮においては全域で出土するが、特に平城遷都前後の第二次大極殿、東区朝堂院で主体的に使用されており(佐川1993)、平城Ⅱ-2期からⅢ-1期に比定されている。南山城における同范例は、恭仁宮跡、高麗寺跡、城陽市久世廃寺(近藤1981)において認められる。生産地として奈良市中山瓦窯跡が知られている(奈良国立文化財研究所1973)。

**KYM155B**(第15図13) 独立した間弁をもつ複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。KYM155Aと同文だが、文様は平板なものになっている。軒丸瓦に対して水平の剥離面が確認されることから積み上げ技法横置き型一本づくりである。瓦当裏面を平滑にしたのち、丸瓦部凹面から接合部にかけて縦ケズリを施している。胎土はやや粗く粒径1mm程度の長石類、石英、チャートを多く含む。焼成は軟質で灰色から黄褐色を呈する。

平城京6225Eと同范で平城Ⅲ-1期に比定されている。同范例として、京都市おうせんどう廃寺採集例がある(京都市埋蔵文化財研究所編1996)。

**KYM156**(第15図14) 独立した楔形の間弁をもつ複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。側面には范端の破り痕が残ることからA型范である<sup>(注1)</sup>。ITM04と同范である。接合式で、瓦当裏面に立てた丸瓦に補強粘土を付加したのち、接合部に縦ケズリし、ナデで整える。瓦当裏面はケズリ調整で平滑にする。側面も横ケズリによって整える。胎土はやや密で粒径1mm程度の石英とチャートを含み、焼成は良好で灰色から灰白色を呈する。

同范例は確認されていない。外縁形態が斜縁で線鋸歯文が配されていることを考慮すると、奈良時代中頃から後半までには作范されていると考えられる。



第16図 出土遺物実測図3(軒丸瓦3)

**KYM201** (第15図15) 間弁をもたない単弁蓮華文軒丸瓦である。接合式で、接合部は縦ケズリが施されている。胎土はやや粗く粒径1mm程度の長石類を多く含み、クサリ礫も少量含む。焼成は良好で色調は灰色を呈する。

全形がわかる資料は出土していないが、木津川市山城国分寺跡のKM14と同范と考えられる(上原1984)。文様としては平城京6133型式系に類すること、山城国分寺跡において出土することを評価して奈良時代に属すると考えておきたい。同范例は山城国分寺跡のほか、精華町里庵寺(京都府立山城郷土資料館編1983)、久世庵寺において出土しており、京田辺市普賢寺跡(飛鳥資料館編1991・星野2000)、同市三山木庵寺(星野2000)においても採集されている。(溝口泰久)

**KYM202A** (第16図16) 単弁16弁蓮華文軒丸瓦である。ITM10と同范である。瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけて連続する布目痕が確認され、粘土の剥離状況から折り曲げ技法横置き型一本づくりと考えられる。瓦当側面には横ケズリ、瓦当裏面下半には縦ケズリを施す。胎土はやや粗く粒径3mm程度の長石類、石英を多く含み、焼成は良好である。表面は黒色、内部は褐色を呈する。同范例は、大阪市四天王寺で確認されている(藤澤1967・四天王寺文化財管理室編1986)。

**KYM202B** (第16図17) 単弁16弁蓮華文軒丸瓦と想定される。ITM10と同范である。<sup>(R5)</sup>KYM202Aに比べ、中房径が小さく、蓮弁幅が安定しない点で違いが認められる。瓦当裏面から丸瓦部にかけて連続する布目痕が確認され、粘土の剥離状況から折り曲げ技法横置き型一本づくりと考えられる。瓦当側面には横ケズリを施すが、瓦当裏面下半は未調整である。色調や焼成及び胎土はKYM202Aと同様である。

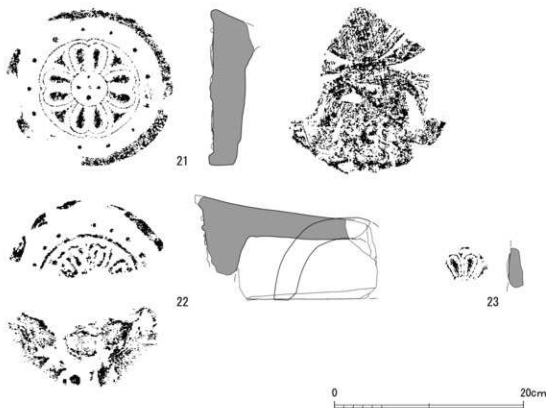
同范例は井手寺跡を除いて確認されていない。

**KYM251** (第16図18) 複弁14弁蓮華文軒丸瓦である。范は外縁にかぶるA型范である。接合式であり、内外面に接合粘土を多く貼り付ける。丸瓦には接合に際して凹凸面にキザミを入れる。瓦当側面には横ナデ、丸瓦を接合した部分にはその上から縦ケズリを施す。胎土はやや粗く粒径1mm程度の長石類、チャート、雲母を含み、焼成は軟質のものが多く、内部は赤褐色を呈し、表面をいぶし風に仕上げたものが多くみられる。

同范例は木津川市の高麗寺跡及び高麗寺3号窟跡でのみ確認されている(中島編1989・2011)。

**KYM252** (第16図19) 複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。范は外縁にかぶるA型范である。接合式であり、接合に際し内外面に粘土を貼り付ける。表面が摩滅しているため、調整等は不明瞭である。胎土は密で粒径1mm程度の長石類、石英、雲母を多く含み、焼成は軟質である。表面は黒色、内部は灰色を呈する。

同范例は、京都市平安宮(大極殿跡・朝堂院跡・豊楽院跡・中和院跡・中務省跡)(古閑2017)だけでなく、京都市西賀茂角社瓦窟跡(近藤編1978)、吹田市吉志部瓦窟跡(増田2012)、大山崎町大山崎瓦窟跡(古閑2022)といった生産遺跡でも確認されている。また、枚方市百済寺跡でも出土している(枚方市文化財研究調査会2015)。当遺跡出土例は大山崎瓦窟跡のものほど范の痛みが進ん



第17図 出土遺物実測図4(軒丸瓦4)

でならず、吉志部瓦窯跡のものに胎土が類似する<sup>(196)</sup>。

KYM253A(第16図20) 複弁4弁蓮華文軒丸瓦である。別個体では瓦当裏面から丸瓦部にかけて連続する布目痕が確認され、粘土の剥離状況から折り曲げ技法横置き型一本づくりと考えられる。瓦当側面と瓦当裏面下半には横ケズリを施す。胎土は密で粒径2mm程度の長石類、チャートを含み焼成は良好である。内部は黄褐色を呈し、表面をいぶし風に仕上げたものが多くみられる。

同范例は平安宮(大極殿跡・朝堂院跡・主水司跡・太政官跡・民部省跡など)(平安博物館編1977)や京内外の複数箇所出土し、京都市広隆寺や同市深草寺跡でも採集例がある(京都市埋蔵文化財研究所編1996)。

KYM253B(第17図21) 複弁4弁蓮華文軒丸瓦である。別個体では瓦当裏面から丸瓦部にかけて連続する布目痕が確認され、粘土の剥離状況から折り曲げ技法横置き型一本づくりと考えられる。本遺跡出土例では明瞭には観察できないが、同范例では外区珠文帯に「目」と「介」を上下に組み合わせた一字が確認される(京都市埋蔵文化財研究所編1996)。瓦当側面には横ナデ、瓦当裏面下半には横ケズリを施す。胎土は密で粒径5mm程度の長石類、チャートを含み焼成は軟質のものが多い。内部は黄褐色を呈し、表面をいぶし風に仕上げたものが多くみられる。

同范例は京都市北野庵寺でのみ確認されている(京都市埋蔵文化財研究所編1983)。

KYM254(第17図22) 開弁を持たない複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏面から丸瓦部四

付表3 軒九瓦型式一覧及び計測表

型式 (KYM)	文様	点数	型式対応			技法	同范例等
			(破片数)	井手町型式	平城型式		
101	単弁 24 弁	113	ITM02	6320Ab,c	高麗寺 KmM33B	接合式	恭仁宮 KM01 (6320Aa) を改范
102	単弁 12 弁	142	ITM01	6130A	恭仁宮 KM16	接合式	
103	単弁 11 弁	191	ITM03	6134C		接合式	内里八丁遺跡、三山木廃寺
151	複弁 8 弁	1		6284A	恭仁宮 KM03A	接合式	
152	複弁 8 弁	4	ITM08・09	6301C		接合式	
153	複弁 8 弁	3	ITM06	6291A	恭仁宮 KM15A	横置き型 一本づくり	蟹満寺
154A	複弁 8 弁	1	ITM11	6282G		接合式	
154B	複弁 8 弁	1		6282Ha	恭仁宮 KM02A	接合式	平川廃寺、高麗寺跡
155A	複弁 8 弁	16	ITM05	6225A	恭仁宮 KM19	接合式 一本づくり	高麗寺跡、久世廃寺、中山瓦窟跡
155B	複弁 8 弁	6		6225E		横置き型 一本づくり	おうせんどう廃寺、薬師寺
156	複弁 8 弁	35	ITM04			接合式	
201	単弁	3			山城国分寺 KM14		里廃寺、久世廃寺、三山木廃寺、曹賢寺跡
202A	単弁	21	ITM10			横置き型 一本づくり	四天王寺
202B	単弁	19	ITM10			横置き型 一本づくり	
251	複弁 14 弁	563			高麗寺 KmM41	接合式	高麗寺 3号堂跡
252	複弁 8 弁	7				接合式	平安宮 (大極殿跡・朝堂院跡など)、西賀茂角社瓦窟跡、吉志郡瓦窟跡
253A	複弁 4 弁	22				横置き型 一本づくり	平安宮 (大極殿跡・朝堂院跡など)、広隆寺、深草寺跡
253B	複弁 4 弁	55				横置き型 一本づくり	北野廃寺
254	複弁 8 弁	35				横置き型 一本づくり	
001	単弁	1					(6138 型式系か)
不明		117	KYM101～103: 63点, KYM102・103: 5点, KYM202A・B: 4点, KYM253A・B: 6点, その他: 39点				
合計		1356					

稲ノ木型式 (KYM)	井手町型式 (ITM)	平城宮・京	直径	内 区				外 区				
				中房径	蓮子数	弁区径	弁 数	内縁		外縁		
								幅	文様	幅	高	文様
101	02	6320Abc	169	37	1+8	91	T24	11	S24	21	15	RV24
102	01	6130A	167	35	1+8	90	T12	13	S24	18	16	LV24
103	03	6134C	174	37	1+8	86	T11	13	S21	22	15	LV21
151		6284A	160	36	1+6	87	F8	15	S24	22	14	(LV23)
152	08・09	6301C	162	50	1+5+10	106	F8	11	S20	16	9	(LV33)
153	06	6291A	153	(29)	(1+6)	86	F8	12	(S16)	19	6	(LV16)
154A	11	6282G	163	43	1+6	95	F8	10	(S24)	20	15	(LV25)
154B		6282Ha	178	42	1+6	102	F8	11	(S24)	19	11	(LV25)
155A	05	6225A	162	62	1+8	116	F8	7	K	15	6	(RV26)
155B		6225E	170	59	1+8	120	F8	9	K	13	3	RV
156	04		172	40	1+6	105	F8	11	S25	16	11	LV31
201			-	-	-	-	T	12	S	18	10	-
202A	10		181	61	1+6	123	T16	16	S16	8	3	なし
202B	10		173	48	1+6	116	-	15	S	7	3	なし
251			168	57	1+5	125	F14	7	S14	8	5	なし
252			164	36	1+6	98	F8	10	(S16)	13	7	なし
253A			157	36	1+4	102	F4	14	S12	12	1	なし
253B			163	37	1+4	105	F4	13	S13	10	5	なし
254			185	43	1+4	113	F8	17	S	16	9	なし
001			-	-	-	-	T	-	-	-	-	-

※計測値はmm

弁数 T: 単弁 F: 複弁、内縁文様 S: 珠文 K: 圓縁、外縁文様 LV: 線刻面文 RV: 凸刻面文

面にかけて連続する布目痕が確認され、丸瓦部側面にも布目痕が残るので、折り曲げ技法横置き型一本づくりと考えられる。また、別個体では、成形台から外した後に瓦当裏面に粘土を詰め、瓦当厚を確保するものもある。この場合に、瓦当裏面には布目痕が残らないが、裏面側の付加粘土が一部剥離した部分に布目痕が確認できる。胎土はやや粗く粒径5mm程度の長石類、石英、チャートを多く含み、焼成は良好である。表面は黒色、内部は褐色を呈する。

同范例は確認されていない。

(吉岡孝紘)

**K Y M001** (第17図23) 細片で外縁形態や中房形状など全形は不明だが、間弁をとまなう単弁蓮華文軒丸瓦である。胎土は密で粒径1mm未満の長石類を少量含み、焼成はやや軟質で茶褐色を呈する。文様は平城京6138型式に類似する。

## ②軒平瓦

**K Y H101** (第18図24) 3回反転均整唐草文軒平瓦である。I T H52と同范である。凹面に側板圧痕がないことから一枚づくりと考えられる。顎形態は顎部が急斜をもつ直線顎である。凸面はケズリ・ナデで顎まで成形したのち、縦縄タキを施している。凹面は瓦当付近のみを横ケズリで調整している。胎土は密で粒径1mm未満の長石類と石英を少量含み、焼成は良好で灰白色を呈する。

平城京6671Cと同范で、いわゆる興福寺式軒平瓦であるが、興福寺では使用されない「宮系」の製品である。平城Ⅱ期頃の生産が考えられている。K Y H101と製作技法が一致するものは、平城宮内においては県犬養門でのみ出土している(石田2014)。

**K Y H102A** (第18図25) 4回反転均整唐草文軒平瓦である。製作技法は一枚づくりで、顎形態は曲線顎Ⅱである。凸面はケズリで成形したのちに、縄タキを施している。凹面は瓦当付近を横ケズリしている。胎土は密だが粒径2mm以下の長石類を比較的多く含み、焼成は硬質で灰色を呈する。

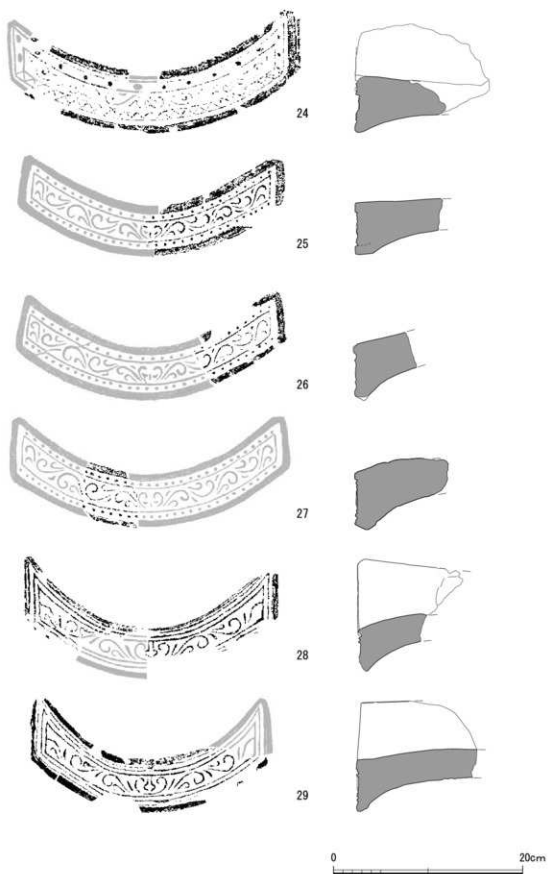
平城京6721Cと同范である。平城Ⅱ-2期以降に生産と供給されたものと考えられている。南山城における同范例は、恭仁宮跡、平川廃寺、高麗寺跡、蟹満寺、里廃寺、京田辺市興戸廃寺(田辺町教育委員会1982)、精華町樋ノ口遺跡(伊野1992)、木津川市上粕北遺跡(筒井ほか2012)に見出せる。

**K Y H102B** (第18図26) 4回反転均整唐草文軒平瓦である。一枚づくりで、顎形態は曲線顎Ⅱである。凸面は縦ケズリにより成形されている。残存状況からタキの痕跡は不明である。凹面は瓦当付近を横ケズリしている。胎土は密で粒径2mm程度の長石類を少量含み、焼成は硬質である。色調は緑灰色で一部にぶい赤褐色を呈する。

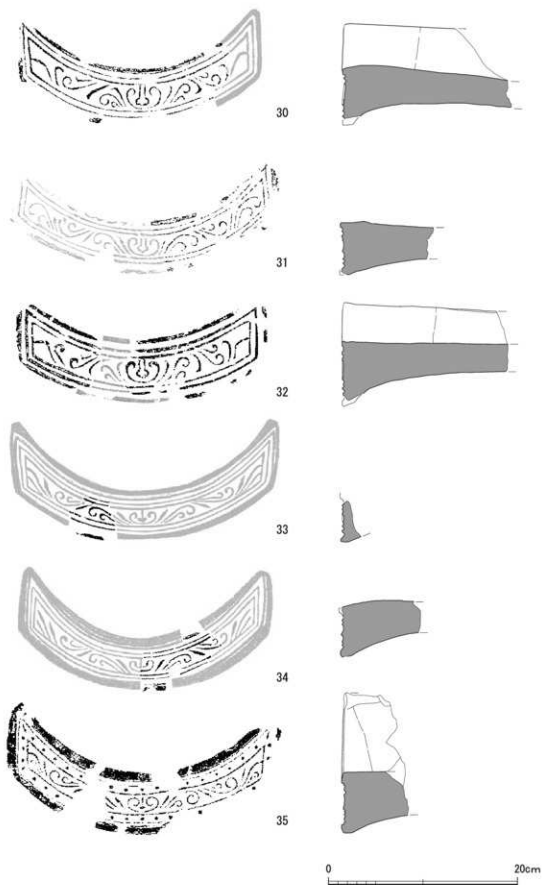
平城京6721Dと同范であり、范に大きな傷が生じた6721D bに相当するものが出土したことから、平城Ⅱ-2期以降に生産と供給されたものと考えられている。井手寺跡近傍の井手町岡田池瓦窟跡から焼け歪んだ6721Dが採集されている(常磐井1984)。

**K Y H102C** (第18図27) 4回反転均整唐草文軒平瓦である。一枚づくりで、顎形態は曲線顎Ⅱである。表面の調整等は残存状況から不明である。凹面は瓦当付近を横ケズリしている。胎土





第18図 出土遺物実測図5(軒平瓦1)



第19図 出土遺物実測図6(軒平瓦2)

はやや粗く粒径5mm以下の長石類を多く含み、焼成はやや軟質で灰白色を呈する。

平城京6721Fと同范で、平城Ⅱ-2期以降に生産と供給されたと考えられている。南山城での同范例として、恭仁宮跡隣接地(永澤1999)で出土しており、善賢寺跡においても採集されている。

KYH103A(第18図28・29) 3回反転均整唐草文軒平瓦である。左第2単位の支葉が内に巻き込み、右第3単位の支葉を1つ欠くのが特徴である。ITH53、平城宮6663Cと同范で、左第2単位の子葉の影り変え前後でa・bに分けられる。范の段階が判別できるもので、KYH103Aa(28)は11点、KYH103Ab(29)は117点出土しており、bのなかでも外区の圏線の間が埋まるほどに范傷が進んでいるものは104点を数える。

製作技法は一枚づくりである。aは顎面に平坦面のない曲線顎Ⅰが多く、凸面には太い縄の圧痕が残し、凹面は瓦当付近を横ケズリする。胎土は密で粒径1mm未満の長石類を少量含む。焼成は硬質なものからやや軟質なものがある。bは平坦面のある曲線顎Ⅱで、凸面はナデ調整して顎まで整形したのち、縦縄タタキを施し、凹面は広く布目を擦り消し、瓦当付近のみ横ケズリする。胎土は密で粒径1mm未満の長石類と石英を少量含み、焼成は硬質で青灰色を呈するものが多い。

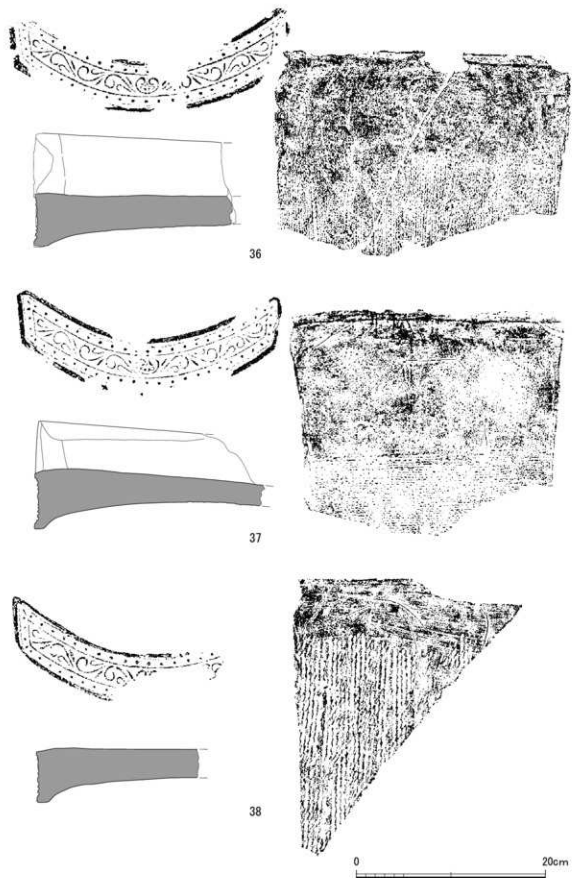
同范例は南山城では、恭仁宮跡、久世廃寺において確認される。また、岡田池瓦窯跡より採集されている(京都府立山城郷土資料館編1983)。平城京では全域で出土するが平城宮東区朝堂院や第二次大極殿での出土が目立ち、恭仁宮遷都から平城遷都を挟んだ前後の時期の生産が考えられている(佐川1993、石田2017)。

KYH103B(第19図30) 3回反転均整唐草文軒平瓦である。ITH54と同范である。右脇区から范傷が生じ始め、范割れをしているものもある。製作技法は一枚づくりで、顎形態は曲線顎Ⅱである。凸面はケズリ、ナデで成形したのち、縦縄タタキを施している。凹面は瓦当付近をケズリで調整し、布目を若干ナデで擦り消している。胎土は密で粒径1mm未満の長石類とチャートを少量含み、色調は青灰色から灰色を呈する。焼成は硬質から軟質なものを確認した。

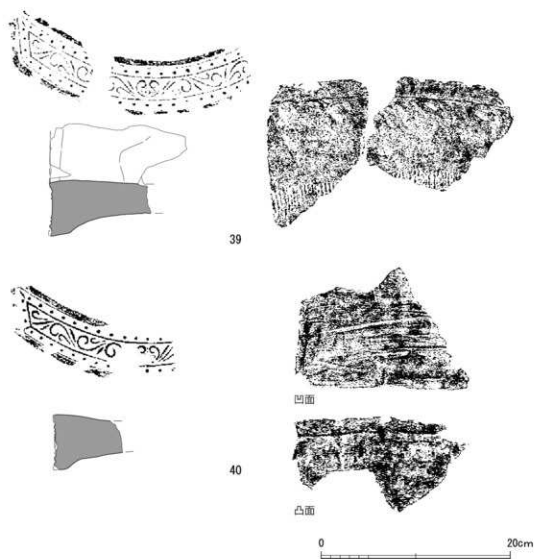
平城京6663Dと同范で、平城Ⅲ-1期に比定されている。ただし、他の6663型式に比べると平城京内における出土量は少ない。

KYH103C(第19図31) 3回反転均整唐草文軒平瓦である。左右第3単位の主葉が巻き込み圏線に接しないのが特徴である。ITH55と同范である。製作技法は一枚づくりで、顎形態は曲線顎Ⅱである。凸面にはナデのち縄タタキを施し、凹面は瓦当付近をケズリで調整している。胎土は粗く最大粒径10mm程度の長石類とクサリ礫を多く含み、焼成は良好で灰色を呈する。6663型式の中でも文様としては新相の6663F・H・I・Jに近似するが、KYH103Cは唐草の基部が圏線に接しない点で異なる。かつて、6663I同范と報告(茨木編2014)されたが異范であり、同范例は不明である。6663型式の年代観から、平城Ⅲ期頃の生産を見込みたい。

KYH103D(第19図32) 3回反転均整唐草文軒平瓦である。KYH103B(6663D)を模倣した文様であるが、左第1単位の第1子葉が内向きであることや唐草の巻き込みなど、細部に相違点を看取できる。ITH56と同范である。



第20図 出土遺物実測図7(軒平瓦3)



第21図 出土遺物実測図8(軒平瓦4)

製作技法は一枚づくりで、顎形態は曲線顎Ⅱである。凸面はケズリ、ナデで成形したのち、繩の密度が粗い工具で縦縄タキを施している。凹面は瓦当付近を横ケズリで調整し、布目をナデで若干擦り消している。胎土は密で粒径1mm以下の長石類を少量含み、焼成は良好で灰色から灰白色を呈する。

同范例は確認されていない。KYH103Bを模倣していることから、平城Ⅲ期頃の生産を想定したい。

KYH104A(第19図33) 3回反転均整唐草文軒平瓦で、KYH103に類似するが、内区の幅が狭小である。残存状態が悪く製作技法は不明である。胎土は密で粒径1mm未満のクサリ礫を少量含み、焼成は良好で灰白色を呈する。

いずれも小片だが、唐草のバランスや外区の圏線から、平城京6681Bと同范と考えられる。平城Ⅱ-2期に比定されている。

**K Y H 104B** (第19図34) 3回反転均整唐草文軒平瓦である。基本の文様構成はK Y H 104Aと共通するが、中心飾りの形状が異なる。残存状態が悪く製作技法は不明だが、顎形態は曲線顎である。胎土はやや粗く、粒径2mm以下の長石類とクサリ礫を多く含み、焼成はやや軟質で灰白色を呈する。

平城京6681Cと同范で、平城Ⅱ-2期に比定されている。

**K Y H 105** (第19図35) 3回反転均整唐草文軒平瓦である。凸面顎付近をナデで整え、凹面は瓦当付近を横ケズリしている、顎形態は曲線顎Ⅱである。胎土は密で砂礫を含み、焼成は良好で灰白色を呈する。

平城京6682Aと同范で、平城Ⅱ-2期に比定されているが、本例のように曲線顎Ⅱの製品は組み合う軒丸瓦の年代観からⅢ期までの生産が見込まれている。南山城では恭仁宮跡で同范品が出土している。生産地として奈良市山陵瓦窯跡(奈良国立文化財研究所編1973)が挙げられる。

**K Y H 106** (第20図36～第21図40) 4回(3回半)反転均整唐草文軒平瓦である。I T H 51、平城京6691Aと同范で、平城Ⅱ-2期からⅣ-1期の生産が想定されている。

出土した837点のうち、製作技法が判別可能となる瓦当からの残存長が10cm以上ある破片は437点を数え、このうち縄タタキの圧痕まで残るものは217点である。これらはすべて一枚づくりであるが、製作技法から大きく5分類できる。

①(36) 凸面をケズリ、ナデで成形したのち、縄の密度が13本/3cm程度の叩き板を用いた縦縄タタキを施す。凹面を瓦当から全長の半分程度の範囲で布目を擦り消す。胎土は密で粒径3mm以下の長石類を少量含み、焼成は硬質で灰色を呈する。143点を数える。

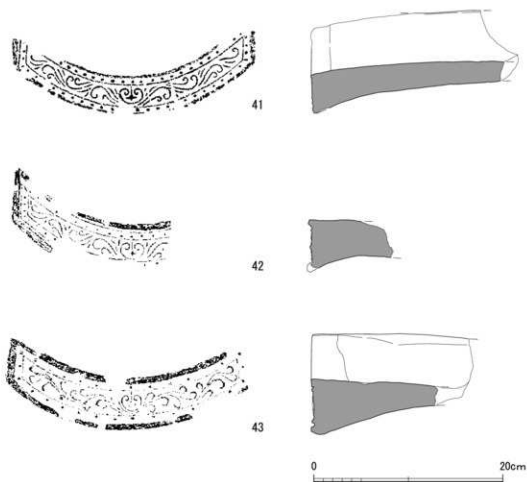
②(37) 凸面をケズリ、ナデで成形したのち、縄の密度が11本/3cm程度の横方向に縄を巻いた叩き板を用いて縄タタキを施す。凹面を瓦当から全長の半分程度の範囲で布目を擦り消す。胎土は密で、粒径1～3mmの長石類とチャートを少量含み、焼成は良好で灰色から灰白色を呈する。27点を数える。

③(38) 凸面を縄の密度が7本/3cm程度の叩き板を用いた縦縄タタキを施したのちに、顎部をナデ調整して縄圧痕を擦り消す。凹面を瓦当から全長の半分程度の範囲で布目を擦り消す。胎土は密で粒径1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好なものから軟質なものがあり、色調は灰色から黒灰色を呈する。7点を数える。

④(39) 凸面をヘラケズリで凸面顎部を成形したのちに、縄の密度が9本/3cm程度の叩き板を用いた縦縄タタキを施す。凹面を瓦当から全長の半分程度の範囲で布目を粗雑に擦り消す。胎土は密だが、粒径1～5mmの長石類をよく含み、焼成は硬質で青灰色を呈する。7点を数える。

⑤(40) 凸面に縦縄タタキを施したのちに、顎周辺をナデ調整して縄圧痕を擦り消す。凹面を瓦当から全長の半分程度の範囲で工具を用いてナデ調整する。胎土は非常に精良で砂粒をほぼ含まず、焼成は良好で青灰色を呈するいぶし焼風の製品である。3点を数える。

これらは、范傷の進行から生産順序が④→⑤・①→②→③と判明する。技法や胎土焼成から④は恭仁宮跡内裏西地区出土品、⑤は恭仁宮大極殿跡出土品と一致し、范傷の進行段階もそれぞれ



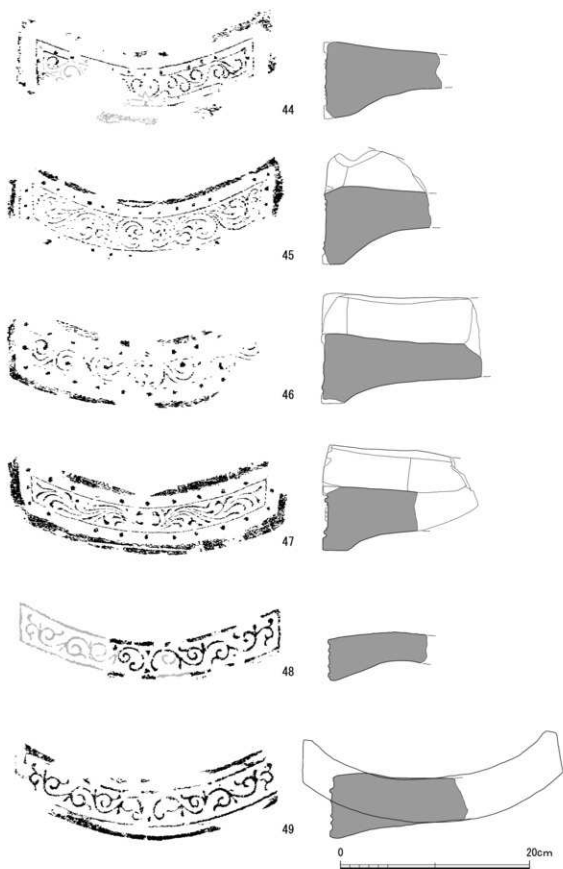
第22図 出土遺物実測図9(軒平瓦5)

共通する。

同範例は南山城では恭仁宮跡、高麗寺跡、平川廃寺で出土しており、岡田池瓦窯跡でも採集されている。平城京では平城宮をはじめ広い範囲で出土し、斑鳩町法隆寺では東院の創建瓦としても使用されたと考えられる(佐川1993)。

KYH107A(第22図41) 4回(3回半)反転均整唐草文軒平瓦である。ITH59と同範である。製作技法は一枚づくりで、顎形態は曲線顎Ⅱである。凸面は縦ケズリのち縦ナデを施し、顎面を横ケズリして顎面を平坦に仕上げている。凹面は瓦当付近のみを横ケズリしている。顎面に明瞭な平坦面をもたないものも少量ある。胎土はやや粗く粒径1～3mmの長石類やチャートなどの砂粒をよく含み、焼成は硬質なものが多く灰色を呈する。

同範例は百済寺跡のH01Aが挙げられ、百済寺創建期の主要軒瓦である。南山城では蟹満寺、八幡市西山廃寺(江谷2010)、城陽市正道遺跡(高橋編1973)に同範例がある。年代的位置づけには諸説あるが、平城京6691型式や6689型式を祖型とすると考えられ、奈良時代でも半ば以降に位置づけられる(古閑2010、上原2021)。百済寺跡には製作技法も2種確認されており、曲線顎Ⅱのものは凸面タタキ技法、直線顎のものは凸面押圧技法である。今回出土した顎面に明瞭な平坦面をもたないものは、押圧技法を用いている可能性があるが、凸面にタタキもしくは押圧の痕跡を確



第23図 出土遺物実測図10(軒平瓦6)



認できる個体は出土しなかったため、技法で明確に二分することができるかは不明である。

**KYH107B** (第22図42) 4回(3回半)反転均整唐草文軒平瓦である。文様構成は基本的にKYH107Aと同じだが、左右第4単位の支葉が1葉多い。曲線顎Ⅱとみられ、凸面を縦ケズリで調整、凹面の瓦当付近を横ケズリしている。胎土はやや粗く粒径1mm以下の長石類、最大5mm程度のクサリ礫をよく含み、焼成は良好で灰色から灰白色を呈する。

同范例は管見の限り見当たらない。しかし、技法と文様ともに、百濟寺所用軒瓦に酷似する。百濟寺跡の同文軒平瓦(H01A・B)と比較すると、脇区と上下外区を画す杏仁形珠文などの共通点からH01Aに類似する。

**KYH108** (第22図43) 4回反転均整唐草文軒平瓦である。範端の被り痕が側面や凸面に観察されることから、範は瓦当に被るA型範である。ITH60と同範である。製作技法は一枚づくりで、顎形態は曲線顎Ⅱである。凸面には縦ケズリと布目瓦痕が看取されることから、押圧技法を用いていることがわかる。凹面は瓦当付近のみ横ケズリしている。胎土はやや粗く粒径1mm程度の長石類を多量に、微細な石英を少量含む。焼成は硬質で灰色を呈する。

同范例は確認されていない。

(溝口泰久)

**KYH109** (第23図44) 4回反転均整唐草文軒平瓦である。菱形の中心飾りを持つ。外区珠文帯の外側にさらに界線がめぐる点が特徴的である。顎部下端には横ケズリ、頸部から凸面には縦ケズリを施し、曲線顎に仕上げる。凹面瓦当側2cm程度の範囲には横ケズリ、凹面側縁には約1cm幅の縦ケズリを施す。胎土はやや粗く粒径5mm程度の長石類、石英、チャートを多く含み、焼成は良好である。表面は黒色、内部は褐色を呈する。

同范例は確認されていない。

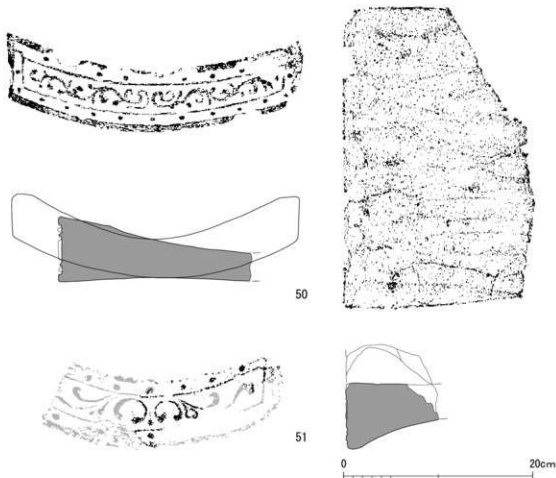
**KYH201** (第23図45) 対向C字2回反転均整唐草文軒平瓦である。顎部下端には横ケズリ、頸部から凸面には縦ケズリを施し、曲線顎に仕上げる。凹面瓦当側3cm程度の範囲には横ケズリ、凹面側縁には約2cm幅の縦ケズリを施す。胎土はやや粗く粒径3mm程度の長石類、石英、チャートを多く含み、焼成は良好である。表面は黒色、内部は褐色を呈する。

同范例は四天王寺で確認されている。

**KYH202** (第23図46) 対向C字3回反転均整唐草文軒平瓦である。中心に「栗」字を配する。平安宮内裏跡出土の複線唐草文軒平瓦(平安博物館編1977)に唐草の展開がよく似ることから、その前段階に位置付けられる。顎部下端には横ケズリ、頸部から凸面には縦ケズリを施し、曲線顎に仕上げる。凹面瓦当側9cm程度の範囲には横ケズリ、凹面側縁には縦ケズリを施す。胎土は密で粒径2mm程度の長石類、石英、雲母を含む。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。

同範と考えられる資料には、京都市天龍寺付近E地点採集品(京都市埋蔵文化財研究所編1997)がある。

**KYH203** (第23図47) 対向C字3回反転均整唐草文軒平瓦である。顎部下端には横ケズリ、頸部から凸面には縦ケズリを施し、曲線顎に仕上げる。凹面瓦当側9cm程度の範囲には横ケズリ、凹面側縁には約2cm幅の縦ケズリを施す。胎土は密で淡色の粘土が層状に入り込み、粒径3



第24図 出土遺物実測図11(軒平瓦7)

mm程度の長石類、石英、チャートを含む。焼成は良好なものからやや軟質なものまでであり、前者は灰色、後者は黄白色を呈する。

同范例は平安宮(内裏跡・朝堂院跡・豊楽院跡・真言院跡・民部省跡など)(平安博物館編1977)や京内外の複数箇所出土し、生産遺跡では京都市池田瓦窯跡と同范である(青山1984)。また、深草寺跡や京都市栗栖野瓦窯跡にも採集例がある(京都市埋蔵文化財研究所編1996)。KYH203は、池田瓦窯跡出土資料にみられる特徴的な<sup>(48,7)</sup>傷が全く確認できず、胎土と色調も栗栖野瓦窯跡採集品に近いので、栗栖野瓦窯生産品の可能性が高い。

KYH301(第23図48・49) 4回反転均整唐草文軒平瓦である。上外区を削り落としたものを①(48)削り落とさないものを②(49)とする<sup>(48)</sup>。総出土点数108点のうち、①が19点、②が89点であり、②が圧倒的に多い。両者ともに一枚づくりと思われる。①では凸面に縦縄タタキを施したのち、瓦当面付近に複数回横ケズリを施し、さらに瓦当面から離れた部分では縦ケズリを施す。顎形態は曲線顎風になる。胎土はやや粗く、粒径2mm程度の長石類、石英を多く含み、焼成は良好である。基本的に灰褐色だが、内部が明赤褐色を呈するものもある。②では凸面の瓦当面付近では横ケズリによって顎面を形成するが、それ以外の部分は縦ケズリを施すことによって曲線顎Ⅱに近い顎形態となる。凸面にはタタキや押圧の痕跡が確認できておらず、タタキ成形か押圧成形か

付表4 軒平瓦一覧表

型式 (KYH)	点数 (破片数)	型式対応			同范例等
		井手町型式	平城型式	その他遺跡	
101	2	ITH52	6671C		
102A	1		6721C	恭仁宮 KH04A	高麗寺跡、平川庵寺、蟹満寺、里庵寺、 樋ノ口遺跡、上泊北遺跡
102B	5		6721Db		岡田池瓦窯跡
102C	2		6721F		恭仁宮隣接地、普賢寺跡
103A	128	ITH53	6663Ca,b	恭仁宮 KH06E	高麗寺跡、久世庵寺、岡田池瓦窯跡、 中山瓦窯跡
103B	118	ITH54	6663D		
103C	15	ITH55			
103D	21	ITH56			(KYH103B 模倣)
104A	2		6681B		
104B	6		6681C		
105	1		6682A	恭仁宮 KH08B	山城瓦窯跡
106	837	ITH51	6691A	恭仁宮 KH01	高麗寺跡、平川庵寺、法隆寺、岡田池瓦窯跡
107A	41	ITH59		百濟寺 H01A	蟹満寺、西山庵寺、正造遺跡、百濟寺跡
107B	1				
108	55	ITH60			四天王寺
109	31				
201	44				
202	1				天龍寺付近採集例、栗栖野瓦窯跡産か
203	69				平安宮(内裏跡、朝堂院跡・農楽院跡など)、深 草寺跡、池田瓦窯跡、栗栖野瓦窯跡
301	108	ITH57・58		山城国分寺 KH05	甲賀寺跡、伊賀国分寺跡、志水庵寺、興戸庵寺、 普賢寺跡、美濃山瓦窯跡群
302	535			高麗寺 KmH42	高麗寺3号窯跡
303	1			山城国分寺 KH09	
不明	73	KYH102A～D: 24点、その他: 49点			
計	2064				

判断できない。なお、②のみ瓦当面にハナレ砂が付着する。胎土はやや粗く粒径1mm程度の長石類、石英を含み、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。

同范例は甲賀市甲賀寺跡(大道ほか2009)、伊賀市伊賀国分寺跡(森川・山田1980)、八幡市美濃山瓦窯跡群(小池ほか2014)、同市志水庵寺(江谷1978)、興戸庵寺(溝口2022)、普賢寺跡、山城国分寺跡で確認されている。②では外区の溝が埋まる大きな范傷が複数箇所確認でき、既知の事例の中で最も後出すると考えられる。これらは基本的に奈良時代の所産と想定されるが、KYH301②は平安時代に降る可能性がある。

**KYH302**(第24図50) 4回反転唐草文軒平瓦である。中心部分における唐草文の展開が左右で異なる。凹面から側面への連続した布目痕、凸面に部分的に残る布目痕から、凸面布目押圧技法により成形されたと考えられる。頸部から平瓦部凸面にかけて縦ケズリを施し、直線線に仕上げ。凹面瓦当側6cm程度の範囲には横ケズリ、凹面側線には約2cm幅の縦ケズリを施す。胎土と焼成及び色調はKYM251と酷似する。

同范例は高麗寺跡でのみ確認されており、KmM41と組み合せて高麗寺3号窯跡で生産されたと考えられている。

**KYH303**(第24図51) 2回反転均整唐草文軒平瓦である。頸部下端には横ケズリ、頸部から凸面には縦ケズリを施し、曲線頸に仕上げる。凹面には横ケズリを施す。胎土はやや粗く粒径3mm程度の長石、石英を多く含み、焼成は良好である。表面は黒色、内部は黄褐色を呈す。

付表5 軒平瓦計測表

柄ノ木型式 (KYH)	井手町型式 (ITH)	平城宮・京	瓦 当 面									
			最大幅	厚さ	内区		上外区		下外区		脇区	
					厚さ	文様	厚さ	文様	厚さ	文様	幅	文様
101	52	6671C	(285)	43	20	KK	13	(GS10)	12	(LV23)	9	GS2
102A		6721C	(257)	34	22	KK	5	(S26)	5	(S32)	4	なし
102B		6721Db	(266)	35	21	KK	5	(S26)	5	(S32)	4	なし
102C		6721F	(275)	35	25	KK	7	(S33)	8	(S34)	(5)	(なし)
103A	53	6663C	270	40	21	KK	5	K	6	K	8	K
103B	54	6663D	(250)	46	29	KK	8	K	8	K	6	K
103C	55	-	-	40	25	KK	7	K	4	K	10	K
103D	56	-	-	54	31	KK	10	K	10	K	10	K
104A		6681B	(264)	(33)	13	KK	(7)	K	(8)	K	(10)	K
104B		6681C	(240)	32	23	KK	5	K	4	K	5	K
105		6682A	256	38	22	KK	6	S17	6	(S17)	7	S3
106	51	6691A	265	40	23	KK	7	S21	7	S21	7	S3
107A	59		241	31	21	KK	5	S24	5	S23	5	S3
107B			-	35	24	KK	6	S	5	S	5	S3
108	60		239	36	26	KK	6	S2	9	S12	5	S3
109			249	53	24	KK	15	S13	31	S	16	S3
201			266	56	35	KK	11	S14	21	S13	11	S4
202			-	49	29	KK	10	S	23	S	10	S3
203			267	42	25	KK	9	S9	9	S9	10	S3
301			-	50	37	KK	6	なし	6	なし	6	なし
302			293	50	31	KK	10	S9	10	S9	10	S3
303		7769	-	57	35	KK	12	S	12	S	-	-

※計測値はmm

内区文様 KK:均等唐草、外区文様 K:團圓 S:珠文 GS:杏仁形珠文 LV:縁部曲文

同范例は、山城国分寺跡、奈良市興福寺(奈良国立文化財研究所1959)、平城京跡左京一条三坊(7769型式)(田辺1975)で確認されている。(吉岡孝哉)

### (3)丸・平瓦

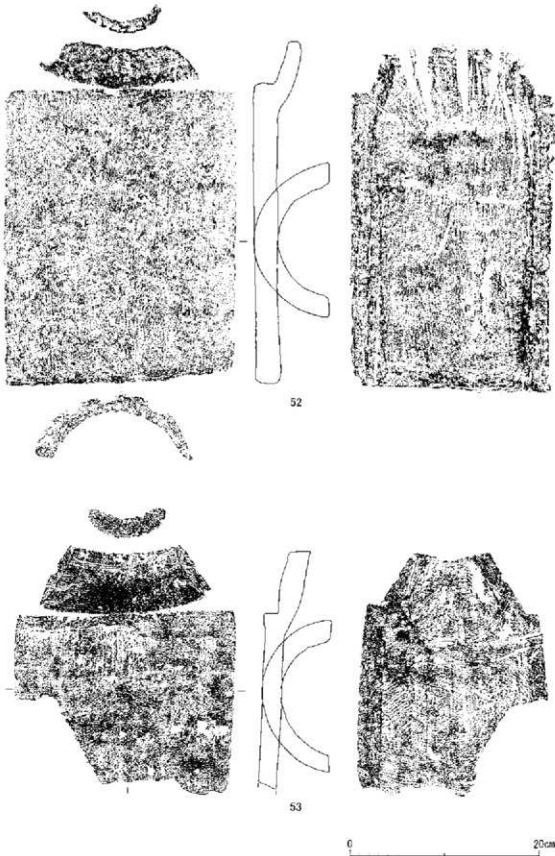
出土した遺物の大半は、丸・平瓦であった。出土点数が膨大なため、詳細な選別、分類、数量の計測などは不十分である。

丸・平瓦については、残存状態が良く、特徴を把握できる個体を報告する。<sup>(R9)</sup>

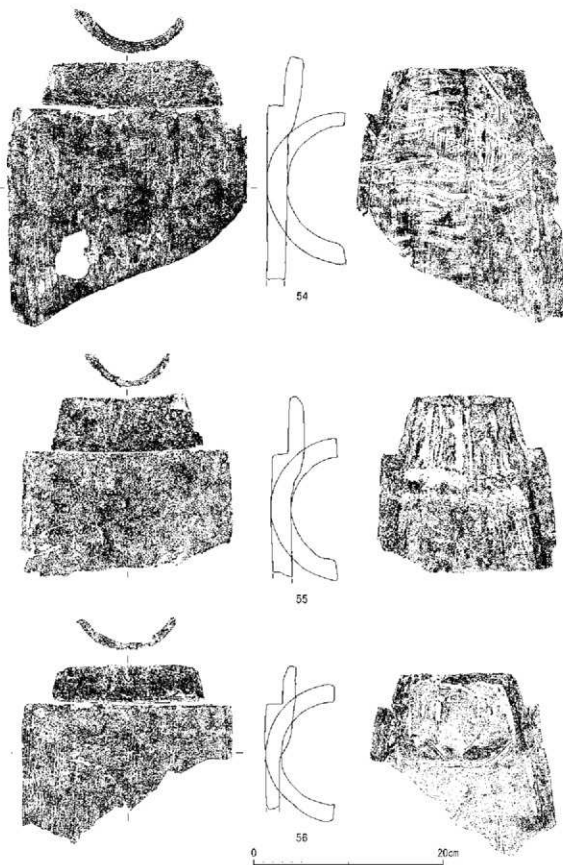
#### ①丸瓦(第25・26図52~56)

52は、玉縁の形状は端部に向かってすぼまり、凹面の玉縁基部から端部にかけての屈曲は弱い。凸面は、筒部にはナデを施すが、部分的に縦縄タキの痕を残す。玉縁部には横ナデを施し、水切りの変帯のある個体もみられる。また、一部には、玉縁基部から肩部にかけての連結面に玉縁部を成形する際に使用した工具痕と思われるものが残る。凹面には糸切痕と布目が残る、玉縁端部から基部にかけて布の絞り目痕跡を残す。焼成はやや不良で黄褐色を呈するが、外面がいぶし焼き風になるものもみられる。胎土はやや粗雑で砂粒や褐色粒を含む。色調と胎土がKYM 251・KYH302に類似するため、高麗寺3号窯跡の製品であると考えられる。詳細な数量は不明であるが、同様の特徴をもつ丸瓦が多くを占める。

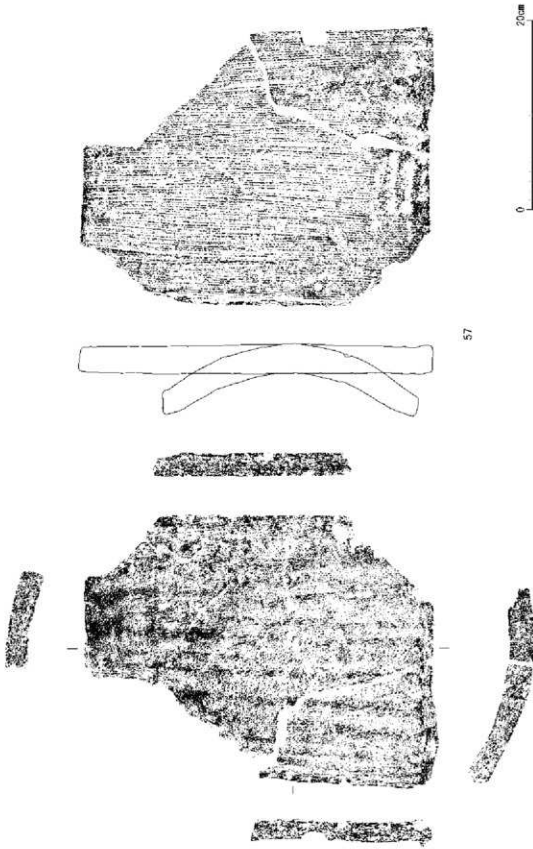
53は、玉縁の形状は端部に向かってすぼまり、凹面の玉縁基部から端部にかけての屈曲は弱い。凸面は筒部には横ナデを施し、一部に縦縄タキの痕を残す。玉縁部には横ナデと側面に面取りを施す。凹面は筒部に糸切痕と布目が残る、側面にケズリを施す。焼成は良好で灰白色を呈する。



第25図 出土遺物実測図12(丸瓦1)

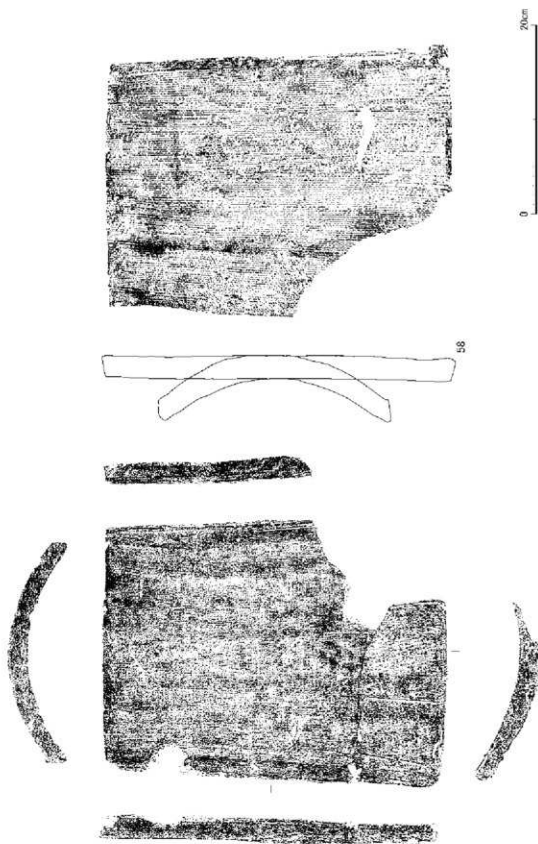


第26図 出土遺物実測図13(丸瓦2)



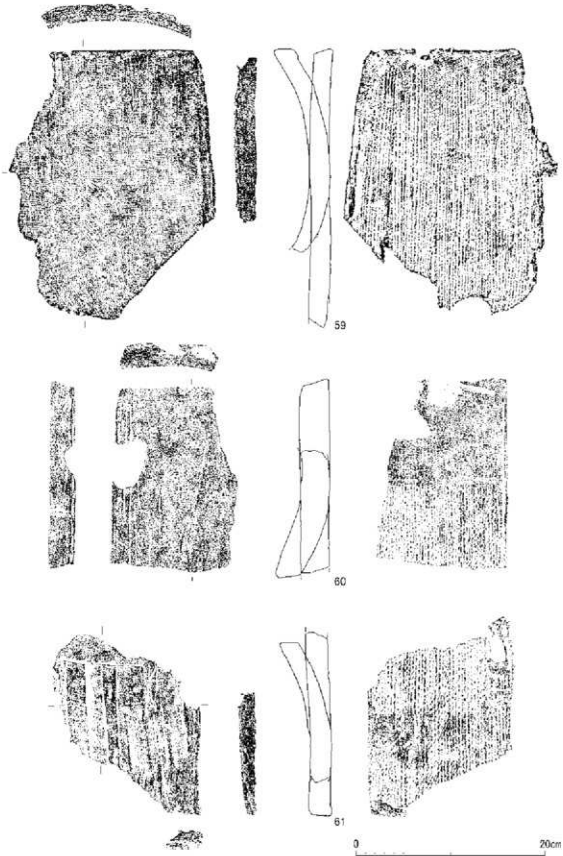
57

第27図 出土遺物実測図14(平瓦1)

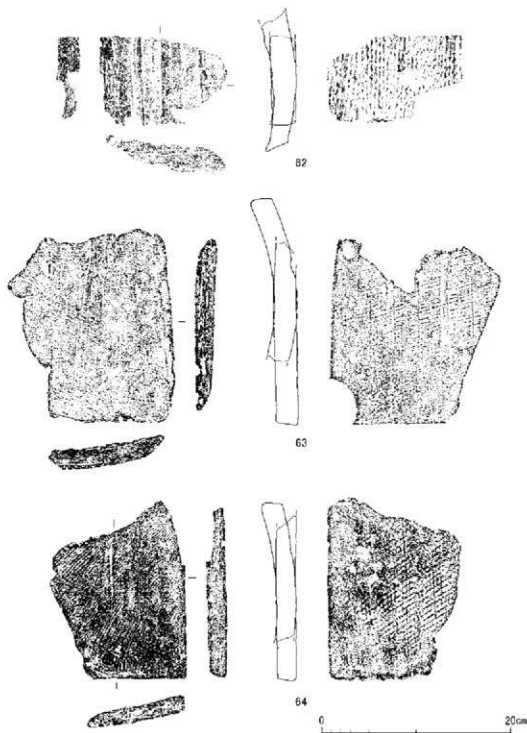


第28図 出土遺物瓦圖15(平瓦2)





第29図 出土遺物実測図16(平瓦3)



第30図 出土遺物実測図17(平瓦4)

胎土は粗雑で白色粒を含む。

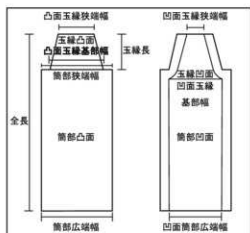
54は、玉縁の形状は直立的に立ち上がり、凹面の玉縁基部から端部にかけての屈曲はやや強い。凸面は筒部には縦ナデ、端部付近には横ナデが施される。玉縁部には横ナデが施される。凹面は乱れた布目が残り、筒部側縁に面取りが施され、玉縁部は側面の一方のみ筒部の端面方向からの面取りと、端縁に面取りが施される。焼成は良好で外面は黒灰色、断面は灰白色を呈する。胎土は精良である。

付表6 丸瓦一覧表

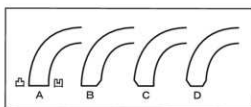
番号	全長	玉縁長	筒部		玉縁部		厚	側面調整	端面調整
			狭端幅	広端幅	基部幅	狭端幅			
52	362	45	158	凸:16.8 凹:13.3	凸:12.3 凹:11.6	凸:7.1 凹:6.7	24	筒部:B 玉縁:B	筒部:E 玉縁:B
53	(26.5)	65	162	—	凸:13.3 凹:11.7	凸:8.3 凹:4.8	15-24	筒部:B 玉縁:C	筒部:— 玉縁:A
54	(28.1)	5.2	15.2	—	凸:12.5 凹:12.2	凸:11.6 凹:9.1	1.4-3.0	筒部:B 玉縁:A,B	筒部:— 玉縁:B
55	(19.5)	6.0	14.5	—	凸:11.0 凹:9.9	凸:8.7 凹:6.8	0.8-3.2	筒部:B 玉縁:B	筒部:— 玉縁:B
56	(19.5)	4.0	13.9	—	凸:11.1 凹:11.0	凸:10.1 凹:8.4	0.9-3.0	筒部:D 玉縁:D	筒部:— 玉縁:D

番号	色調	胎土	焼成	調整	備考
52	明褐 (10YR7/6)	粗 (5mm以下の砂粒・白色粒・灰色粒・褐色粒多く含む)	やや不良	凸:横ナデ 凹:布目5×4	高麗寺3号窟跡産か
53	灰 (5Y5/1)	粗 (9mm以下の砂粒・白色粒・黒色粒・褐色粒多く含む)	良好	凸:横ナデ 凹:布目5×4	
54	暗灰 (N3/0) 断:灰白 (N8/0)	精良	良好	凸:縦板ナデ 凹:布目3×4	
55	灰 (N4/0) 断:灰白 (N8/0)	やや粗 (5mm以下の砂粒・灰色粒・白色粒多く含む)	やや不良	凸:摩減により不明 凹:摩減(布目か)	
56	灰 (10Y5/1)	やや精良 (4mm以下の砂粒・白色粒・黒色粒多く含む)	良好	凸:縦ナデ 凹:布目8×6	

1. 計測値はcm。(残存長)
2. 布目(横糸×縦糸/1cm)、縄叩き(本/3cm)、格子(長辺×短辺)
3. 側面調整は左右で異なる場合、(左,右)と表記した。
4. 側面調整については、上原1984、中島編2011を参考にした。



丸瓦 部分名称



丸瓦側面調整



丸瓦端面調整

55は、玉縁の形状は直立的に立ち上がり、凹面の玉縁基部から端部にかけての屈曲は強い。凸面は筒部及び玉縁部とも横ナデが施される。凹面は摩減しているが、玉縁端部から基部にかけて絞り目を残す。筒部側縁に面取りが施され、玉縁部の側縁には筒部の端面方向からの面取りが施され、玉縁部端縁にも面取りが施される。焼成はやや不良で外面はいぶし焼き風の黒灰色、内面は灰白色を呈する。胎土はやや粗雑で砂粒を含む。

56は、玉縁の形状は直立的に立ち上がり、凹面の玉縁基部から端部にかけての屈曲は強い。凸面は筒部に縦板ナデの後、端面付近にのみ横ナデが施される。玉縁部には横ナデ、凹凸両端面付近に面取りが施される。凹面は細かい布目が残し、筒部から玉縁部にかけての側縁に面取りが施

される。焼成は良好で青灰色を呈する。胎土は精良である。

(瀬部和宏)

②平瓦(第27～30図57～64)

57は、凸面には細かい縦縄タタキが施されるが、その圧痕は部分的につぶれる。タタキ調整の際にハナレ砂を使用するものもみられる。広端面側には指頭圧痕を残す。凹面には布目と糸切痕が残り、幅3～3.5cm程の枠板圧痕を残す。周縁の面取りは凹面のみに施す。側面には布目が一部残り、立ち上がりをもつ成形台による一枚作りが考えられる。焼成はやや不良で黄褐色を呈し、胎土は粗雑で白色粒や褐色粒を含む。胎土と色調はKYH302に類似し、高麗寺3号窯跡の製品であると考えられる。詳細な数量は不明だが、出土した平瓦の中で同様の特徴をもつものが多くを占める。

58は、凸面には細かい縦縄タタキが施されるが、部分的につぶれる。凹面には布目が残り、幅2.5～3cm程の枠板圧痕を残している。周縁の面取りは凹面のみに施す。側面には布目が一部残るため、立ち上がりをもつ成形台による一枚作りが考えられる。焼成は良好で灰白色を呈し、胎土はやや精良で褐色粒を含む。

59は、凸面には条目の広い縦縄タタキが施され、端縁に糸切痕がみられる。凹面には粗く乱れた布目が残り、側面に面取りを施す。周縁にはケズリを施す。焼成は良好で、暗褐色を呈する。胎土はやや粗雑で白色粒を含む。

60・61は、凹面に文字刻印をもつ、恭仁宮跡でB型式平瓦と分類されている平瓦である(上原1984)。凸面には縦縄タタキが施されるが、全体的につぶれ、狭端側1/3を横ケズリで擦り消す。凹面は全面横ケズリ及びナデで布目痕を擦り消している。焼成は良好で灰黒色及び青灰色を呈し、胎土は精良である。なおB型式には凹面の布目を全てナデ消すI(60)と、布目を半分程度残し、幅1.9～2.1cmの枠板痕を残すII(61)があり、本調査では両方出土している。

62は、凸面には太い縦縄タタキが施されるが、全体的につぶれる。端縁に一部突出する部分のみみられる。凹面には布目と幅1.5～2.5cm程の枠板痕がみられる。焼成は良好で青灰色を呈し、胎土はやや粗雑である。

63は、凸面には浅い斜格子タタキが施される。凹面には布目が残る。焼成はやや良好で灰白色を呈する。胎土はやや精良で、タタキ調整の際にハナレ砂を使用する。

64は、凸面には深い斜格子タタキが施される。凹面には糸切痕と布目が残る。焼成はやや不良で黄褐色を呈するが、硬質で青灰色を呈するものもある。胎土はやや精良である。(瀬部和宏)

(4)文字瓦・記号瓦(第31図65～85)

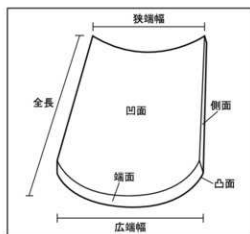
文字瓦・記号瓦は計28点出土した(付表8)。そのうち、恭仁宮式文字瓦は23点を数え、65～78は既存型式(計12型式13種)である(上原1984)。79は「刑」の旁(りっとう)の一部と思われるが、最終画が内側にはねる点で既存型式とは異なる。なお、井手寺跡の既往調査では、恭仁宮式文字瓦はKJ01B(66)のみ確認されていた。80は恭仁宮跡でも未確認の型式だが、胎土や厚さ、印形から恭仁宮式文字瓦と考えられる。一字目の上半分のみ残存するため、記載文字は不明である。

81はヘラ書きによって「嶋万呂」と記載される。「万呂」は1文字分の範囲に記される。凸面

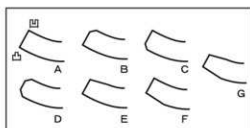
付表7 平瓦一覧表

番号	全長	広端幅	狭端幅	厚	側面調整	端面調整	色調	胎土	焼成	調整	備考
57	37.5	(19.1)	(9.8)	2.5	E	E	黒褐 (2.5Y3/1) 断: 灰白 (10YR8/2)	粗 (径5mm以下の砂粒・白色粒・褐色粒を多く含む)	やや不良	凸: 縦縄11 凹: 布目3×4	高麗寺3号窯跡産か
58	41.9	(19.5)	23.9	2.8	E	E	青灰 (5B5/1)	精良	良好	凸: 縦縄14 凹: 布目4×4	
59	(30.1)	—	(15.3)	2.0	G	E	黒褐 (7.5YR3/1)	やや粗 (径5mm以下の砂粒・白色粒・褐色粒を多く含む)	良好	凸: 縦縄10 凹: 布目7×6	
60	(20.9)	—	(9.7)	3.0	B	E	灰 (N4/0) 断: 灰 (N7/0)	精良	良好	凸: 縦縄10 凹: 全面横ナデ	恭仁宮B型式I
61	(19.5)	—	—	2.3	E	—	灰白 (N7/0)	精良	良好	凸: 縦縄10 凹: 布目7×6	恭仁宮B型式II
62	(9.5)	—	—	2.7	—	A	灰 (N6/0)	精良	良好	凸: 縦縄5 凹: 布目8×8	
63	(20.6)	(17.9)	—	2.3	A	A	灰白 (7.5Y7/1)	精良 (径1.5mm以下の砂粒・白色粒・黒色粒を少量含む)	良好	凸: 斜格子0.4×0.3 凹: 布目8×7	
64	(19.8)	(14.8)	—	2.1	A	A	黄灰 (2.5Y4/1) 断: 灰白 (2.5Y8/1)	精良	やや不良	凸: 斜格子0.5×0.3 凹: 布目5×6	

1. 計測値はcm、(残存長)
2. 布目(横糸×縦糸/1cm)、縄叩き(本/3cm)、格子(長辺×短辺)
3. 側面調整は左右で異なる場合、(左,右)と表記した。
4. 端面調整が上下で異なる場合、(上,下)と表記した。
5. 側面調整については、上原1984・中島2011を参考にした。



平瓦 部分名称

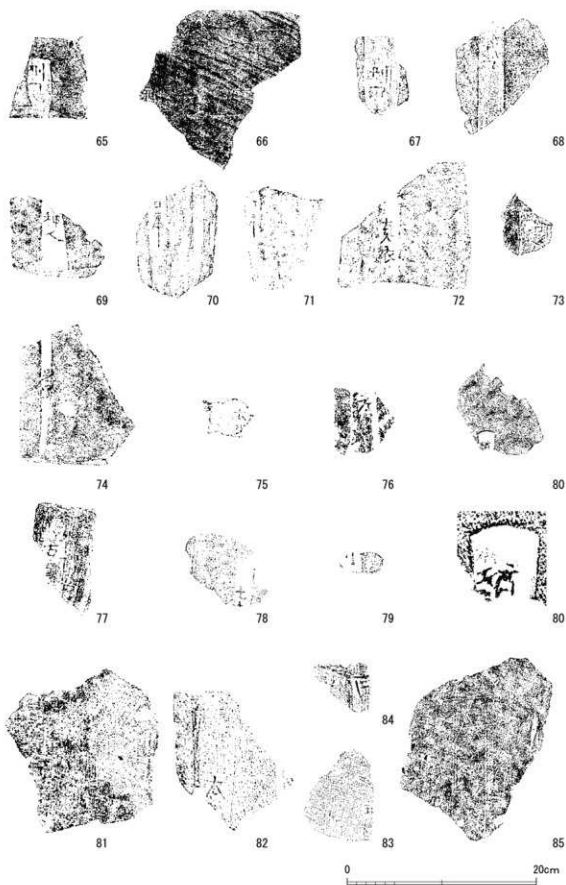


平瓦側面調整



平瓦端面調整

に横方向の縄目圧痕が確認できることから、KYH106②(6691A)の平瓦部と考えられる。82は押印によって「木□〔工カ〕」と記載される。「木工」は木工寮に関わるとされる(木村1930)。「延喜式」木工寮に登場する瓦屋に比定された小野瓦窯跡、栗栖野瓦窯跡では「木工」銘平瓦が複数種類出土するが、本例と刻印が一致するものは確認できない。83は押印によって「王」または「理」と記載される。「理」は修理司に関わるとされる(奈良国立文化財研究所1976)。84は押印による記載と判断できるが、記載文字は不明である。85はヘラ書きによる記号が確認できる。X字状の線と上下二本の線を重ね合わせた記号である。(吉岡孝祐)



第31圖 出土遺物実測図18(文字瓦・記号瓦)

付表8 文字瓦一覧表

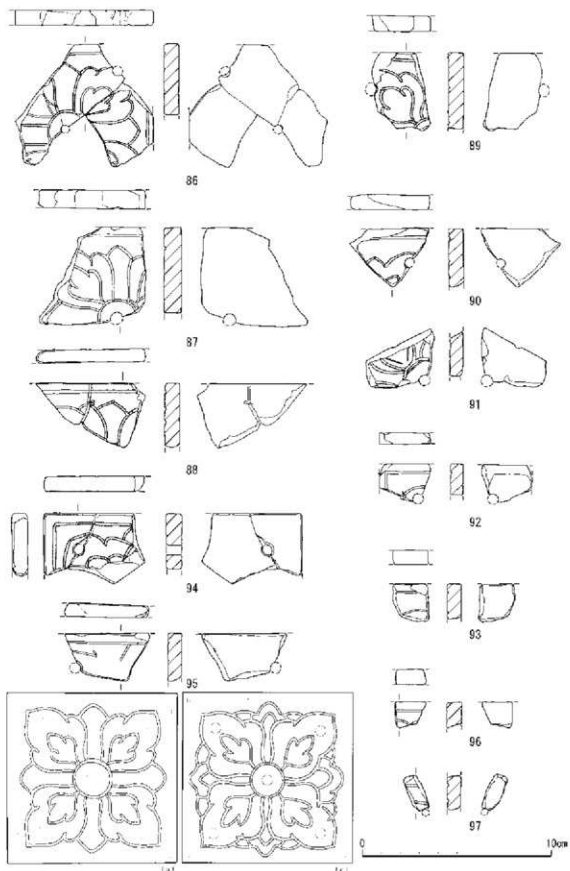
番号	既存型式	記載文字	点数	記載法	記載用具	記載対象・方向	備考
65	KJ01A	刑部	1	押印	印長 6.3cm 以上 印幅 2.5cm	平瓦・凹面・縦位	
66	KJ01B	刑部	1	押印	印長 1.7cm 以上 印幅 1.6cm 以上	平瓦・凹面・縦位	
67	KJ02	刑部大	2	押印	印長 8.4cm 以上 印幅 3.6cm	平瓦・凹面・縦位	
68	KJ03Ba	[宗]我部	1	押印	印長 11.2cm 以上 印幅 2.8cm	平瓦・凹面・縦位	
69	KJ09Aa	神人	1	押印	印長 7.4cm 以上 印幅 2.4cm	平瓦・凹面・縦位	
70	KJ11Aa	日奉	3	押印	印長 10.7cm 以上 印幅 1.9cm	丸瓦・凹面・縦位	
71	KJ11Ab	日奉	1	押印	印長 8.2cm 以上 印幅 1.6cm 以上	平瓦・凹面・縦位	
72	KJ12B	真依	4	押印	印長 11.2cm 以上 印幅 2.5cm	平瓦・凹面・縦位	
73	KJ13A	足[得]	1	押印	印長 4.7cm 以上 印幅 3.2cm 以上	平瓦・凹面・縦位	
74	KJ15A	足男	1	押印	印長 12.8cm 以上 印幅 0.9cm	平瓦・凹面・縦位	
75	KJ16	太万[呂]	1	押印	印長 4.0cm 以上 印幅 1.6cm 以上	丸瓦・凹面・縦位	
76	KJ18	老	2	押印	印長 6.4cm 以上 印幅 2.2cm	丸瓦・凹面・縦位	
77	KJ19A	古	1	押印	印長 8.5cm 以上 印幅 2.5cm 以上	平瓦・凹面・縦位	
78	KJ20	土	1	押印	印長 4.9cm 以上 印幅 1.8cm	平瓦・凹面・縦位	
79	新形式か	「刑」のつくり	1	押印	印長 2.5cm 以上 印幅 2.2cm	平瓦・凹面・縦位	
80	新形式	不明	1	押印	印長 1.9cm 以上 印幅 1.7cm	平瓦・凹面・縦位	須か。けもの偏におおいか
81		嶋万呂	1	ヘラ書き		軒平瓦体部・凹面・縦位	凸面横機叩き
82		木□[工]	1	押印	印長 9.6cm 以上 印幅 3.4cm	丸瓦・凹面・縦位	木工寮との関連か
83		王または理	1	押印	印長 1.5cm 印幅 1.4cm 以上	平瓦・凹面・縦位	修理司との関連か
84		不明	1	押印	印長 5.4cm 以上 印幅 2.4cm 以上	平瓦・凹面・縦位	
85		記号	1	ヘラ描き		丸瓦・凸面	

### (5) 道具瓦

#### ① 施釉垂木先瓦(第32・33図86～100)

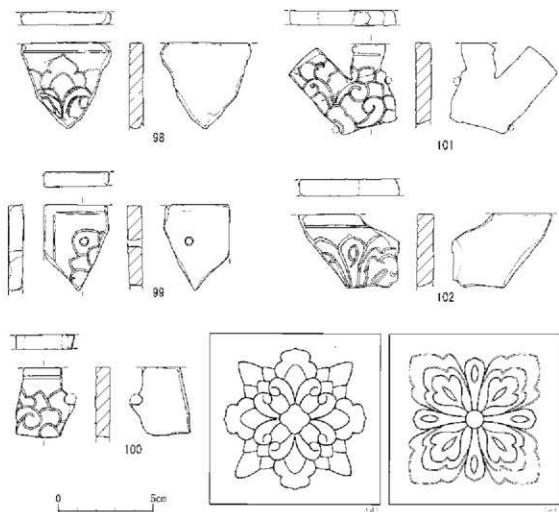
破片の状態では17点出土<sup>(B10)</sup>。すべて一辺9cm程度の正方形を呈すると想定され、中央及び四隅の計5か所に直径5～6mmの釘穴を焼成前に穿孔する。文様は正方形の区画線のなかに四弁花文を線刻で表現する。釉薬は緑釉と白釉(透明釉)を用いた二彩であり、線刻後に白釉、その上に緑釉が塗られるが、線刻文様に沿った塗り分けはされない。ただ、表面には緑釉が基本的に確認される一方で、側面や裏面では白釉のみの個体が多い。

井手寺跡の既往調査では(a)～(c)の3種類の文様が復元され、本調査では、(a)を6点(88～93)、(c)に近いものを1点(94)確認している。加えて、新たに2種類の文様(d・e)を復元した。(d)(98～101)は対角線上に蕨手を配し、その隙間から花文が覗く。さらに対角線上に蕾のような表



第32図 出土遺物実測図19(施軸垂木先瓦1)





第33図 出土遺物実測図20(施軸垂木先瓦2)

現がみられる。(d)は他の型式とは文様構成が全く異なるが、施軸の状況や胎土、寸法において既存型式との差異を見出せない。(e)(102)は(a)~(c)と同様に対角線上に大きな花卉を4弁配置し、その隙間からさらに花卉が覗く。中心部分が不明ではあるが、既存型式との類似性から円形の表現と推察される。

文様線刻に際しては、対称性を維持するために一単位の文様を左右で書き分ける。(d)・(e)には線刻の幅が0.5~1.0mm程度とやや狭いものがあるが、(a)・(c)には線刻が幅1.0mmと太いものが目立つ。今回の出土資料に限って言えば、(a)・(c)は対角線上の花文を先に描き、次いで隙間の花文を描く。(e)も同様ではあるが、対角線上の花文の外形線が一部描かれずに、隙間の花卉と一体で描かれる。(d)に関しては、対角線上の蕨手文、隙間の花文、対角線上の蕾状文様の順に描かれる。なお、花文を構成しない線刻が確認される個体(91・98・101)もあり、描き損じ、もしくは下描きの可能性も考えられる。(吉岡孝敏)

## ②鬼瓦(第34図103)

合計30点の鬼瓦片が出土した。全形が復元できるものは存在しないが、各破片を比較すると文様配置や范傷位置の一致から文様を彫りこんだ木製范を使用していることがわかり、いずれも同種のものである。重複部分の数量から、今回の調査では最低5個体分の鬼瓦片が出土した。なお、井手寺跡周辺で鬼瓦が1点採集されている(京都市埋蔵文化財研究所編1980)が、平城宮Ⅱ式A1(毛利光1980)であり、本調査出土品とは異なる。

各破片の厚さに大きな差はなく、珠文帯の平坦面で厚さ3~4cmにおさまる。復元される鬼瓦の法量について、范に彫り込まれた突帯の内側範囲は、縦幅約38cm・横幅約34cmをはかる。文様のない脚部は切り詰める場合もあり、脚部を含めた縦幅は最大44cm程度と推測される。

文様は、外区を突帯と珠文で囲み、内区に鬼面文を配するものである。内区の鬼面文が大きく突出するのが特徴的で、鼻の突出が最も大きい。鬼面の周囲には2本1対の毛が表現されているが、毛の表現が子葉を有する複弁蓮華文状を呈し、明らかに蓮華文様を意識している。また、額には全形が不明ではあるものの唐草状の文様を加飾されている。

側面に范端の圧痕が観察できることから、范により法量が規定されていたと考えられる。先に外区の突帯や内区の鬼面文に粘土を詰め、それを覆うように粘土を重ねたうえで縄タキを施す。縄タキの圧痕の密度は14本/3cm程度で、いずれの破片も共通している。側面はケズリ調整で整形され、裏面にも縄タキを消すようにケズリ調整するものもある。裏面には削り込んで把手を作り出している。把手の根元には沈線が認められ、あらかじめ把手の幅分の間隔で2本の沈線をいれて「あたり」をつけたようである。鬼瓦下端の挟りは、歯に沿って平坦面があること、牙の部分に挟りの角が確認されることから台形状に復元される。

内区文様に表現された蓮華文・唐草文は、塔の創建時に生産されたと考えられるKYM251・KYH302の文様にそれぞれ酷似しており、軒瓦と鬼瓦の間に意匠的なセット関係が意識されていたと考えられる。

この鬼瓦の特徴は、内区の鬼面文が突出する点、外区に突帯と珠文帯を併せ持つ点、挟りが台形状を呈する点などが挙げられ、平安宮V・Ⅶ式などに見受けられる(鈴木2022)。長岡宮と平安宮の鬼瓦は南都七大寺式鬼瓦の影響下にあるとされるが、本資料もその流れを汲むとみてよい。一方で、固定装置に把手を設ける例は、平安宮の鬼瓦には見当たらず、南都七大寺式鬼瓦特有の属性とされる(毛利光1980、岩戸2001)。

今回の調査で出土した井手寺塔跡の鬼瓦は、平安時代前期の時期的様相を備えつつも平安宮の鬼瓦には確認されない固定装置としての把手を有するなど、南都七大寺式鬼瓦の系譜を色濃く受け継ぎつつ、軒瓦との意匠的統一を意識した点で独自の要素も有する鬼瓦として評価できる。

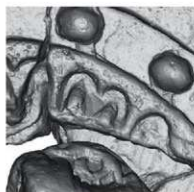
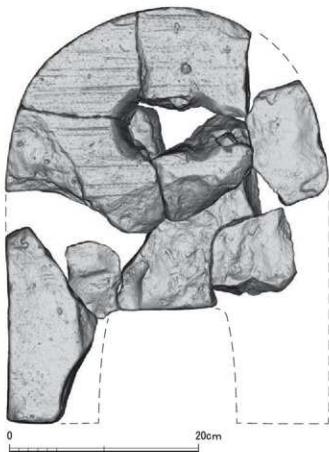
(溝口泰久)

## ③隅木蓋瓦(第35図104・105)

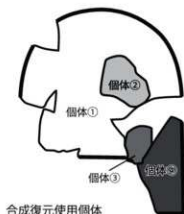
合計23個体出土した。そのうち、ほぼ完形に復元できる資料が2個体ある。形態と製作技法の違いから、2種類の隅木蓋瓦(104・105)を確認した。



103

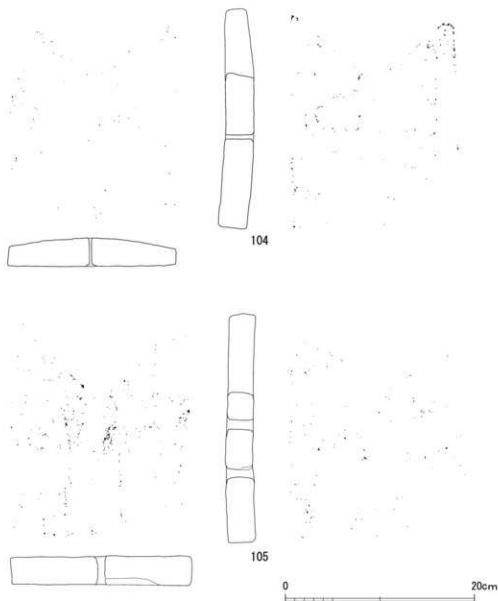


細部拡大図 (S=1/2)



合成復元使用個体

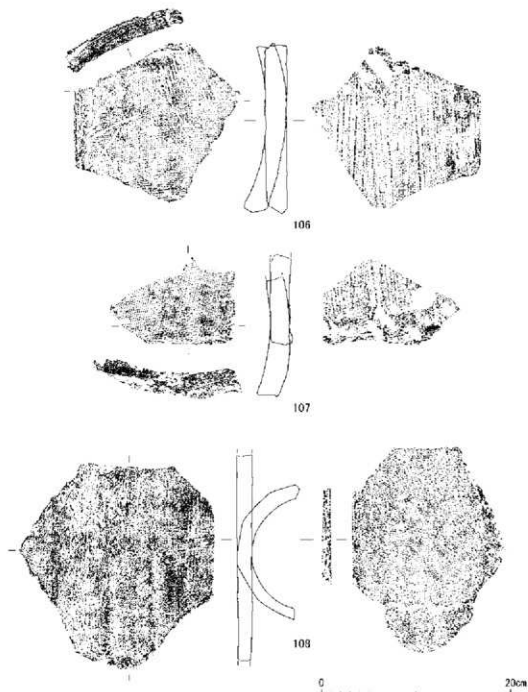
第34図 出土遺物実測図21(鬼瓦)



第35図 出土遺物実測図22(隅木蓋瓦)

104は全長45.5cm・幅34.7cmであり、後方には燕尾状の刻りが施される。上面には甲盛りがあり、側縁部の厚さは4cm程度だが、中央部では6cmとなる。中央部前方側には直径1.1cmの円形釘穴が1か所あけられており、上面から下面に向けて穿孔したと考えられる。上下面ともにケズリ調整によって仕上げる。板状に切り出した粘土を二枚重ねることで厚みを出したと想定される。胎土は精良で、粒径1mm程度の長石と石英をごく少量含む。焼成は良好で、表面は黒灰色、内部は灰色を呈する。同様の資料は他に破片で9個体出土し、最小個体数は3個体である。

105は全長49.2cm、幅38.4cm、厚さ5.9cmであり、後方には燕尾状の刻りが施される。上下面ともに平坦で、上下面全体に縄タタキ(14本/3cm)の痕跡が確認できる。中央部には2か所の釘穴があけられ、前方部側は直径1.7cm程度、刻り側では直径1.9cm程度の釘穴があけられる。なお、釘穴を観察できる資料は他に2個体あるが、いずれも2か所釘穴がある。胎土は精良で、粒径1



第36図 出土遺物実測図23(隔切瓦・用途不明瓦)

mm程度の長石と石英を多く含む。特に、粒径2mm程度の褐色粒子を含む点は104の胎土と異なる。焼成は良好で、灰白色を呈す。縄タキの痕跡及び胎土と焼成は鬼瓦と酷似しており、一体的な生産が想定される。破片で12個体出土し、最小個体数は3個体である。

本資料は稲垣晋也による分類の「平蓋形第二类A形式」に該当すると考えられるが、論考では該当資料なしとされ、現時点においても、類例を見出すことはできない(稲垣1983)。(吉岡孝紘)

④隔切瓦(第36図106・107)

平瓦の隅を三角形に切り落とすもので、2点を確認した。106は端面に対して約30度の角度で

焼成前に凹面側から2回切り落とす。凸面には縦縞タタキと端縁に指頭斑痕、凹面には布目が残る。107は端面に対して約45度の角度で焼成前に凹面側から切り落とす。凸面には粗いナデが施され、凹面には布目が残る。

#### ⑤用途不明瓦(第36図108)

108は凸面に5つの面をもつ丸瓦である。面は縦ケズリにより作り出す。凹面には布目が残る。胎土はK Y M254、K Y H110と類似している。(瀬部和宏)

#### (6)埴(第37図109~112)

法量や胎土が異なる2種類の埴が出土した。

109~111は最大残存長29.5cm、厚さ4.2~4.5cm、幅16.3~16.9cmを測る。平・断面ともに長方形を呈する。法量が近似するため型作りと考えられる。111は隅部を丸く仕上げる。胎土は密で粒径1mm未満の微細な長石類、石英、金雲母を中量、粒径1~5mmの長石類を微量に含む。色調は表面が黒灰色、内面は明黄褐色から灰白色を呈する。13点出土した。

112は残存長21cm、残存幅9.5cm、厚さ7cmを測り、他の個体よりも厚みがあり、胎土は非常に精良で砂粒を全く含まない。色調は灰白色を呈する。1点のみ出土した。(溝口泰久)

### 2)土器

#### (1)奈良・平安時代

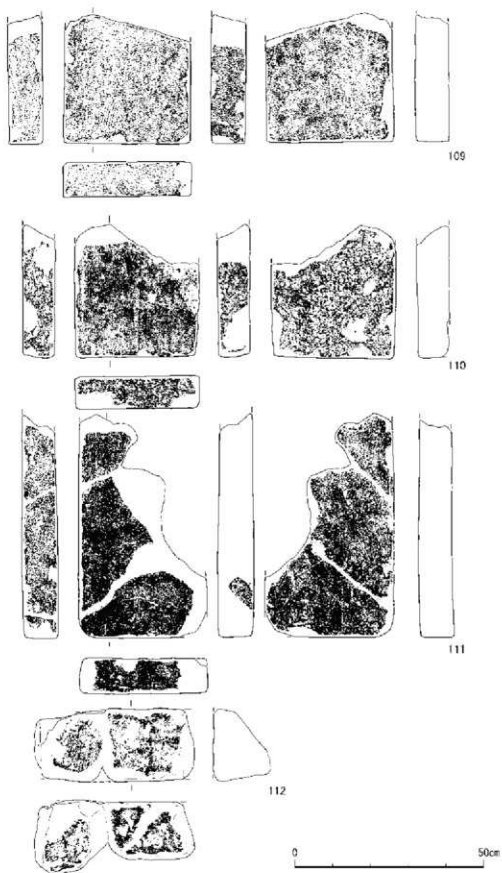
土師器(第38図113~135) 113~129は皿である。口縁端部はいわゆる「て」字状を呈する。117~122には灯火痕がみられる。皿は平尾編年の3期~4期で10世紀中頃から11世紀中頃に位置づけられる(平尾2019)。130は台付の皿である。高台は外側へ強く張り出す。131・132は高杯の脚部である。131・132ともに心棒作りで、131は12面、132は14面の面取りがみられる。また、131は面取り後にヘラミガキを施す。133・134は甕である。ともに口縁端部を平滑にし、134は内側へつまみ出す。135は羽釜である。口縁端部は、一段ナデを施し、丸くおさめる。

須恵器(第38図136~148) 136~138は小形の壺である。136は口縁端部を上へつまみ上げ、外側に面をもつ。内面には円盤閉塞痕はみられない。137・138は底部片でいずれも糸切り痕がみられる。139~144は壺である。142~144は高台を貼りつける。140・142・143は底部糸切りである。145は浄瓶の底部である。高台は「ハ」字にひらき、底部糸切りである。146~148は甕である。須恵器は壺類が主体である。底部は糸切りが大半で、9世紀のものと考えられる(小森1994)。

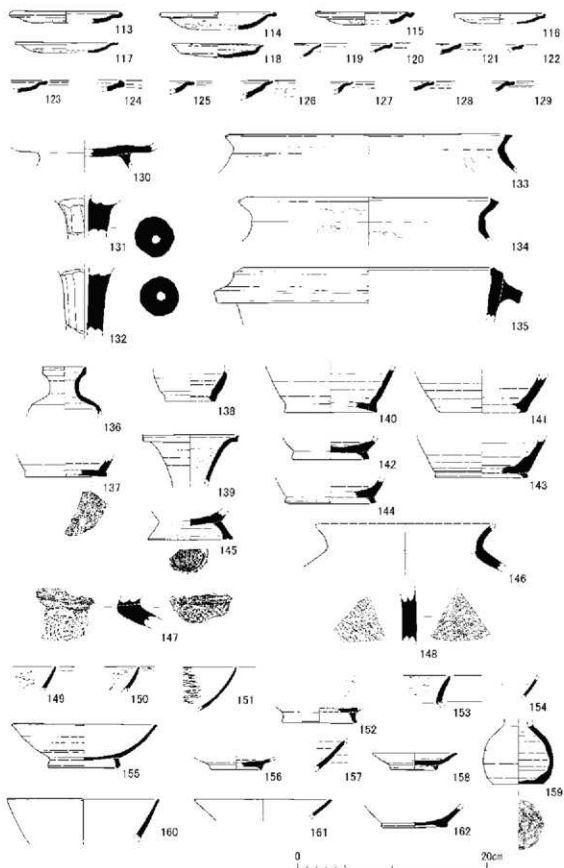
黒色土器(第38図149~153) いずれも内面のみ黒色処理を施しており、内面には密にヘラミガキを施す。149~152は碗である。152には高台が付く。153は甕である。黒色土器は、詳細な時期については不明だが、9世紀から10世紀のものである(小森1994)。

緑釉陶器・灰釉陶器(第38図154~159) 154は緑釉陶器である。内面に一条の沈線を施す。155~157は灰釉陶器の碗である。155は三日月高台である。155はハケによって施釉されるのに対し、157は浸けかけである。158は灰釉陶器の段皿である。159は壺で底部糸切りである。灰釉陶器は、碗が9世紀後半から10世紀前半、段皿が11世紀中頃から後半に位置づけられる(尾野1999)。

輸入陶磁器(第38図160~162) 160~162は越州窯系青磁である。160・162は碗で、161は皿で

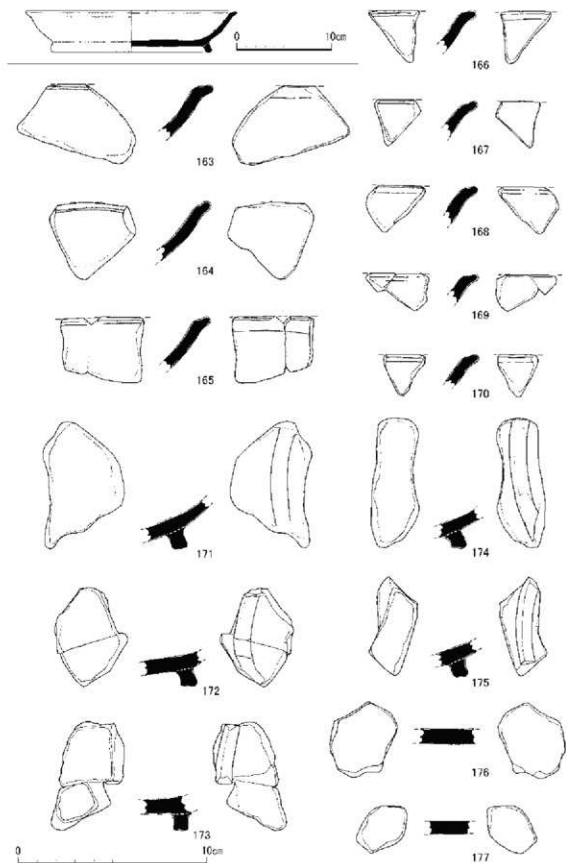


第37図 出土遺物実測図(埴)

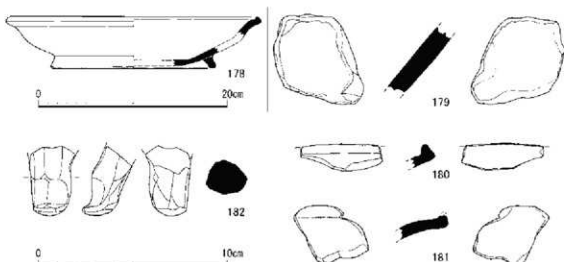


第38図 出土遺物実測図25(土器1)

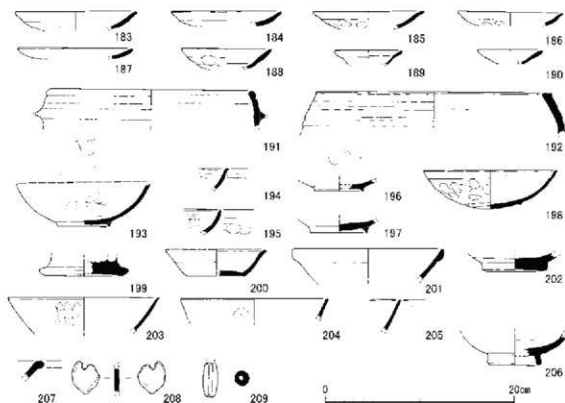




第39図 出土遺物実測図26(土器2)



第40図 出土遺物実測図27(土器3)



第41図 出土遺物実測図28(土器4)

ある。162は蛇の目高台で、一部にケズリ残された軸がみられる。青磁は越州窯系青磁のⅠ類に分類され8世紀後半から10世紀後半に位置づけられる(山本2000)。

奈良三彩(第39・40図163～182) 器種は盤(163～177・178・179)・壺(180・181)・火舎(182)がある。軸が残っているものは、すべて緑軸と白軸の2種類で二彩である。盤は2種類あり、163～177・178は土師器皿B(163～178)と、179は須恵器盤A(179)とそれぞれ同様の形態を呈す<sup>(81)</sup>る。163～177は同一個体である。第39図に復元図を提示した。全面施釉で内面と外面口縁部から

高台の外側に緑と白の2色、高台の接地面から底部外面には白釉のみを施釉する。底部片の一部にはトチンの可能性がある痕跡がみられる(172・176・177)。178は大半が残っていないが一部に釉葉が残る。179は底部からの立ち上がり付近の破片と考えられる。内面と外面に施釉する。180・181は口縁部で端部を上へつまみ上げ丸くおさめ、全面に2色施釉している。182は火舎の脚部で獸脚を呈し、爪などの表現はみられない。釉はほとんど残っていない。奈良三彩は二彩のみで9世紀前半までの製品と考えられる(楢崎1998)。

## (2) 中世(第41回183～209)

183～190は土師器皿である。183と184は灯火痕がみられる。土師器皿は平尾編年の9期～10期で、15世紀後半から16世紀後半に位置づけられる(平尾2019)。193～198は瓦器椀である。すべて大和型で、13世紀前半に位置づけられる(佐藤2022)。199は瀬戸の小形仏花瓶である。200～202は白磁である。200は皿で口縁端部内面の釉を削り落とす。201・202は椀である。203～206は青磁椀である。203～205は外面に鎊連弁を施す。白磁は皿Ⅹ類と椀Ⅳ類、青磁が同安窩系Ⅲ類であり、12世紀前半から14世紀中頃である(山本2000)。207はいわゆる華南三彩の盤である。208は底部を穿孔した土師器皿である。209は土錘である。(田中秀弥)

## 3) 金属製品

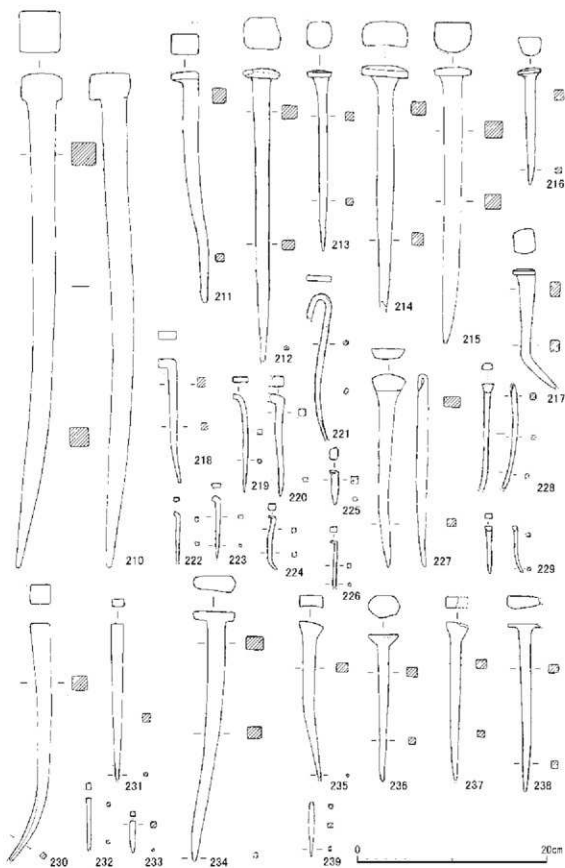
金属製品は、鉄製品と銅製品である青銅の製品と鍍金を施した金銅製品が出土した。いずれも融解しておらず、残存状態は良好である。金属製品の大多数は基壇周辺の瓦を多量に含む中近世の耕作土から出土したが、一部は整地層上面や石敷上などから出土し、廃絶時の状況を留めていた。

### (1) 鉄製品

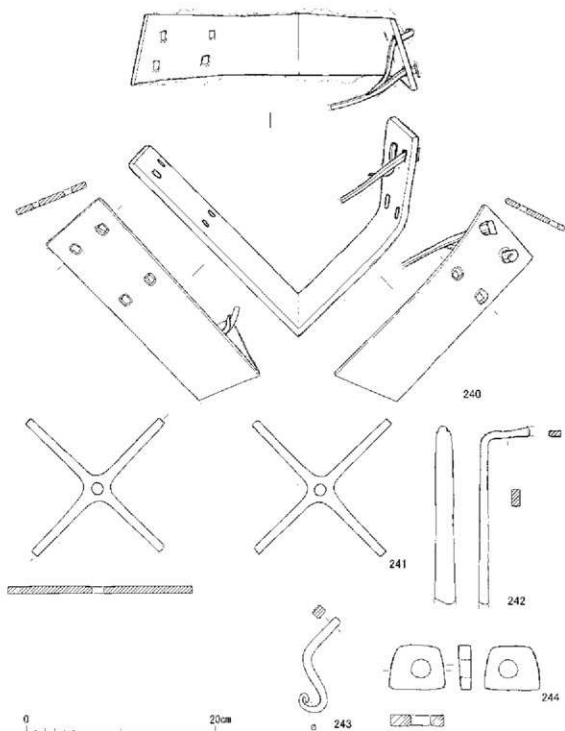
鉄釘(第42回210～239) 210は長さ52.2cm、幅0.5～4.3cm、厚さ0.3～4.3cmを測る大形の方頭釘である。基壇建物S X01北西側の整地層上から出土した。柏原市鳥坂寺講堂跡の出土例から、扉板の付属具と推定される(桑野編2011)。

鉄釘は総数735点出土した。すべて断面隅丸方形の角釘である。錆化が著しく、肉眼観察では頭部の形態が不明な個体もあるため、出土点数は暫定的な数量である。頭部の形状が判明するのは524点であり、方頭釘(210～217)、折釘(218～223)、叩折釘(224～226)、巻頭釘(227～229)、角頭釘(230～233)、T字形釘(234～238)、合釘(239)などがある。頭部の形態が同じ鉄釘であっても法量が異なり、大形から小形の鉄釘が存在する。頭部の形態、法量ともに、多種多様な形態の鉄釘が出土した。塔に用いられた建築資材である。

茅負留先金具(第43回240) 240は屋根の隅部の茅負を保護する茅負留先金具である。西辺階段の西側の瓦と礫を多量に含む南壁15層で出土した。中央で折り曲げて、平面は直角に近い「へ」字形を呈する。全体に傾斜しており、斜めに立ち上がる。片側の端部付近は内面側に折れ曲がり、変形している。長さ25.8cm、幅30.3cm、厚さ0.6cmを測る。金具の両端部付近に各4か所、合計8か所に釘で固定するための隅丸方形の穿孔を施す。金具を留めていた鉄釘が2個体残存している。これらは方頭釘と折釘で、胴部は折れ曲がり、変形している。桜井市山田寺跡(奈良文化財



第42図 出土遺物実測図29(金属製品1)



第43図 出土遺物実測図30(金属製品2)

研究所編2002)と四天王寺で同様の製品が出土している。

**風鐸舌(第43図241)** 241は北辺階段から北西側の整地層上面から出土した。平面はX字形を呈し、長さ19.6cm、幅19.3cmであり、一辺はほぼ同じ長さを測る。厚さ0.8~2.8cmを測り、断面は隅丸方形を呈する。交差する中央部分は部材の幅を広げ、直径0.8cmの孔を設ける。風鐸内部で舌と風招を吊るす金具を通す穴である。铸造品である。

**鏡(第43図242)** 242は渡りと爪を欠損する。断面は長辺1.2~1.8cm、短辺0.6~0.9cmの扁平な



第44図 銭貨(富壽神  
寶) X線CT画像

隅丸長方形を呈する。

不明鉄製品(第43図243・244) 243は欠損部はなく、長さ10.0cm、幅4.4cm、厚さ0.2~1.2cmを測る。両端部で厚さが異なる。鉄の本体を湾曲させ、麻手状の形態を造り出す。塔で用いられた荘厳具の可能性はある。

244は平面と断面ともに隅丸の台形状を呈する。長さ4.7cm、幅5.8cm、厚さ1.1~1.3cmを測る。中央部には直径2.0cmの孔を持つ。組み合わせると製品となる部材であると考えられる。

## (2)金銅・青銅製品

銭貨(第44図) 基壇建物S B01の中心部分から銭貨が17枚出土した。銭貨は劣化により脆くなっており、土ごと固めて取り上げた。肉眼観察では判読不能であったため、X線CTによる撮影を行った結果、7枚が弘仁9(818)年初鑄の富壽神寶であることが判明した。また、調査区北西側の瓦溜り、中近世の耕作土層からも富壽神寶が1点出土している。直径は2.3cmを測る。

風招(第45図245・246) 両面に鍍金を施した金銅製品である。左右の2か所に一对の透孔を有する。吊手部分の上端を欠損する。X線CTの画像では、湯周りが悪く、果が散見された。

245は残存高15.6cm、最大幅28.6cm、厚さ0.2~0.5cmを測る。北辺階段から北西側の石敷上で、風鐸の舌(241)の近辺から出土した。左右対称の形態を呈する。吊手部のみ分厚くなる。

246は残存高16.5cm、最大幅27.1cm、厚さ0.25~0.5cmを測る。建物基壇S B01西側で整地層に突き刺さった状態で出土した。245よりも幅が狭く、左右非対称の形態であるのは、鑄造時の湯周りが不良のためと考えられる。両面の端部は、鋳ばりを残したままであり、不整形である。下端部から吊手部に向かって厚さが徐々に増してゆく。吊手部には筋状の細かい痕跡を有する。下端部の中央寄りでは、1か所に径0.2cmの円形の穿孔を施す。

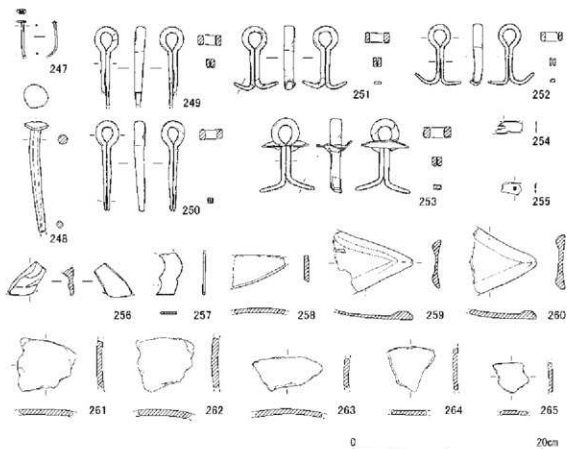
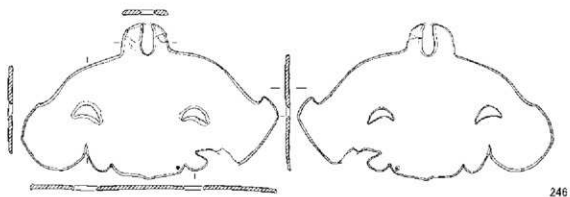
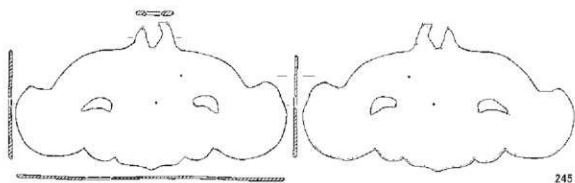
飾り鉾(第45図247) 247の鉾頭は長径1.1cm、短径0.6cmの楕円形を呈し、8か所の陰刻により花卉状の装飾と鍍金を施す。脚部は鉾頭の中心ではなく、片側に寄る。先端部は折れ曲がる。残存長は3.8cmを測る。

釘(第45図248) 表面の残存状態は良好ではない。残存長は11.8cmを測る。頭部は方頭形で一辺2.6cmを測る。胴部の断面は八角形を呈する。先端部は欠損している。

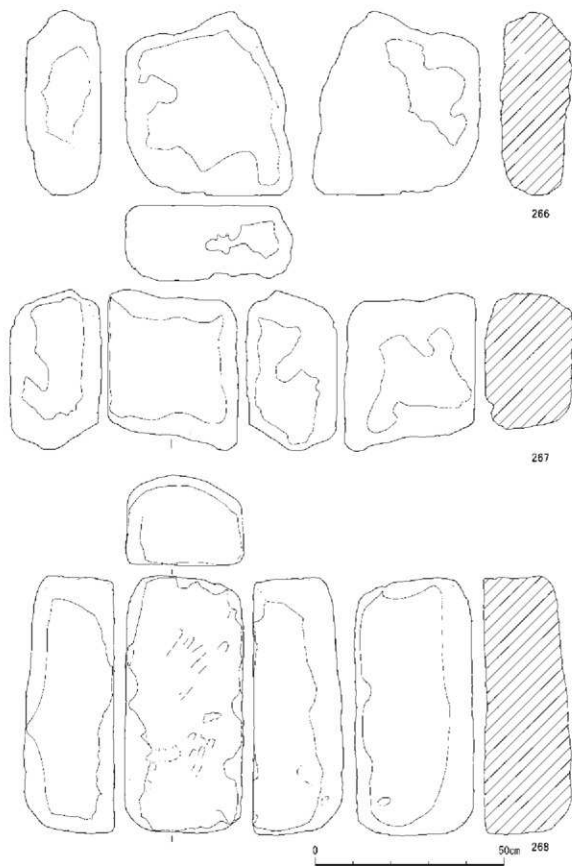
環金具(第45図249~253) 249~253は遺存状態は良好ではないが、わずかに鍍金が残存する。いずれも円環部と脚部を作り出し、片方にはわずかな凹みを有する。円環部の直径は1.2~1.5cmで近似する法量である。249・250は脚部が直線形を呈するが、251~253の脚部は折れ曲がっており、別材への接合方法の違いであると考えられる。253には長径5.0cm、短径3.7cm、厚さ0.1cmの楕円形の座金具を取り付ける。

不明銅製品(第45図254~265) いずれも基壇建物S B01周辺から出土している。塔で用いられた仏具や荘厳具であったと考えられる。

254・255は方形の孔を持つ金銅製品である。254は幅1.2cmを測る。欠損しているが、幅0.3cmの隅丸長方形の穿孔を施す。255は0.25cmの隅丸方形の孔を持つ。いずれも装飾などに用いられ



第45図 出土遺物実測図31(金属製品3)



第46図 出土遺物実測図32(凝灰岩)



た小形の部材であると考えられる。

256の外端面部は弧状を呈し、突帯を作り出す。外面の中央付近は凹弧を描き、立ち上がる。内面にはわずかな段差を作り出す。

257は両端部を欠損する。残存長4.4cm、幅1.7～2.1cm、厚さ0.2cmを測る。内外面ともに平滑に仕上げる。平面形は連弧状を描き、断面は扁平な長方形を呈する。

258は内面から外面に向かって斜めの端部を作り出す。両面に鍍金を施す。全体的にわずかに湾曲する。259・260は表面に鍍金を施す。弧状を描く外形の端部となる。表面外縁両端部には突帯状の高まりを作り出す。全体的に湾曲する。261～265は表面に鍍金を施す。全体的に湾曲している。259～265は厚さ、湾曲の形態などから、本来は同一個体であったと考えられ、風鏝もしくは髻の可能性がある。

#### 4) 石製品

凝灰岩(第46回266～268) 凝灰岩は細片を合わせると総重量34.09kgが出土している。266・267は長辺の端部を欠損する。残存長24.4～29.1cm、残存幅17.9～22.1cm、厚さ9.9～12.1cmを測る。残存する面は平滑に加工する。268は四面が残存しており、平面は長方形を呈する。他面は平滑に加工するが、1面のみ弧状に作り出してあり、上下で面を作り分けている。長さ34.2cm、幅15.7cm、厚さ8.0～12.0cmを測る。(福山博章)

## 7. 総括

### 1) 栢ノ木遺跡出土の奈良時代の軒瓦について

#### (1) 推定寺域内出土軒瓦との比較

今回の調査で出土した奈良時代の軒瓦には、平城京と同範の軒丸・軒平瓦がそれぞれに10種を数える。井手寺推定寺域内において出土した平城京同範軒瓦と比較すると、1点のみ出土した6282D(I TM07)を除くすべての軒瓦が、塔跡出土軒瓦と共通している(附表9)。

特筆されるのは、KYM101～103、KYH103A・B、106の出土が両地点で主体を占める。また、非平城京同範軒瓦は、KYM156、KYH103C・D、107A、108が両地点で一定量出土している。このように、多様な背景で供給された軒瓦の組成が塔跡と推定寺域内で同様の傾向にあることが明らかとなった。加えて、范傷の進行が詳細に追えるKYM102については、范傷の生じていない段階から著しく文様が崩れるほど范が傷んだ段階まで、推定寺域内と塔跡を問わず出土し、供給された瓦の生産に顕著な時期差は見出せない。つまり、今回出土した奈良時代の軒瓦は推定寺域内出土の軒瓦とほぼ同じ経緯で供給されたと考えられる。すなわち、塔跡出土軒瓦は井手寺創建時における瓦の供給事情が検討可能な資料である。

#### (2) 出土軒瓦の生産・供給時期

##### ① 平城京同範軒瓦

出土量から判断すると、井手寺創建期に主体的に供給されたのはKYM101～103、KYH103A・B、KYH106である。特に、KYM101・102、KYH103A・106は恭仁宮跡に同範品があり、

出土軒瓦との比較から年代的位置づけを求めることができる。

まず、井手寺跡で出土するK Y M101は、線鋸歯文から凸鋸歯文に改変されたK Y M101 b・c (6320A b・c)のみ出土するため、恭仁宮跡のKM01 (6320A a)が生産終了したのちに、井手寺に向けてK Y M101 b・cが生産されたことがわかる。恭仁宮に向けた瓦生産の終了は、『続日本紀』天平15 (743) 年12月の恭仁宮造営停止記事から743年に上限がおかれ、K Y M101 bの生産開始年の定点となる。

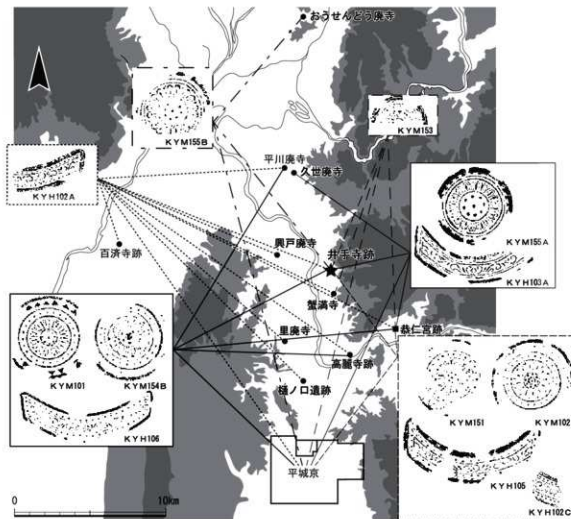
また、恭仁宮跡内裏東地区中心建物の一つであるS B 5501の柱抜取穴より、范傷が進んでおらず初期に生産されたとみてよいK Y M102と同范のKM16 (6130A) が1点出土している (中谷1981)。粘土剥離痕や指紋の転写からKM16は粘土積み上げ技法横置き型一本づくりとみられ、恭仁宮に供給された同技法によるKM01と同じ恭仁宮造瓦工場の所産である可能性が高い。K Y M102の作范年代は743年以前とみることができる。一方で、K Y M102は范傷が著しいものまで一貫して接合式であり、恭仁宮造瓦工場から異なる工場に范が移動したのちに生産されたことになる。

K Y M101～103は、内区文様はそれぞれ異なるものの瓦当の直径や内区径、外縁の形態といった范の規格に関わる部分において共通性が強く、范製作段階からの関係性が推測され、作范年代に大きな差はないと考えられる。基本的にこの3種の井手寺跡出土軒丸瓦は平城京内における出土量が限られ、平城京に向けて生産された軒瓦の余剰品が供給されたと考えるよりも、井手寺付属の造瓦工場より瓦が供給されたと考えるのが妥当である。

K Y H106と同范のKH01 (6691A) はKM01と並んで恭仁宮の主要軒瓦であり、恭仁宮造営停止とともに恭仁宮に向けた生産は終了していると考えられる。K Y H106は製作技法による5分類のうち、最も出土量の多い①は范傷の進行状況は恭仁宮跡出土品と差異がないが、胎土や技法が異なること、恭仁宮跡より范傷が進行している②③が出土することを考慮すると、井手寺に主体的に供給されたK Y H106の生産・供給時期は恭仁宮造営が停止された743年以後が想定される。井手寺近傍に位置する岡田池瓦窯跡ではK Y H106が採集されており、恭仁宮造営停止後に范が移動し、井手寺に向けて生産を開始したのだろう。

K Y H103Aと同范のKH06E (6663C) は、恭仁宮跡ではわずかな点数しか出土していないが、平城宮においては745年の平城遷都前後に造営が進められた第二次大極殿院や東区朝堂院に使用された軒平瓦であり、こちらも同范品との比較から年代的位置づけを求めやすい。すでに提示されている6663Cの范傷進行過程を参照すると (佐川1993)、K Y H103Aのほとんどを占めるK Y H103A bは平城宮で出土しているものより范傷が著しく進行している。つまり、平城遷都後しばらくのうちに、6663Cは岡田池瓦窯に范が移り、K Y H103Aが生産されたと考えられる。一方、K Y H103B (6663D) は平城京内では出土点数が少なく、出土した遺跡から生産・使用時期に迫ることは難しいが、6663型式の中でも著しく均整さの失われた文様構成から平城Ⅲ期におかれている。

以上の井手寺跡出土主要軒瓦は恭仁宮と同范関係にあるが、技法の相違や范の状態から少なく



第47図 栢ノ木遺跡同范瓦の分布(奈良時代平城京同范)

とも恭仁宮の造営が停止された743年以後に生産されたと判断できる。恭仁宮跡における出土量の少ないKYM102については、恭仁宮造瓦工房での生産が早期に終了し、范が井手寺造瓦工房へ移動していたとするならば、恭仁宮造営停止以前に井手寺への瓦生産が開始されていた可能性は残るものの、併用する軒平瓦との生産バランスを考えると恭仁宮造営停止後に井手寺へ向けた本格的な瓦生産が開始されたと考えるのが妥当である。岡田池瓦窯跡において採集されているKYM106及び改范により恭仁宮に後出することが明らかなKYM101から、井手寺の寺容が整うのは平城遷都後の可能性が指摘されていたが(中島1990・2017)、主要軒瓦の分析から創建時の瓦生産が恭仁宮造営に並行しないことが明らかとなった。

一方で、恭仁宮造営時に生産された瓦も少量ながら出土している。今回出土した瓦の中では、技法的特徴から恭仁宮造営時期に生産された軒瓦とわかるKYM154BとKYH106④⑤のほか、恭仁宮式文字瓦が該当する。また、栢ノ木遺跡第1次調査では恭仁宮大極殿へ主体的に供給された6320Aaが1点のみ出土している(野島2002)。しかし、出土した奈良時代の軒瓦の中ではごくわずかで、瓦葺建物の需要を満たすには到底足りる量ではない。これらの瓦の生産自体は恭仁宮

造営時ではあるものの、恭仁宮造営停止後に生産された主要な軒瓦に伴って従属的に使用されたと考えられ、屋根に葺かれた使用年代は恭仁宮造営時までは遡らないと考えられる。

以上の軒瓦以外に出土量のまとまっていない平城京同范軒瓦が複数種類存在する。これらの軒瓦はどのような状況により井手寺に搬入されたかは明らかではないが、先に確認したそれぞれの年代はいずれも平城Ⅲ期までにおさまる。平城Ⅲ期は暦年代では天平17(745)年から天平勝宝年間(749～757年)にあたる。つまり、平城京同范の軒瓦を見る限り、天平宝字年間(757～765)以降に位置付けられる軒瓦は出土していないことになる。この事実は井手寺と平城京の関係性を考えるうえで非常に重要である。

## ②非平城京同范軒瓦

平城京に同范例を求められない奈良時代の特徴を有する軒瓦も複数型式にわたって確認される。KYM156やKYH103C・D、KYH108は同范例が知られておらず、実態は不明である。KYH103Dについては井手寺の主要な軒瓦の一つであるKYH103B(6663D)を明らかに模倣しており、井手寺への供給を目的とした工房における生産が想定される。一方で同范例の比較的多い軒瓦もある。KYM201やKYH301は山城国分寺跡をはじめ南山城に分布の中心がある。KYH107Aは北河内から南山城において広く出土する。特に生産の中心には河内百濟寺が予想され、他の軒瓦とは供給過程に異なる背景が想定される。

これらの軒瓦に関しては、平城京同范軒瓦のように実年代の定点が存在しないため、天平勝宝年間(平城Ⅲ期)以前に供給されたものか否かを判断することは難しい。ただし、瓦当文様からは、いずれも8世紀中頃以降に生産年代を位置付けてもよいと考えられる。

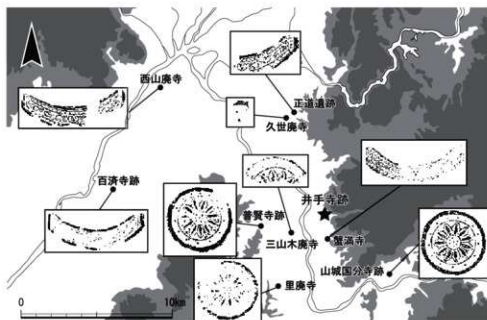
## (3)奈良時代軒瓦の来歴に関する問題

以上、塔跡出土の奈良時代に属する軒瓦から導かれる事象について述べてきた。塔は、基壇土内から出土した富壽神寶の初鋳年代(818年)が創建の上限年代として想定されるため、瓦の生産時期とは別に塔への使用時期は平安時代となる。出土状況から平安時代に位置づけられる軒瓦とは差異を見出せないため、塔には奈良時代と平安時代の軒瓦を併用して屋根を葺いたことになる。奈良時代に生産された瓦は、塔の創建まで使用せずにストックされていた可能性、他の堂舎に葺かれたのちに塔に再利用した可能性が考えられる。いかなる事象によって井手寺推定寺域の外に建立された塔周辺で奈良時代に生産された瓦が出土するのは、井手寺の来歴を考えるうえで議論が不可欠な課題であり、今後も検討を継続したい。(溝口泰久)

## 2) 柘ノ木遺跡出土の平安時代の軒瓦について

今回の調査では、井手寺推定寺域内の調査では確認されていなかった平安時代の軒瓦が数多く出土し、塔創建に際して複数の生産地から瓦を調達した状況が浮き彫りになった。

平安時代の主要な軒瓦は大きく4つの瓦群に分類される。すなわち、①KYM251-KYH302(高麗寺同范)、②KYM252・253A・253B-KYH202・203(平安宮・京周辺同范)、③KYM202A・B-KYH201(四天王寺同范・同文)、④KYM254-KYH109(同范例なし)である。このうち、①はそれぞれ563点、535点と出土量が卓越するため、塔の創建瓦と判断できる。富壽神



第48図 桓ノ木遺跡同範瓦の分布(奈良時代非平城京同範)

寶の初鑄年である弘仁9(818)年が年代の上限となり、高麗寺跡の調査において①が平安時代と指摘されてきたことも矛盾しない(中島編1989)。

②は平安宮・京周辺と同範関係にある資料群だが、瓦当文様のまとまりを持たない。KYM252の同範瓦は西賀茂瓦窯以来、吉志部瓦窯、大山崎瓦窯に至るまで生産され続けるが、KYM252は前述のとおり吉志部瓦窯産と想定される。吉志部瓦窯から大山崎瓦窯への范移動の時期は不明だが、延暦末年までには平安宮の主要施設の造営が終了したと考えられるため、それを大きく外れた時期にはならないと思われる。KYM253-KYH203の組み合わせは、平安時代中期に盛行した文様様式である。複弁4弁蓮華文軒丸瓦の初現は、淳和院・嵯峨院・檀林寺などで平安時代前期の瓦とともに出土する一群とされ(上原1997)、中心飾りに対向C字形を置き、左右に緩く展開する均整唐草文軒平瓦と複弁4弁蓮華文軒丸瓦が組み合わせるのはやや時代が降ると想定される。ただ、栗栖野瓦窯や池田瓦窯で展開する同系統の軒平瓦のなかではKYH203の文様は比較的流麗であるため、これらは9世紀中頃から大きく降ることはないと思われる。KYH202は中心に「栗」字を配し、対向C字形中心飾りの上部から単線の唐草文が展開する文様である。中心飾りの下部から単線唐草文が展開する「栗」字の軒平瓦は、天長年間に採集した上ノ庄田瓦窯の軒平瓦に連なると考えられることから、KYH203の年代も9世紀中頃と捉えたい。なお、KYH203と同範と思しき資料が檀林寺推定地付近(天龍寺付近E地点)で採集されていることから、複弁4弁蓮華文軒丸瓦と時期的に近接する。したがって、②に関しては、KYM252を除けば9世紀中頃に収まると考えられる。

③は四天王寺と同範・同文と考えられる資料群である。瓦当文様は平安時代前期のものに近いが、軒丸瓦が折り曲げ技法の横置き型一本づくりで製作され、かつ瓦当裏面下半にケズリ調整を施す点で平安京の軒丸瓦と酷似することから、平安京での同技法出現以降と捉えるべきである

付表9 推定寺域内と榎ノ木13次調査出土軒瓦の比較

## 軒丸瓦

K Y M	型式名		出土点数	
	I T M	平城	榎ノ木13次	寺域内
101a	02a	6320Aa		1
101b,c	02b,c	6320Ab,c	113	29
102	01	6130A	142	62
103	03	6134C	191	7
151		6284A	1	
152	08・09	6301C	4	2
153	06	6291A	3	2
154A		6282G	1	
154B	11	6282H	1	1
	07	6282D		1
155A	05	6225A	16	1
155B		6225E	6	
156			35	25
201			3	
202A			21	
202B			19	6
251			563	
252			7	
253A			22	
253B			55	
254			35	
001			1	

## 軒平瓦

K Y H	型式名		出土点数	
	I T H	平城	榎ノ木13次	寺域内
101	52	6671C	2	3
102A		6721C	1	
102B		6721D	5	
102C		6721F	2	
103A	53	6663C	128	3
103B	54	6663D	118	11
103C	55		15	1
103D	56		21	1
104A		6681B	2	
104B		6681C	6	
105		6682A	1	
106	51	6691A	837	55
107A	59		41	3
107B			1	
108	60		55	2
109			31	
201			44	
202			1	
203			69	
301	57・58		108	8
302			535	
303			1	

う。瓦当文様の祖型が不明な④に関しても、K Y M254が折り曲げ技法横置き型一本づくりであるので③と同様に考えたい。

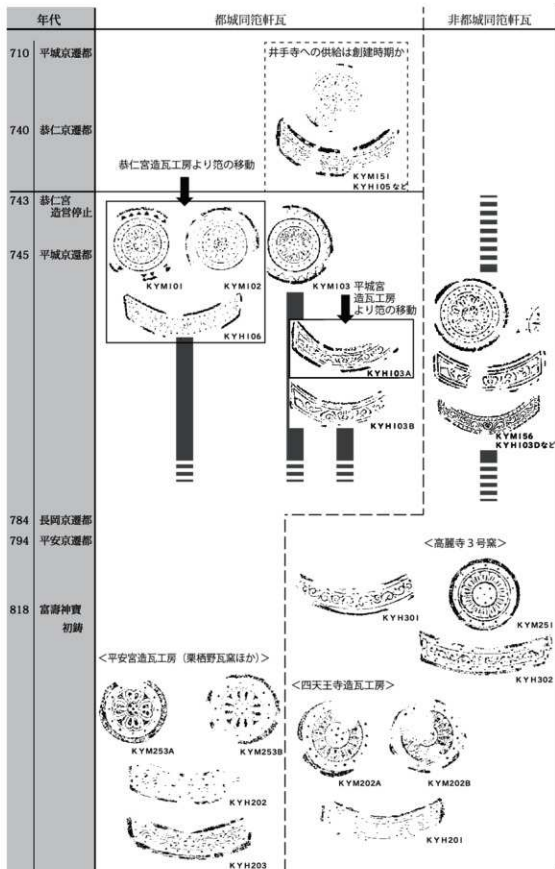
また、上記以外に多数出土した型式としてK Y H301がある。榎ノ木遺跡での出土点数は108点であり、全時代の軒平瓦のなかで4番目に多い。K Y H301は南山城諸寺院にとどまらず、甲賀寺や伊賀国分寺でも出土する。全遺跡の網羅的な検討はなされていないが、甲賀寺から山城国分寺、そして伊賀国分寺へと範が移動するとされる(畑中2010)。さらに、甲賀寺におけるK Y H301同范瓦(内裏野軒平瓦Ⅱ型式)は、出土状況から講堂・回廊の創建瓦となる可能性が指摘され、大きく8世紀後半と捉えられている。前述の通り、K Y H301②は同范瓦のなかで最も後出する一群と考えられるため、その生産年代が平安時代まで降る可能性を残す。K Y H301については、K Y H302(K m H42)の祖型となったとの指摘があり(中島1993)、南山城におけるK Y H301の生産や供給の様相を把握することが、高麗寺でのK Y H302の創出背景を解明する鍵となるかもしれない。

以上、平安時代に属すると推定される軒瓦に関して、その年代的位置づけを述べた。K Y M252を除けば、弘仁9(818)年を上限として9世紀中頃までに収まると考えられるが、各群とも生産年代を詳細に絞り込むのは難しい。出土量から現段階では、①を創建瓦、②~④をその補足瓦



第49図 桓ノ木遺跡同範軒瓦の分布(平安時代)

と捉え、塔創建までの一連の造営活動のなかで生産、供給されたと想定したい。このように、平安時代の塔建立に際しては奈良時代の創建瓦の利用を除けば、既存の造瓦工房からの製品供給で多くを賄っている状況が看取される。今後、各地の同範瓦との供給順序を明らかにし、井手寺への供給のタイミングを追究したい。(吉岡孝敏)



第50図 栢ノ木遺跡出土軒瓦の生産時期



### 3)まとめ

今回の調査で見つかった平安時代の基壇建物S B01は、15.3m(51尺)四方の塔基壇と復元される。塔基壇の規模を比較するならば、七重塔に復元される山城国分寺跡塔基壇は17m四方、平川庵寺塔基壇は17.2m四方である。現存する三重塔の薬師寺西塔基壇は13.7m四方を測り、三重塔基壇では最大級の規模である。(箱崎2012)。

以上のように、基壇の規模の比較から基壇建物S B01は五重塔であったと想定され、五重塔基壇の中でも大形の規模を測る。塔は周辺の地形で最も高い場所に建てられており、西側では、台地上から木津川と京都盆地一帯を見渡すことができる。一方、古代の木津川や官道を行き交う人々は井手の地を訪れた際には、台地上にそびえ立つ塔を見上げるように遠望していた。

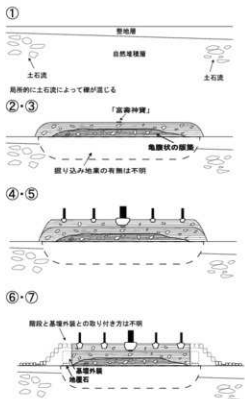
塔基壇は乱石積基壇であるが、基壇外装に大形の石材を使用すること、犬走りを造り出すなど、他の乱石積基壇とは異なる特徴を有していることから、切石の壇上積基壇を模範とした乱石積基壇であると評価できる。

発掘調査の成果をまとめると、塔基壇の構築過程は以下のように復元できる。まず、①客土によって、周辺の旧地形の上面に整地を行い、造成する。②掘り込み地業については不明であるが、礫を混ぜ込んだ版築によって基壇を造成する。③版築中には富壽神寶を鎮壇、④礎石を据えるなど、基壇土を積み上げる作業と同時に行われたと考えられる。基壇土が積み終わると、⑤柱を立て、塔本体を建造する。⑥基壇土の端を垂直に削り落とし、基壇外装と階段を設置、⑦基壇外周に犬走り、雨落ち溝、石敷を敷設したと復元される。このような復元から、塔(基壇建物S B01)の造営は、鎮壇された富壽神寶の初鋳年である弘仁9(818)年以降であると想定される。なお、現存する最も近い時期の事例としては、京都市醍醐寺五重塔(天曆5(951)年)がある。

出土した遺物の大半は瓦であった。軒丸・軒平瓦は、奈良時代中頃から平安時代中頃の瓦である。奈良時代の軒丸・軒平瓦の型式は、KYM102(6130A)、KYM103(6134C)、KYM101(6320A)、KYH106(6691A)などがあり、これまでに井手寺跡で出土している軒丸・軒平瓦と共通しているほか、平城宮跡、恭仁宮跡、南山城の諸寺などで同范の瓦が確認されている。

また、これまで不明確であった井手寺跡の平安時代の様相が判明した。出土点数が最も多かった軒瓦はKYM251・KYH302であり、塔の創建瓦と位置付けられる。高麗寺跡のみで同范例が確認され、高麗寺3号窟跡で製作されたことが判明している。

注目されるのは、平安宮・京との同范瓦である。中心飾りに「栗」の字をもつ軒平瓦は平安宮



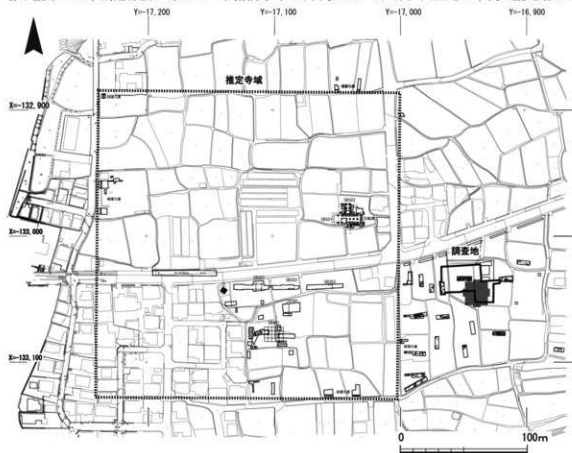
第51図 塔の構築模式図

の供給瓦窯である栗栖野瓦窯跡の製品と推定できる。また、平安時代中期に盛行する複弁4弁蓮華文軒丸瓦やそれと組み合わせる均整唐草文軒平瓦も出土しており、平安時代において宮部の瓦が一部供給されていたことが判明した。

大量の丸・平瓦の中には赤色顔料が付着する瓦もあり、塔本体が彩色されていた様子を窺うことができる。丸・平瓦には「足男」・「刑部」などと記された恭仁宮式文字瓦も含まれているほか、恭仁宮跡で類例のない文字瓦も出土しているのが注目される。恭仁宮式文字瓦の出土点数は南山城の古代寺院では最多となる。また、「理」もしくは「王」と刻印された修理司に関わる瓦のほか、「木」と陽刻された木工寮と関連する平安時代の瓦が出土しており、中央官司と関係する文字瓦の出土も特筆される。このように、軒瓦の同范関係や文字瓦から、奈良時代から平安時代にかけて、中央政府と関連の深い寺院であったことが判明した。

そのほか、鬼瓦、隅木蓋瓦、施軸垂木先瓦などの道具瓦が出土している。施軸垂木先瓦は、井手寺推定寺域内でも出土している。平面方形で緑色と白色の2色の釉薬で全面を色彩し、表面には四弁花文を線刻する。今回の調査では、これまで確認されていない文様の線刻を施す施軸垂木先瓦も2種類出土した。

このように、出土した瓦は井手寺推定寺域内の軒瓦と共通しており、井手寺に伴う塔跡であると判断される。これまでの発掘調査から、井手寺の創建は8世紀中頃と考えられているほか、寺容が整うのは平城遷都後であるという指摘もある(中島2010・2017)。出土瓦の年代と整地層から



第52図 井手寺推定寺域と今回の調査地

軒丸瓦(KYM102)、丸・平瓦、黒色土器が出土していること、基壇土に埋納された富壽神寶からも、塔は主要伽藍の整備から遅れて、平安時代に建立されたと推測される。

多量に出土した奈良時代の軒瓦は、ストックされていたか、他の建物の廃絶や移築などにより供給され、塔の創建に際して再利用されたと考えられる。

少量であるが、土器は「て」字状口縁を呈する土師器皿、糸切り底の須恵器壺、黒色土器碗など、9世紀初め頃から11世紀中頃の平安時代の土器が出土した。井手寺跡の既往の調査では、8世紀の土器が出土しているが、塔跡から出土した土器は9世紀以降のものが主体を占めており、富壽神寶の初鑄年をさかのぼる土器は出土していない。特に注目されるのは、越州窯系青磁碗、灰釉陶器の碗、皿、壺のほか、奈良三彩の盤、壺、火舎が出土している。これらは塔の法要で用いられた仏具であったと考えられる。

金属製品は、鉄釘のほか、扉の釘、茅負留先金具などの塔に用いられた建築部材が出土した。また、風鐸の舌、金銅製の風招に代表される荘厳具や仏具と考えられる遺物が出土した。このように、今回の調査では、古代寺院で用いられた多彩な遺物が出土した。

基壇周辺の瓦を多量に含む中近世の耕作土から出土した土器は、土師器や瓦器、陶磁器であり、塔は13世紀前半の鎌倉時代には廃絶したと考えられ、その後、現代までは耕作地であった事が判明した。また、基壇に使用された石材や出土遺物及び調査区の堆積層には被熱した痕跡がないため、塔は火災ではなく、老朽化に伴い倒壊したと判断される。

今回の調査で発見された塔跡は、寺域推定地外から検出したことから、主要伽藍とは別の区画を設けていたと考えられる。区画施設は検出できなかったが、同時期の寺院には、寺域の外に塔を配置する事例が多いことから、寺城南東に塔院を形成していたと推定される。地方寺院において塔院を形成するのは稀な事例であり、塔院の区画を含めると、井手寺の寺域はさらに大規模なものであった可能性がある。このように、主要堂宇である塔の遺構を確認できたことは、伽藍配置が未解明であった井手寺の実態に迫る大きな成果である。

井手寺の造営氏族や創建時期などについては、同時期の文献史料に記載はない。これまで、井手寺は橘諸兄の創建と考えられていたが、その根拠となっていた『興福寺官務牒疏』は偽文書であることが改めて明らかとなったため、再考を迫られている(馬部2020)。

井手寺と橘氏の関係を記載する資料は、平安時代末期の『伊呂波字類抄』のみであり、「末社一所 山城国井手寺内」と記載があり、井手寺に橘氏の氏神である梅宮神社の末社が祀られていることが記されている。また、『尊卑分脈』では橘諸兄を「井手左大臣」と号しており、橘氏が「井手右大臣」と称されるなど、橘氏の氏長者には「井手」という通称が使われており、井手地域と強い結びつきが考えられる(胡口1977・義江1983)。

井手寺跡の出土遺物は奈良時代中頃以降のものであり、宮都と同範の瓦を数多く用いることから、中央政府と関連の深い氏族による創建が考えられ、瓦の年代からも、奈良時代中頃に政権の中核を担った橘氏によって創建された蓋然性は高い。

橘氏は天武13(684)年に県犬養三千代が橘姓を賜ったことを始祖とする。その子、橘諸兄は天

平15(743)年に左大臣となり政権の中枢を担ったが、天平勝宝9(757)年の息子橘奈良麻呂の乱により、橘氏は一旦、政権の中枢を退く。しかし、弘仁6(815)年には、橘嘉智子が嵯峨天皇の皇后となり、再び、橘氏が隆盛を取り戻す。橘嘉智子は仏教を篤く信仰し、岩船寺の伽藍整備、嵯峨野に壇林寺を造営するなど数多くの仏教活動を行った。また、橘氏の氏神である梅宮神社を現在の地に遷し、橘氏の大学別曹である学館院を創建するなど、橘氏の再興を行っている(勝浦2022)。このような活動の中で、氏寺である井手寺において塔の造営にも関与した可能性は十分に考えられる。

井手寺跡から出土した、奈良・平安時代の宮都と同范瓦の年代、塔心礎推定位置の基壇土から出土した富壽神寶などは、橘氏が政権の中枢を担った時代と同時期の遺物である。また、KYH202は壇林寺推定地出土軒平瓦と同范と推定され、井手寺と壇林寺との関連が想定される。このように、出土遺物からも、井手寺と橘氏の隆盛が深く関連すると考えられる。

隆盛を誇った橘氏であるが、その後は衰退をみせ、橘氏は藤原氏の是定となる。永観元(983)年に参議橘恒平が没すると、公卿が絶え、政治の表舞台からも退いてゆく。源経頼の日記である『左経記』の万壽3(1026)年三月十三日条には、「婦洛之次過井手寺、破損殊甚、兩脚不障、佛像多湿損」と記されており、井手寺が荒廃した様子が描写されている。このように、井手寺の創建から荒廃は、当時の橘氏の権勢と衰退を示すのである。

今回の発掘調査は、古代における地方寺院、檀越の判明した氏寺の実像を明らかにする重要な成果である。荘厳華麗に装飾された五重塔が、井手寺と橘氏の権力のシンボルとして高くそびえ立っており、橘氏の盛衰を物語っていたのだろう。

以上のように、今回の発掘調査によって井手寺塔跡について数多くのことが判明した。しかし、塔の区画施設だけでなく、井手寺の伽藍配置と造営順序、寺域の再検討など、今回の発掘調査が新たに提起する課題と派生する問題は多岐にわたる。今後、井手寺を契機とした地域の調査研究だけでなく、広く歴史の解明に繋がれば、存外の喜びである。

栢ノ木遺跡第13次調査で発見された井手寺塔基壇は、保存が決定しており、遺構の保護を行い真砂土によって埋め戻しを行った。塔が古代寺院のシンボルであったように、井手寺塔跡が井手町のシンボルとして活用されることを深く祈念する。  
(福山博章)

注1 栢ノ木遺跡第13次発掘調査成果については、現地説明会資料のほか、福山2021・2022などで報告しているが、本概要報告書作成のための整理作業や検討を重ねた結果、変更点が生じている。

注2 軒瓦の中には、平城京と同范のものも多数存在する。そのため、平城京同范軒瓦の記載と年代は基本的に毛利光・花谷1991、奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編1996に準じる。

注3 軒瓦の同范例については、各軒瓦で遺跡が重複するため、各遺跡の初出に所在地と参考文献を明示し、2回目以降は遺跡名のみとする。なお、木津川市上津遺跡・木津北遺跡においても同范軒瓦は出土するが、遺跡内の使用を前提に搬入されたものではないと考えられるため、今回は例示を省略する。

注4 瓦范の形態は瓦当に范端が被るA型范と被らないB型范に分類され(近藤1982)、瓦当の側面に范端

の被り痕が残るものについては、A型范であることが確定する。

- 注5 I T M10の中にK Y M202Bも含まれることを実見により確認した。
- 注6 大山崎町教育委員会古岡正浩氏からご教示賜った。また、瓦全般についても近畿大学教授網伸也氏とともにご教示賜った。
- 注7 上外区の中央からひとつ左の珠文と界線の間に、大きな范傷が確認できる。
- 注8 ①には上下外区とも削り落とすものと上外区のみ削り落とすものがあるが、范傷の進行や製作技法、胎土などに違いが認められないので①としてまとめて扱う。
- 注9 丸瓦・平瓦の部分名称について、丸瓦は大脇1991、平瓦は佐原1972による。
- 注10 井手町試掘調査より出土した施種垂木先瓦と接合関係が確認できたことから、本冊にも掲載する。
- 注11 井手町による試掘調査より出土した奈良三彩と接合関係がみられたことから、本冊にも掲載する。奈良三彩の器形や技法については、森川・神野2010、神野2019に準ずる。
- 注12 器形については、神野2005に準ずる。奈良三彩に関しては、奈良文化財研究所神野恵氏、小田裕樹氏、丹羽崇史氏からご教示を賜った。

(参考文献)

- 青山 均1984「第1節 瓦碑類」『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会  
飛鳥資料館編1991『飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察』
- 網伸也1993「四天王寺古代瓦の再検討—平安宮豊楽院同范瓦によせて—」『ヒストリア』第130号 大阪歴史学会  
網伸也2011「造瓦体制の変革期としての仁明朝」『仁明朝史の研究—承和転換期とその周辺—』思文閣出版
- 石田由紀子2014「平城宮内出土の興福寺式軒瓦」『古代瓦研究VI』奈良文化財研究所  
石田由紀子2017「平城宮の625-6663型式軒瓦」『古代瓦研究VII』奈良文化財研究所
- 井手町史編集委員会1973『井手町の自然と遺跡』井手町  
稲垣哲也1983「古代の隅木蓋瓦」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会  
伊野近由1992「樋ノ口遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第48集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
茨木敏仁編2014「井手寺跡発掘調査報告書—2～10次(平成15～23年度)調査—」『京都府井手町文化財報告書』  
第15集 井手町教育委員会
- 今井晃樹2018「軒瓦からみた平城宮の造営過程」『古代』第141号 早稲田大学考古学会
- 岩戸晶子2001「奈良時代の鬼面文鬼瓦—瓦葺技術からみた平城宮式鬼瓦・南都七大寺式鬼瓦の変遷—」『史林』  
第84巻3号 史学研究会
- 上原真人1984「恭仁宮跡発掘調査報告書瓦編」京都府教育委員会
- 上原真人1997「瓦類」本中 眞編『史跡大覚寺跡発掘調査報告』大覚寺
- 上原真人2021「河内百濟寺の創建年代」『古代日本と渡来系移民—百濟郡と高麗郡の成立—』日本高麗漢渡学会
- 内田真雄編2003「桓ノ木遺跡発掘調査報告書」『京都府井手町文化財報告書』第5集 井手町教育委員会
- 梅原末治1923「井手寺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第四冊 京都府
- 梅原末治1929「山城郡喜都井手寺の遺跡」『歴史と地理』11巻4号
- 江谷 寛1978「志木庵寺跡発掘調査報告」(八幡市文化財調査報告第2集)八幡市教育委員会
- 江谷 寛2010「西山庵寺(足立寺)の発掘調査」『南山城の古代寺院』(同志社大学歴史資料館調査研究報告第9集)  
同志社大学歴史資料館
- 大道和人・松室孝樹・小松葉子2009「史跡紫香宮宮跡(内裏野丘陵地区)確認調査事業報告書」滋賀県教育委員会  
大脇 潔1991「研究ノート丸瓦の製作技術」『研究論集IX』(奈良国立文化財研究所学報第49冊)奈良国立文化財研究所  
岡崎研一2003「三山木遺跡第5次」『京都府遺跡調査概要』第106冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 尾野善裕1999「東濃窯灰釉陶器編年小考」『岐阜史学』96 岐阜史学会
- 勝浦令子2022『橋嘉智子』人物叢書316 吉川弘文館
- 川畑純也2017「平城宮の6282-6721型式軒瓦」『古代瓦研究VII』奈良文化財研究所

- 岸本直文1995「第V章 考察 2瓦埴類」『平城宮左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所学報第54冊）奈良国立文化財研究所
- 木津町史編さん委員会1991『木津町史』史料編1 木津町
- 木村捷三郎1930「山城輔枝発見の瓦窓址—延喜式に見えたる栗栖野瓦屋—」『史料』第15巻第4号 史学研究会
- (財)京都市埋蔵文化財研究所編1980『坂東善平取藏品目録』
- (財)京都市埋蔵文化財研究所編1983『北野廃寺発掘調査報告書』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊）
- (財)京都市埋蔵文化財研究所編1996『木村捷三郎収集瓦図録』
- (財)京都市埋蔵文化財研究所編1997『京都嵯峨野の遺跡—広域立会調査による遺跡調査報告—』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊）
- 京都府立山城郷土資料館編1983『山城の古瓦』
- 桑野一幸編2011『鳥坂寺跡発掘調査報告書』柏原市教育委員会
- 小池 寛・引原茂治・筒井崇史2014「(2)美濃山瓦窓跡群」『京都府遺跡調査報告集』第160冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 古閑正浩2010「河内百済寺の造瓦組織と王権」『ヒストリア』第221号 大阪歴史学会
- 古閑正浩2017「平安京初期の造瓦組織」『考古学雑誌』第99巻第1号 日本考古学会
- 古閑正浩2022『史跡大山崎瓦窓跡』（大山崎町埋蔵文化財調査報告書第65集）大山崎教育委員会
- 胡口靖夫1977「橘氏の神梅宮社の創祀者と遷座地」『国学院雑誌』78-8 国学院大学
- 胡口靖夫1977「橘氏の氏寺について—伝橘諸兄建立の井手寺を中心として—」『古代文化』29巻8号(財)古代学協会
- (財)古代学協会・古代学研究所1994『平安京提要』角川書店
- 小森俊寛1994「第二章 土器と陶磁器 2 土師器・黒色土器・瓦器・3 須恵器」『平安京提要』角田文衛監修 (財)古代学協会・古代学研究所編
- 近藤喬一編1978『西賀茂瓦窓跡』（平安京跡発掘調査報告第4集）(財)古代学協会
- 近藤喬一1982『瓦の範と瓦当』小林行雄博士古稀記念論文集考古学論考 平凡社
- 近藤義行1981『久世廃寺』『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第10集 城陽市教育委員会
- 佐川正敏1993「第V章 考察 1 屋瓦」『平城宮発掘調査報告XIV』（奈良文化財研究所学報第51冊）奈良国立文化財研究所
- 佐藤重聖2022『畿内産瓦器概観』『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真跡社
- 佐原真1972「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学会
- 四天王寺文化財管理室編1986『四天王寺古瓦聚成』
- 神野 恵2005「土器類」『平城宮発掘調査報告XVI—兵部省地区の調査—』（奈良文化財研究所学報第70冊）奈良文化財研究所
- 神野 恵2019「奈良時代寺院出土の鉛釉陶器—西大寺食堂院資料の再整理を中心に—」『奈良時代鉛釉陶器および鉛釉瓦陶の基礎的研究』平成27年度～平成30年度科学研究費補助金基盤研究C(代表：今井晃樹)成果報告書
- 鈴木久史2022『京都の鬼瓦』『鶴尾・鬼瓦の展開Ⅱ—鬼瓦—発表要旨』奈良文化財研究所
- 平良泰久編1973「平川廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集 城陽市教育委員会
- 高橋英二編1973「正道遺跡発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集 城陽市教育委員会
- 田辺征夫1975「第四章 平城宮の遺物 2 瓦埴類」『平城宮発掘調査報告VI』（奈良国立文化財研究所学報第23冊）奈良国立文化財研究所
- 田辺町教育委員会1982『田辺町遺跡分布調査概報』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第3集）
- 筒井崇史・松尾史子・谷崎仁美2012「上粕北遺跡第2次発掘調査報告」『京都府埋蔵文化財調査報告集』第150冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 常盤井智行1984「井手町岡田池瓦窯出土瓦」『京都考古』第31号 京都考古刊行会
- 中島正編1989『史跡高麗寺』（京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第7冊）山城町教育委員会
- 中島正1990「山背における播磨国系瓦出土の背景」『今里幾次先生古稀記念—播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会
- 中島正1991『山城町内遺跡発掘調査概報』（山城町埋蔵文化財調査報告書第9集）山城町教育委員会

- 中島正1993「南山城における平安初期古瓦の様相」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集 杉山信三先生米寿記念論集刊行会
- 中島 正2017「古代寺院造営の考古学—南山城における仏教の受容と展開」阿成社
- 中島 正2010「井手寺跡」『南山城の古代寺院』(同志社大学歴史資料館調査研究報告第9集)同志社大学歴史資料館
- 中島 正編2011「史跡高麗寺Ⅱ」木津川市教育委員会
- 永澤拓志1999「恭仁宮(京)発掘調査概要(平成10年度 加茂町内遺跡発掘調査概報)」(加茂町文化財調査報告第16集)加茂町教育委員会
- 奈良国立文化財研究所1959「興福寺食堂発掘調査報告」(奈良国立文化財研究所学報第7冊)
- 奈良国立文化財研究所編1973「奈良山Ⅰ」奈良県教育委員会
- 奈良国立文化財研究所1973「中山瓦窯の発掘調査」『昭和47年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報(2)』
- 奈良国立文化財研究所編1975「平城宮発掘調査報告書Ⅵ」(奈良国立文化財研究所学報第23冊)
- 奈良国立文化財研究所編1976「奈良国立文化財研究所基準資料Ⅴ 瓦編5」
- 奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編1996「平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧」奈良国立文化財研究所
- 奈良文化財研究所編2002「山田寺発掘調査報告」(奈良文化財研究所学報第63冊) 奈良文化財研究所
- 奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所編2022「薬師寺東塔発掘調査報告」薬師寺・奈良文化財研究所
- 奈良大学考古学研究会1979「文化財保護問題に関する一考察—京都府井手町における実情—」『盾列』5号
- 橋崎彰一1998「日本における施釉陶器の成立と展開」『日本の三彩と緑釉』橋崎彰一監修 愛知県陶磁資料館・五島美術館編 愛知県陶磁資料館
- 野島 永2002「井手寺跡・桓ノ木遺跡」『京都府遺跡調査概報』第102冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 箱崎和久2012「古代寺院の搭造構」『文化財論義Ⅳ』(奈良文化財研究所学報第92冊) 奈良文化財研究所
- 中村英二2010「天平7年以降の甲賀寺—近江国分寺との関わりを中心に—」『日本考古学』第29号 日本考古学協会
- 馬部隆弘2020「梅井文書—日本最大級の偽文書」中公新書2584 中央公論新社
- 平尾政幸2019「土師器再考」『洛史』12 (公財)京都市埋蔵文化財研究所
- 福山博章2021「綴喜郡井手町桓ノ木遺跡第13次調査—井手寺塔跡の発見—」『京都府埋蔵文化財情報』第141号 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 福山博章2022「シリーズ遺跡紹介12 井手寺塔跡の発見—京都府綴喜郡井手町桓ノ木遺跡第13次発掘調査成果—」『古代学研究』第233号 古代学研究会
- 藤澤一夫1967「第四章 遺物」『四天王寺』(埋蔵文化財発掘調査報告第六) 文化財保護委員会
- 藤澤良祐2008「中世瀬戸窯の研究」高志書院
- 平安博物館編1977「平安京古瓦図録」雄山閣
- (財)枚方市文化財調査研究会2015「特別史跡 百濟寺」(枚方市文化財調査報告第80集)
- 足野敏二2000『鹽澤家蔵瓦圖録』伏見城研究会
- 増田真木2012「吉志郡瓦窯跡—出土瓦整理報告書—」吹田市教育委員会
- 溝口泰久2022「京田辺市域の古代瓦」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第8号 京都府立大学文学部歴史学科
- 森川俊男・山田猛1980「伊賀国分僧寺出土瓦とその周辺」『古代研究』21 元興寺文化財研究所考古学研究室
- 森川 実・神野 恵2010「第4部 平城京の研究法 第1章 遺物 1. 土器類」『図説平城京事典』奈良文化財研究所編 終風社
- 森下 衛1996「内里八丁遺跡」『京都府遺跡調査概報』第73冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 毛利光俊彦1980「日本古代の鬼面文瓦Ⅰ—8世紀を中心として—」『研究論集Ⅵ』(奈良国立文化財研究所学報第38冊) 奈良国立文化財研究所
- 毛利光俊彦・花谷 浩「屋瓦」1991「平城宮発掘調査報告ⅩⅢ 内裏の調査Ⅱ」(奈良国立文化財研究所学報第50冊) 奈良国立文化財研究所
- 山本信夫2000「大宰府桑坊跡ⅩⅤ—陶磁器分類編—」太宰府市教育委員会
- 義江明子1983「橘氏の成立と氏神の形成」『日本史研究』248 日本史研究会(義江明子2009「日本古代の氏の構造」吉川弘文館所収)

付表10 出土土器観察表

(凡例)

口径欄の記号 復元径：( )

・小数点第2位を四捨五入、第1位で表示

器高欄の記号 残存高：( )

・/：計測不能、-：該当部位なし

底径欄の記号 復元底径：( )

・残存率：特に表記のないものは口縁部、(底)は底部

番号	種類	器種	出土地区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整ほか
113	土師器	皿	h10-ロ	(11.3)	(1.2)	—	口縁1/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	粗 径3mm以下の 白、灰白色砂粒	内・外) ナデ
114	土師器	皿	g14-ハ	(11.8)	(1.8)	—	口縁1/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	内) ナデ 外) ナデ、ユビオ サエ
115	土師器	皿	h13-イ	(10.2)	(1.3)	—	口縁2/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 径0.5mm以下の 赤褐色砂粒	内・外) ナデ
116	土師器	皿	k13-ハ	(9.6)	(1.1)	—	口縁3/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 径0.5mm以下の 赤褐色砂粒	内・外) ナデ
117	土師器	皿	i12-イ	(10.8)	(1.1)	—	口縁2/12	浅黄橙 (7.5YR8/4)	密 径0.5mm以下の 灰色砂粒	内) ナデ 外) ナデ ユビオサエ 灯火痕
118	土師器	皿	i10-ハ	(9.6)	1.4	—	口縁4/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	内・外) ナデ 灯火痕
119	土師器	皿	j10-イ 犬走り	(11.0)	(1.5)	—	口縁1/12	浅黄橙 (7.5YR8/4)	密	内・外) ナデ 灯火痕
120	土師器	皿	h12-イ	—	(1.0)	—	口縁1/12 未満	浅黄橙 (10YR8/3)	密	内・外) ナデ 灯火痕
121	土師器	皿	h11-ニ	(9.9)	(1.1)	—	口縁1/12 未満	にぶい橙 (5YR7/4)	密	内・外) ナデ 灯火痕
122	土師器	皿	h12-イ	—	(0.8)	—	口縁1/12	灰白 (10YR8/1)	密	内・外) ナデ 灯火痕
123	土師器	皿	—	(9.6)	(1.2)	—	口縁1/12 未満	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 径2mm以下の 白色砂粒、径1mm 以下の灰色砂粒、雲 母	内・外) ナデ
124	土師器	皿	h12-ハ	(9.2)	(1.2)	—	口縁2/12	橙 (5YR7/4)	密 径0.5mm以下の 白色、赤褐色砂粒	内・外) ナデ
125	土師器	皿	h13-イ	(10.8)	(1.3)	—	口縁1/12 未満	灰白 (10YR8/2)	密 径1mm以下の 淡褐色砂粒	内・外) ナデ
126	土師器	皿	h15-ニ	(11.6)	(1.9)	—	口縁1/12 未満	にぶい黄橙 (10YR7/3)	密 径2mm以下の 白色砂粒、径 0.5mm以下の黒色 砂粒	内) ナデ 外) ナデ、ユビオ サエ
127	土師器	皿	i13-ニ	(9.6)	(1.3)	—	口縁1/12 未満	にぶい黄橙 (10YR7/4)	密 径0.5mm以下の 白色砂粒	内・外) ナデ
128	土師器	皿	i14-ニ	(9.8)	(0.9)	—	口縁1/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	密 径1mm以下の 半透明白色砂粒	内・外) ナデ
129	土師器	皿	i15-ハ	(9.4)	(1.1)	—	口縁1/12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	密 径1mm以下の 白色砂粒	内・外) ナデ
130	土師器	台付 皿	j11-イ	—	(2.6)	(9.4~ 10.0)	—	にぶい黄橙 (10YR7/4)	密 径1mm以下の 白色砂粒、 0.5mm以下の赤褐 色砂粒、雲母	内) ナデ 外) ナデ、貼り付 け高台
131	土師器	高杯 脚部	i12-ニ	脚部径 4.1	(4.3)	—	—	にぶい黄橙 (10YR7/3)	密 径1mm以下の 半透明灰、白色砂粒	外) 面取り後ヘラ ミガキ
132	土師器	高杯 脚部	h11-ロ	脚部径 4.2	(6.5)	—	—	橙 (7.5YR7/6)	密	外) 面取り
133	土師器	甕	h14-ニ	(29.6)	(3.9)	—	口縁1/12 未満	淡橙 (5YR8/3)	密 径3mm以下の 半透明白色砂粒、 径2mm以下の赤褐 色砂粒	内) ナデ、ケズリ 外) ナデ、タテハ ケ
134	土師器	甕	k14-ニ	(26.0)	(4.3)	—	口縁1/12 未満	浅黄橙 (7.5YR8/4)	やや密 径1mm以 下の灰、淡褐色砂粒、 径0.5mm以下の白 色砂粒	内・外) ナデ、板 ナデ



番号	種類	器種	出土地区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整ほか
135	土師器	羽釜	j11 - 二 雨落ち溝	(26.4)	(5.4)	—	口縁 1/12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	やや粗 径2mm以下 の白、赤褐、半透明、 淡褐色砂粒	内) ナデ 外) ナ デ、貼り付け跡
136	須恵器	壺	g10 - ハ	(6.6)	(5.2)	—	口縁 3/12	灰 (N 6/3)	密	内) 回転ナデ、回 転ヘラクスリ 外) 回転ナデ
137	須恵器	壺	k13 - イ	—	(2.1)	(8.6)	底部 2/12	暗灰 (N3/0)	密	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、糸 切り
138	須恵器	壺	h10 - ハ	—	(3.6)	(4.4)	底部 1/12 未満	灰 (N5/0)	密	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、回 転ヘラクスリのち ナデ、糸切り
139	須恵器	壺	i10 - ハ	(10.2)	(5.1)	—	口縁 1/12 未満	灰 (N5/0)	密	内・外) 回転ナデ 内面自然釉付着
140	須恵器	壺	k12 - 二 k13 - イ - 二 雨落ち溝	—	(4.7)	(9.6)	底部 7/12	灰 (N4/0)	密	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、糸 切り
141	須恵器	壺	h9 - ハ	—	(4.1)	(8.6)	底部 2/12	灰 (7.5Y6/1)	密 径1mm以下の 暗灰色砂粒	内) 回転ナデ 外) 回転ヘラクスリ、 マメツ
142	須恵器	壺	i10 - イ	—	(2.3)	(8.0)	底部 3/12	灰 (N5/0)	密 径0.5mm以下の 白色砂粒	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、貼り付 け高台、糸切り
143	須恵器	壺	i10 - ロ 雨落ち溝	—	(4.4)	(9.6)	底部 2/12	灰 (N7/0)	密	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、貼 り付け高台、糸切 りのちナデ
144	須恵器	壺	k8 - ロ	—	(2.6)	(8.8)	底部 2/12	灰白 (N7/10)	密 径2mm以下の 白色砂粒、径4mm 以下の黒色砂粒	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、貼 り付け高台
145	須恵器	浄瓶	k12 - イ	—	(3.0)	(8.9)	底部 3/12	灰白 (2.5Y7/1)	密 径1mm以下の 白色、黒色砂粒	内) 回転ナデ、不 定方向ナデ 外) 回転ナデ、貼り付 け高台、糸切り
146	須恵器	甕	—	—	(4.9)	—	—	内) 灰 (N4/0) 外) 灰褐 (5YR 4/2)	密 径1mm以下の 白色砂粒	内・外) 回転ナデ
147	須恵器	甕	k14 - ロ	—	(3.0)	—	—	灰白 (7.5Y6/1) (N5/0)	密	内・外) ナデ
148	須恵器	甕	j14 - ロ	—	—	—	—	内・外) 灰白 (N7/0)	密 径0.5mm以下 の白、黒灰色砂粒	内) タタキ 外) 当て具痕
149	黒色 土器	椀	h9 - ハ	(15.6)	(2.4)	—	口縁 1/12 未満	内) 黒 (10YR1.7/1)、 外) にぶい黄 橙 (10YR7/4)	密 雲母	内) ミガキ、黒色 処理 外) ナデ
150	黒色 土器	椀	j11 - イ 犬走り	(12.0)	(2.6)	—	口縁 1/12 未満	内) 黒 (N2/0) 外) 黒 (N2/0) にぶい黄褐 (10YR4/3)	密 径0.5mm以下 の白色砂粒	内) ミガキ、黒色 処理 外) ミガキ、ナデ
151	黒色 土器	椀	i14 - 二	(16.0)	(4.7)	—	口縁 1/12 未満	内) 黒 (N1.5/0) 外) 明赤褐 (5YR 5/6)	密 径0.5mm以下 の白色砂粒、雲母	内) ミガキ、黒色 処理 外) ミガキ
152	黒色 土器	椀	g9 - 二	—	(1.7)	(7.6)	—	身込み) 暗灰 (3/0) 胎土) 灰白 (10YR 8/2)	密	内) ミガキ、黒色 処理 外) ナデ
153	黒色 土器	甕	h15 - 二	(16.0)	(3.4)	—	口縁 1/12 未満	内) 褐 (7.5YR4/2) 外) 橙 (2.5YR6/6)	密 径1mm以下の 白色砂粒	内) ミガキ、黒色 処理

番号	種類	器種	出土地区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整ほか
154	緑釉陶器	椀	k16 - ハ	—	—	—	—	釉) 灰オリーブ (10Y6/2) 素地) 灰白 (5Y7/1)	密	内) 施釉、洗線外) 施釉
155	灰釉陶器	椀	k12 - ハ・二 大走り	(15.2)	(4.6)	—	口径 4/12 底部 8/12	釉) 灰オリーブ (5Y6/2) 素地) 灰黄 (2.5Y7/2)	密	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ、貼り付け高台、ヘラキリハケ塗り
156	灰釉陶器	椀	g15 - ニ	—	(1.2)	(5.2)	底部 2/12	内・外) 灰白 (5Y7/1) 素地) 灰黄 (2.5Y7/2)	密 径 0.5mm 以下の白、黒灰白砂粒	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、貼り付け高台、糸切り
157	灰釉陶器	椀	j7 - ニ	—	(3.4)	—	—	釉) オリーブ黄 (5Y6/3) 素地) 灰黄 (2.5Y7/2)	密	内・外) 灰釉 浸けかけ
158	灰釉陶器	皿	i10 - ロ	(8.9)	(1.8)	—	口径 9/12	釉) 灰オリーブ (7.5Y6/2) 素地) 灰白 (7.5Y7/1)	密	内) ナデ 外) 回転ナデ、糸切り後ナデ
159	灰釉陶器	壺	j11 - ハ・二、j11、 j12 - イ 大走り、 雨落ち溝	—	(6.4)	(5.4)	底部 6/12	釉) 灰オリーブ (10Y6/2) 素地) 灰白 (7.5Y7/1)	密 径 1mm 以下の黒色砂粒	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ
160	青磁	椀	g10 - ハ	(16.0)	(4.5)	—	口径 1/12 未満	釉) 灰オリーブ (7.5Y5/2) 露胎) 灰 (7.5Y6/1)	密	内・外) 施釉
161	青磁	皿	i14 - イ	(14.4)	(2.0)	—	口径 1/12	釉) 灰オリーブ (7.5Y6/2) 露胎) 灰 (7.5Y6/1)	密	内・外) 施釉
162	青磁	椀	g10 - イ・ニ	—	(2.2)	(6.5)	底部 4/12	釉) 灰オリーブ (7.5Y5/2) 露胎) 灰 (7.5Y6/1)	密	内) 施釉 外) 施釉後ケズリ
163	二彩陶器	盤	g10 - ニ	最大長 4.2	最大幅 6.2	厚さ 0.7	—	内・外) 緑釉・白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径 1mm 以下の赤茶、白、黒色砂粒	内・外) 施釉
164	二彩陶器	盤	k13 - イ	最大長 3.1	最大幅 4.6	厚さ 0.65	—	内・外) 緑釉・白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径 1mm 以下の白、黒、茶色砂粒	内・外) 施釉
165	二彩陶器	盤	—	最大長 3.5	最大幅 4.4	厚さ 0.65	—	内・外) 緑釉・白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径 1mm 以下の赤茶、白、黒色砂粒	内・外) 施釉
166	二彩陶器	盤	—	最大長 2.75	最大幅 2.7	厚さ 0.65	—	内・外) 緑釉・白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径 1mm 以下の白、赤茶、黒、灰色砂粒	内・外) 施釉
167	二彩陶器	盤	g10 - ハ	最大長 3.0	最大幅 2.4	厚さ 0.7	—	内・外) 緑釉・白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径 2mm 以下の赤茶、白灰、黒色砂粒	内・外) 施釉
168	二彩陶器	盤	o10 - ハ	最大長 2.5	最大幅 3.2	厚さ 0.7	—	内・外) 緑釉・白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径 1mm 以下の白、赤茶、黒色砂粒	内・外) 施釉

番号	種類	器種	出土地区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整はか
169	二彩陶器	盤	g10 - 二 h10 - 二	最大長 20	最大幅 3.3	厚さ 0.65	—	内・外) 緑釉・ 白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径1mm以下の 赤茶、黒、白、灰色 砂粒	内・外) 施釉
170	二彩陶器	盤	j12 - ハ	最大長 22	最大幅 2.1	厚さ 0.6	—	内・外) 緑釉・ 白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径1mm以下の 赤茶、白、黒色砂粒	内) 施釉 外) 高台貼り付け 後施釉
171	二彩陶器	盤	g11 - 口	最大長 6.7	最大幅 4.25	厚さ 0.9	—	内・外) 緑釉・ 白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径1.5mm以下 の白色砂粒	内) 施釉 外) 高台貼り付け 後施釉
172	二彩陶器	盤	f10 - ハ	最大長 5.25	最大幅 3.35	厚さ 0.85	—	内・外) 緑釉・ 白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径1.5mm以下 の赤、白色砂粒	内) 施釉 外) 高台貼り付け 後施釉
173	二彩陶器	盤	g10 - 口・ハ	最大長 5.8	最大幅 3.9	厚さ 0.85	—	内・外) 緑釉・ 白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径1.0mm以下 の赤、白色砂粒	内) 施釉 外) 高台貼り付け 後施釉
174	二彩陶器	盤	—	最大長 6.85	最大幅 2.5	厚さ 0.85	—	内・外) 緑釉・ 白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径0.5mm以下 の赤、白色砂粒	内) 施釉 外) 高台貼り付け 後施釉
175	二彩陶器	盤	g10 - ハ	最大長 5.3	最大幅 2.55	厚さ 0.8	—	内・外) 緑釉・ 白釉 断) 灰白 (10YR8/2)	密 径1.0mm以下 の赤、白色砂粒	内) 施釉 外) 高台貼り付け 後施釉
176	二彩陶器	盤	g11 - 口	最大長 3.7	最大幅 3.5	厚さ 0.78	—	—	密	内・外) 施釉
177	二彩陶器	盤	—	最大長 2.5	最大幅 2.6	厚さ 0.7	—	—	密	内・外) 施釉
178	鉛釉陶器	盤	f10 - ハ	—	(5.5)	(17.1)	—	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 径0.5mm以下 の黒灰、白色砂粒	内) 回転ナデのち 不定方向ナデ 外) 回転ナデ、回 転ヘラックス)、貼 り付け高台
179	二彩陶器	盤	f10	—	(4.2)	—	—	内・外) 緑釉・ 白釉	密	内・外) 施釉
180	二彩陶器	壺	g10 - 二	—	(1.0)	—	—	内・外) 緑釉・ 白釉	密	内・外) 施釉
181	二彩陶器	壺	g10 - ハ	—	(1.2)	—	—	内・外) 緑釉・ 白釉	密	内・外) 施釉
182	鉛釉陶器	火舎	h13 - 口	最大幅 2.4	(3.7)	厚さ 1.9	—	灰白 (7.5YR8/2)	粗 径1.5mm以下 の赤、白、灰色粒	獣脚
183	土師器	皿	i12 - 口	(12.6)	(2.0)	—	口縁 1/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	やや粗 径1.5mm 以下の白、灰色粒	内・外) ナデ 灯火灰
184	土師器	皿	k14 - ハ	(11.6)	(1.6)	—	口縁 2/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 径1mm以下の 灰、赤、白色砂粒、 雲母、径3mm以下 の白色砂粒	内・外) ナデ 灯火灰
185	土師器	皿	k12 - イ	(11.6)	(1.8)	—	口縁 2/12	浅黄橙 (7.5YR8/4)	密 径0.5mm以下 の淡褐色砂粒	内・外) ナデ
186	土師器	皿	h13 - イ	(11.0)	(1.5)	—	口縁 1/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 径1mm以下の 淡褐色砂粒、径 2mm以下の半透明 白色砂粒	内・外) ナデ
187	土師器	皿	g12 - イ	(12.0)	(1.1)	—	口縁 1/12	灰白 (10YR8/2)	密	内・外) マメツ
188	土師器	皿	g14 - ハ	(9.4)	(2.2)	—	口縁 2/12	にぶい橙 (5YR6/4)	やや密 径1mm以 下の白、赤褐色砂粒	内) ナデ 外) ナデ、エビオ サエ
189	土師器	皿	g10 - イ	(6.6)	(1.8)	—	口縁 3/12	にぶい橙 (5YR6/4)	密	内・外) ナデ

番号	種類	器種	出土地区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整ほか
190	土師器	皿	h11 - イ	(6.8)	(1.5)	—	口縁 3/12	にぶい橙 (7.5YR5/4)	密	内・外) ナデ
191	土師器	羽釜	g10 - 二	(21.0)	(3.8)	—	口縁 1/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	やや粗 径 2mm 以下の半透明白色砂粒、径 1mm 以下の白色砂粒	内) ナデ 外) ナデ、鈔貼り付け
192	土師器	羽釜	k15 - ロ	(24.8)	(4.5)	—	口縁 1/12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	密 径 0.5mm 以下の白、半透明灰、淡褐色砂粒、雲母	内・外) 回転ナデ
193	瓦器	椀	i10 - 二	—	(4.7)	(5.35 ~ 5.5)	底部 11/12	暗灰 (N4/0)	密	内) ミガキ、外) ナデ、高台貼り付け 大和型
194	瓦器	椀	f10 - ハ	(14.0)	(2.4)	—	口縁 1/12 未満	暗灰 (N4/0)	密	内・外) ミガキ、ヨコナデ 大和型
195	瓦器	椀	f10 - ハ	(8.0)	(2.6)	—	口縁 1/12	灰 (7.5Y4/1)	密	内) ミガキ、ナデ、外) ナデ 大和型
196	瓦器	椀	h14 - ハ	—	(1.4)	(5.2)	底部 3/12	浅黄橙 (10YR8/3) 一部灰 (N7/0)	密	内) ナデ、外) ナデ、高台貼り付け 大和型
197	瓦器	椀	f10 - ハ	—	(1.5)	(6.0)	底部 5/12	黒褐 (2.5Y3/1)	密	内) ナデ、外) ナデ、高台貼り付け 大和型
198	瓦器	椀	j13 - ハ	(14.0)	(4.1)	—	口縁 2/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	内) ナデ、外) ナデ、高台貼り付け 大和型
199	陶器	壺	i13 - ロ	—	(2.0)	(8.4)	底部 1/12	輪) 灰白 (10Y7/2) 露胎) 灰白 (5Y8/2)	密	内・外) 回転ナデ 瀬戸
200	白磁	皿	k14 - 二	(10.6)	(3.0)	—	底部 3/12	灰白 (2.5GY8/1)	密	内・外) 施軸
201	白磁	椀	j7 - イ	(15.8)	(3.4)	—	口縁 1/12	灰白 (5Y7/2)	密	内・外) 施軸
202	白磁	底部	k15 - ロ	—	(2.0)	(6.0)	底部 6/12	灰白 (7.5Y8/1)	密	内・外) 施軸
203	青磁	椀	h15 - ロ	(16.0)	(3.6)	—	口縁 1/12 未満	明オリープ灰 (5GY7/1)	密	内・外) 施軸
204	青磁	椀	j15 - ロ	(15.6)	(2.2)	—	口縁 1/12 未満	オリープ灰 (2.5GY6/1)	密	内・外) 施軸
205	青磁	椀	g14 - 二	(12.0)	(3.4)	—	口縁 1/12 未満	明オリープ灰 (2.5GY7/1)	密	内・外) 施軸
206	青磁	椀	g15 - ロ	—	(3.2)	(5.2)	底部 1/12 未満	灰オリープ (7.5Y5/2)	密	内・外) 施軸
207	三彩陶器	盤	—	—	(2.0)	—	口縁 1/12 未満	内・外) 緑軸 断) 淡黄 (2.5Y8/3)	やや粗 径 0.5mm 以下の白灰、黒灰、褐色砂粒	内・外) 回転ナデ、施軸 華南三彩
208	土師器	皿	—	長さ 3.6	幅 2.9	厚 0.6	—	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 径 2mm 以下の赤褐色砂粒	内・外) ナデ 穿孔
209	土師器	土鍾	—	長さ 3.6	幅 1.6 × 1.7	穴の径 0.6	—	灰白 (2.5Y7/1)	密	

付編 栢ノ木遺跡から出土した石材について

京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地質学鉱物学教室 河上哲生

栢ノ木遺跡(井手寺塔跡)の基壇、基壇上、基壇下、および土石流堆積物に含まれる岩石種について、発掘現場での目視調査と発掘時の写真をもとに鑑定を行った。

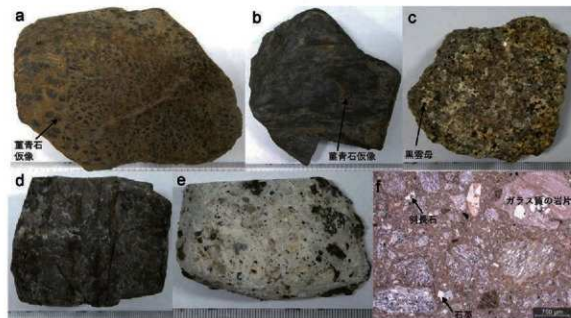
基壇に用いられた主要な岩石は、砂泥質ホルンフェルス、チャート、黒雲母花崗岩であった。写真鑑定のみによって確実性に欠けるが、閃緑岩も少量含まれる可能性がある。ホルンフェルスの多くは暗色の斑点状組織をもち、斑点の粒径は粗粒なもので1cm以上である。この斑点は董青石斑状変晶ないしはその仮像であると考えられる。チャートは白色から黒色まで色にバリエーションがある。黒雲母花崗岩は風化が進行している。

写真に基づいて判断すると、基壇下に散在する、基壇に使われた岩石と同じか4分の1程度の大きさの岩石は、主として砂泥質ホルンフェルスとチャートである。また基壇上に散在する大きな岩石は、多くが砂泥質ホルンフェルスである。

土石流堆積物に含まれる岩石は、岩石カッターで切断し風化していない断面を観察した。その大半は董青石斑状変晶を含む砂泥質ホルンフェルスであり、チャート、花崗岩、白色凝灰岩(写真)も見られた。表面状態は、基壇の岩石と類似している。

一般に、粗粒な董青石斑状変晶を含む砂泥質ホルンフェルスは、浅所に貫入した深成岩体直近の接触変成帯に形成される。栢ノ木遺跡は井手町を東西に流れる玉川の近傍に位置し、駒岩周辺の玉川河床は、井出南花崗岩(黒雲母花崗岩)の貫入で生じた接触変成帯である「董青石帯」に相

写真 土石流堆積物の岩石試料



スケールの最小目盛りは1mm。a 泥質ホルンフェルス。董青石斑状変晶の仮像が暗色の斑点状に見える。b 泥質ホルンフェルス。董青石斑状変晶は白色の白雲母集合体になっている。c 風化した花崗岩。d チャート。e 白色凝灰岩。f 白色凝灰岩の顕微鏡写真。間放ニコロ。流理構造をもつガラス質の岩片が多く含まれ、少量の斜長石、カリ長石、石英、黒雲母も含まれる。

当する(尾崎ほか, 2000)。この地域は花崗岩体直近部であることから、現在の玉川河床にも粗粒な堇青石斑状変晶を含むホルンフェルスが多数転石として産する。また、駒岩より上流の山吹山にはチャートが分布し、これも玉川河床に転石として産する。さらに、黒雲母花崗岩や閃緑岩の転石も見られる。このように、玉川河床で現在みられる転石は、柘ノ木遺跡の基壇、基壇上、基壇下、および土石流堆積物に含まれる岩石種とよく一致する。以上のことから、柘ノ木遺跡の基壇周辺で用いられた石材は、主に近隣で産する岩石(転石)であると考えられる。

引用文献:尾崎正紀・寒川旭・宮崎一博・西岡芳晴・宮地良典・竹内圭史・田口雄作(2000)5万分の1地質図幅「奈良」地質調査所。

圖 版





(1) 調査前状況(北西から)



(2) 調査前状況(北東から)



(3) 遺物出土状況(北から)





(1) 調査区全景(東から)



(2) 調査区全景(西から)



(1) 調査区全景(東から)



(2) 調査区全景(北東から)



(1)調査区全景(北から)



(2)基壇建物S B01(北から)





(1) 基壇建物 S B01 (北東から)



(2) 基壇建物 S B01 (南西から)



(1)南壁土層断面(北西から)



(2)南壁土層断面(北から)



(3)南壁土層断面(北から)



(1) 調査区土層断面全景(北西から)



(2) 調査区土層断面(西から)



(3) 調査区土層断面(西から)



(4) 調査区土層断面(西から)



(5) 調査区土層断面(西から)



(1) 基壇版築(南西から)



(2) 基壇版築(南東から)



(3) 基壇版築(西から)



(4) 基壇版築(西から)



(5) 基壇版築(西から)



(1) 基壇外装(北から)



(2) 基壇外装(北から)



(3) 基壇外装裏込め土検出状況  
(南から)





(1)地覆・犬走り(東から)



(2)地覆・犬走り(西から)



(3)地覆・犬走り(南東から)



(1)北辺階段(東から)



(2)北辺階段(西から)



(1)北辺階段裏込め土検出状況  
(南東から)



(2)北辺階段裏込め土断面  
(西から)



(3)北辺階段裏込め土遺物出土  
状況(南から)



(1) 西辺階段(西から)



(2) 西辺階段・雨落ち溝・石敷(南から)





(1)雨落ち溝・石敷(西から)



(2)雨落ち溝・石敷(東から)



(1) 雨落ち溝・石敷(東から)



(2) 雨落ち溝・石敷(東から)



(1)雨落ち溝土層断面(南東から)



(2)整地土層断面(北西から)



(3)整地土層遺物(瓦)出土状況  
(北から)





(1) 遺物出土状況(東から)



(2) 遺物(瓦)出土状況(北から)



(3) 遺物(瓦)出土状況(北西から)



(4) 遺物(瓦)出土状況(西から)



(5) 遺物(瓦)出土状況(西から)



(1) 遺物(鬼瓦)出土状況(北東から)



(2) 遺物(施軸垂木先瓦・奈良三彩)出土状況(南から)



(3) 遺物(土師器)出土状況(北から)



(4) 遺物(灰軸陶器)出土状況(北から)



(5) 遺物(銭貨)出土状況(南から)



(1) 遺物(風招)出土状況(西から)



(2) 遺物(風招)出土状況(北西から)



(3) 遺物(不明青銅製品)出土状況(西から)



(4) 遺物(風鐸舌)出土状況(西から)



(5) 遺物(茅負留先金具)出土状況(東から)



(6) 遺物(鉄釘)出土状況(東から)



(7) 遺物(鉄釘)出土状況(東から)



(8) 遺物(凝灰岩)出土状況(東から)



(1)遺構養生及び埋め戻し状況  
(北東から)



(2)遺構養生状況(北から)



(3)埋め戻し後状況(北西から)





1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



23



16



17



18



19



20



21



22



21 アップ



24



25



26



27



28



29





30



31



32



33



34



35



37



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51





57



58



60



61



—



59



—



62



—



63



—



64





(1) 出土遺物12



(2) 出土遺物13







104



105



109



110



111



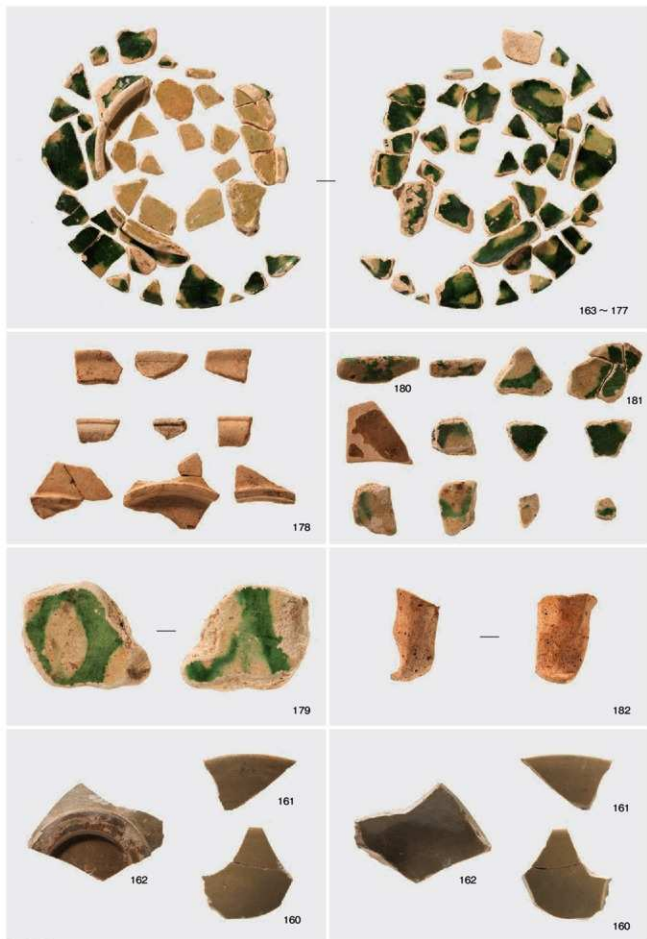
112



(1) 出土遺物16



(2) 出土遺物17







240



245



246



## 報告書抄録

ふりがな	京都府遺跡調査報告集
書名	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
副書名	
巻次	第187冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第187冊
編著者名	福山博章、田中秀弥、溝口泰久、吉岡孝紘、瀬部和宏、河上哲生
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel. 075(933)3877
発行年月日	西暦2023年3月10日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
栢ノ木遺跡第13次	京都府綴喜郡井手町大字井手小字東高月	26343	51	34° 48' 1.79"	135° 48' 53.29"	20201221 ~ 20210311	500	庁舎建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
栢ノ木遺跡	集落跡 寺院跡	奈良～中世	塔基壇 基壇外装、地覆、階段、 犬走り、雨落ち溝、石敷、 整地層	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、文字瓦、 記号瓦、施軸垂木先瓦、鬼瓦、隅木蓋瓦、 塙、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰軸 陶器、奈良三彩、瓦器輪、鉄釘、茅負 留先金具、風鐸舌、鏝、富壽神寶、風招、 飾り鋸、不明銅製品、凝灰岩	平安時代 建立の井 手寺塔跡

所収遺跡名	要約
栢ノ木遺跡13次	橘諸兄創建と伝える奈良時代寺院である井手寺の寺域外、東側から乱石積基壇の塔跡を発見。階段、犬走り、雨落ち溝、石敷などを良好な状態で検出。基壇は、礎石を含め多くが失われていたが、富壽神寶が埋納されていたことから、平安時代初頭の建立と判明。出土遺物の大半は、奈良時代後期から平安時代にかけての瓦類。塔を飾った施軸垂木先瓦や風鐸の舌や風招なども出土。



**京都府遺跡調査報告集 第187冊**

令和5年3月10日

発行 公益財団法人  
京都府埋蔵文化財調査研究センター  
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社  
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141